

目次

巻頭言				
パーク自然史文化博物館のあらたな展示方針	北海学園大学教授	手塚 薫	1	
《特集》 奥尻島での学び				
奥尻島の研修を振り返って	人文学部日本文化学科1年	稲葉 楓華	3	
奥尻島での研修を終えて	人文学部日本文化学科1年	大山 漣斗	9	
奥尻島研修を終えて	人文学部日本文化学科1年	福原 龍平	14	
奥尻島での研修を終えて	経営学部経営情報学科1年	米谷 香澄	19	
奥尻島の天候による自然の変化と植物文化	工学部生命工学科2年	藤林ひかる	25	
出合いの島	人文学部日本文化学科2年	山木 敬太	31	
北海道奥尻島におけるGIS分析と現地調査	人文学部日本文化学科4年	中村 美月	37	
青苗言代主神社例祭における7年ぶりの巡行再開ー再開に至る諸事情の検討ー	文学研究科博士(後期)課程・小樽市総合博物館学芸員	蟬塚 咲衣	43	
2025年度課程科目学生レポート				
ミニミュージアムのねらいと講評	北海学園大学教授	手塚 薫	51	
博物館経営論 ミニミュージアムの制作を終えて	人文学部日本文化学科3年	東田 純奈／二ノ宮彩愛	53	
博物館経営論 ミニミュージアムの作成を終えて	法学研究科修士課程2年	加賀谷朋伽／工学部生命工学科3年	楠本 玲来	61
博物館経営論 ミニミュージアム制作を終えて	人文学部日本文化学科3年	劔持ひより／鈴木小夜子	66	
「情報という名の資料」と「展示という教育手段」への活用	北海学園大学講師	水崎 禎	72	
博物館資料ドキュメント『木製の鳥の置物』	人文学部日本文化学科1年	伊藤 早来	74	
博物館資料ドキュメント『シルバーの指輪』	人文学部日本文化学科1年	大山 漣斗	79	
博物館資料ドキュメント『眼鏡』	法学部法律学科2年	中野 夏花	83	
博物館資料ドキュメント『ぬいぐるみ(ミズクラゲ)』	経営学部経営情報学科1年	米谷 香澄	88	
博物館資料ドキュメント『フエキくんソフトクリーム容器』	人文学部日本文化学科1年	村上 遥	93	
博物館資料ドキュメント『猫型の金時計ストラップ』	人文学部日本文化学科1年	安田菜々美	97	
編集後記			103	

*学生レポートの掲載にあたり、体裁を整える必要から表記の統一などの手直しを行っています。

パーク自然史文化博物館のあらたな展示方針

北海学園大学教授 手塚 薫

2026年2月中旬に米国のシアトルへ出張する機会があった。北海道大学大学院文学研究院教授高瀬克範先生を代表とする科学研究費助成事業による国際共同研究加速基金海外連携研究（海外連携研究）の調査で、米国のカウンターパートとともにパーク自然史文化博物館（以後パーク博物館と呼称）に所蔵されている千島列島各地の遺跡から出土した動物遺物の同定作業を実施するためであった。



写真1 パーク自然史文化博物館

2000年代に筆者も含む日米口の研究者らが千島列島各地の先史時代の遺跡で発掘調査を実施した際、人工遺物とは別に、鳥類、哺乳類、魚類からなる大量の自然遺物が出土した。これらは新型コロナウイルス感染症が流行する以前に正式な手続きを経て米国に移管され、現在、千島列島における世界大級の動物コレクションになっている。それでは、これらの分析によって何が明らかになるのだろうか。気候の変動によって遺跡周辺に出現する動物の種類や量は変動するため、先史時代の遺跡に居住する人間が、当時どのような動物を利用していたかを直接的に知る重要な手掛かりを提供してくれる。この研究は今後2年間継続するので、研究の成果については別の機会にあらためて論じることとしたい。

調査の場となったパーク博物館は、シアトル北部のワシントン大学キャンパス内にあり、最近改築された。パーク博物館の歴史は、地元の若人が1885年に結成した「ヤング・ナチュラリスト・クラブ」にさかのぼり、1899年にワシントン州立博物館として正式に指定された。1962年、シアトルの判事だったトーマス・パークの遺産と寄付により、ワシントン大学のキャンパス内に旧館が完成し、「パーク博物館」と改称された。施設の老朽化とスペースの狭隘化を解消するため、約1億600万ドル（110億円）を投じて、全面建て替えを実施し、2019年10月に、新館がリニューアルオープンした（写真1）。

このあたらしい博物館の顕著な特徴は以下の3点に要約される。

まず一番目に、1,600万点を超える収蔵資料数を誇っており、恐竜化石から先住民資料にいたるまで広範なコレクションが最大の魅力のひとつである。

つぎに目を引くのは、先住民とのパートナーシップである。収集品を単なる「モノ」として取り扱うのではなく、その資料を産み出した先住民コミュニティとの協働を尊重していることである。展示内容の構成や遺物の管理において、現代のコミュニティのメンバーを積極的に受け入れ、博物館として固有文化の継承にも貢献していることである(写真2)。それは「脱植民地化」の動きを先導することにもつながっている。



写真2 ワシントン州内の先住民を招き収蔵物のハンズオン説明会を開催

最後に、「インサイドアウト」という展示理念である。これは博物館の内と外の壁をできるだけ取り除こうとする姿勢を指す。展示室と研究・収蔵スペースがガラス面を通して隣り合っている。来館者は、展示場の通路を歩きながら、博物館のスタッフが日常的に化石をクリーニングしたり、標本を整理したりする作業風景をリアルタイムで楽しむことができる(写真3)。この試みはパーク博物館のオリジナルなものではないが、リニューアル後のパーク博物館は1階から3階までのすべてのフロアでそれを追求している。

私たちが動物遺物の同定を行っている実際の作業風景を、来館者はガラス越しにながめることができるのである(写真4)。もちろん初めのうちは戸惑いもあったが、そうした環境にはすぐに順応してしまうものである。来館者にとっては、博物館スタッフの作業を通じ、博物館の活動を至近で理解する貴重な機会となっている。



写真3 古生物ラボを覗く来館者

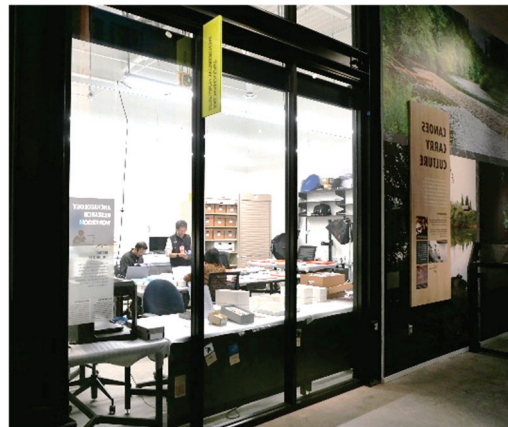


写真4 考古学ラボで作業中の我々

奥尻島の研修を振り返って

人文学部日本文化学科 1年 稲葉 楓華

1. はじめに

筆者は、2026年8月11日から15日の日程で、奥尻島研修に参加した。研修を知ったきっかけは博物館実習の授業内での研修の告知である。学芸員課程を履修しているものの、まだどんな学芸員になりたいか定まっていなかった。しかし、研修に参加することで何か得られるかもしれないという気持ちを持って参加した。研修に参加すること、奥尻島に行くことなど初めてのことが多く、見聞きすることのほとんどが新鮮に感じられた。はじめてのことだらけで緊張していたが、教育委員会の稲垣森太さんや小樽市総合博物館の蟬塚咲衣さん、先輩方と同級生のおかげで、充実した研修を送ることができた。

以下では、今回の研修で経験したことを日程ごとに整理し述べていく。

2. 研修1日目（8月11日）

研修1日目は、まず大学から奥尻島の移動があった。早朝に大学に集合し、バスに乗って、3時間かけて江差に向かった。そこでフェリーに乗船し、奥尻島を目指した。奥尻島に着いて、フェリーから降りると、奥尻島のマスコットキャラクターのうにまるくんがいた。観光客の出迎えをしているらしい。お盆の期間も相まってか、フェリー内は混んでいた。



写真1 慰霊碑

この日は青苗岬と宮津弁天宮に行った。青苗岬には慰霊碑や地蔵があった。慰霊碑には1993年7月12日の北海道南西沖地震のことを伝えるために、平成9年6月に建立されたことが書かれてあった。慰霊碑の霊の字は霊の旧字体であることが調べた結果、分かった。研修に行く前に奥尻島のことに関しては少し事前予習を行っていたため、北海道南西沖地震のこともしっていたが、研修

に参加する前までは北海道南西沖地震のことに関しては何も知らなかった。しかし、今回の研修では、北海道南西沖地震のことに関して様々な情報を得ることができた。



写真2 青苗岬にあった地蔵

また地蔵に関しては、風の影響で、正面から見て左側のみ風化や摩耗している様子が見られた。このことから、一定の方向から強い風の影響を長年受けてきたことが分かった。実際に現地に向かう途中も強い風が吹いていた。地蔵の反対側には、地蔵が収められている小屋があり、中には賽銭箱があった。現地の説明によると、明治時代に霧で遭難した船が地蔵の光によって助けられたという言い伝えがあるという。維持には費用がかかり、賽銭箱のお金が維持費用につながっているというお話も聞くことができた。この場所は映画「男はつらいよ」のロケ地として使用されたいらしい。



写真3 宮津弁天宮

続いて、宮津弁天宮を訪れた。宮津弁天宮は昭和45年に建立されたが、傷が進み、状態の悪化により、修復を行い令和7年6月に完了した。また、修復はクラウドファンディングの支援を受け、奥尻島の杉材等を使用している。宮津弁天宮に行くまでの階段は段数も多く、また急だったためのぼりきるのに結構な時間と体力を使った。階段もところどころ欠けていたりしていたので、より危険であった。多くの人にとってはのぼるのがつらいだろうと感じた。また、後日奥尻島観光協会ブログを見ると、宮津弁天宮は実際には中津嶋神社であることがわかった。事前に調べて、

地元の方々に普段どのようにして呼んでいるのか調査したかったと思った。このことで、事前学習の重要性を実感した。

2. 研修2日目（8月12日）

研修2日目は主に役場、澳津神社、津波館を訪れ、地元のお祭りに参加した。役場はブナ材を使用しており、船山奈月の「富饒の島」の作品が置かれてあった。この作品が奥尻と青苗の小中学生とともに制作したと記載されていた。この作品の近くにはバス待合スペースもあった。木材を使用し、全体的に淡色だったため、柔らかく、良い雰囲気のように感じた。

役場の数十メートル先には、澳津神社があり、昼間はそこで清掃作業や紙垂の替え作業を行った。畳を外に持って行きほこりを払ったり、ほうきや掃除機で床のごみをとったり、紙垂のはりかえの作業を行った。なかなかない経験であったが、大変であった。紙垂には雨と雷の意味があり、稲作文化を表していると神社の方が教えてくださった。

次に津波館を訪れた。ここでは北海道南西沖地震のことにに関して、様々なことを知ることができた。現地に行き、話を聞かなければわからないようなことも知ることができた。1983年の秋田県の日本海中部地震で2名の方が亡くなった経験が教訓となったため、地震が起こってもすぐに避難することができたこと、海に流されたが、漁師によって救助されたこと、消火のために家を倒壊させ消火させたことなど当時の状況を知ることができた。また津波館では、館内にコンクリートがあり、そこには亡くなった198名の方の分だけ穴が空いており、震源地の方向から光がさすようになっており、慰霊の意味も込められていると教わった。ガイドの方も実際に北海道南西沖地震の経験者で、知人を亡くしている。その方の友人が津波館内にあった作文を書いており、年に一度地震の経験を伝えているとお話も伺った。津波館を訪れ、当時の写真や経験者の思いを知ったことで、当時の悲惨さを実感した。津波館の外にある時空翔では地震の時刻ちょうどになると間から光がさすような設計になっているとも教わった。



写真4 時空翔

また、この日は言代主神社に行き、神輿も間近で見ることができた。神輿は北海道南西沖地震によって焼失したものである。クラウドファンディングで費用を集め、富山刑務所に作製を依頼したものである。富山刑務所は法務大臣賞を受賞するなど評判が高い。肩からの高さが2m以上の背が高い関西型であり、黒と金を基調にしていると海洋研究センター内の2017年の北海道新聞に記載があった。神輿の正面から見て左側に写真5の意匠がみられる。これは龍がなまずの首根っこを掴んでいる様子であり、これは地震が二度と起こらないよんという意味がこもっている。この情報を地元の人に教えてもらった。伝承になっていることもわかった。



写真5 神輿の一部分

神輿を見た後、先輩の手伝いで津波館付近の避難路の測定も行った。実際に何か所も計測し、頂上まで歩いた。計測はスマートフォンのアプリケーションを使用した。計測するだけでなく、歩いているときに草が邪魔になっていないか、階段は急ではないかなど様々な要素から避難路を見ていった。その結果、雑草で溝が隠れていたり、雑草を手でよけながら歩かないといけない箇所が多かった。雑草を刈るだけでも、避難のしやすさは変化すると感じた。

避難路の計測後には地元のお祭りに参加した。盆踊りやカラオケ大会、ビンゴ大会など行われ、とても賑やかであった。お祭りには山車の恵比須山も来ており、住民の多くがそこに集まっていた。

3. 研修3日目（8月13日）

この日は言代主神社に行き、山車や神輿についていった。神輿は最後まで、山車は途中で着いていった。



写真6 神輿の様子

神輿は国指定文化財の松前神楽が流れている。650kgもあり、人数の都合上担ぐことができなくなったが、途中3、4回担いでいる。昔は担いでいたため、鈴が鳴っていたが、いまは台車で押しているため鈴を自分たちで鳴らしているという。



写真7 山車の様子

山車は小学校低学年の子が5名くらいいて、2名ずつ交代交代で太鼓を叩いていた。地域全体で支えている印象が強かった。神輿に比べ、大きいため、神輿よりも大人数参加していた。途中までしか着いて行ってないが、山車と同じ経路を辿っていた。

山車、神輿をついて行ったが、かなりの距離、そして傾斜もあったため、歩いているだけで疲弊した。そのため山車についていくときには、体力が残っておらず、筆者は歩道に座りつつ休憩しながらついていくことになってしまった。

4. 研修4日目（8月14日）

研修4日目は、稲穂ふれあい研修センター歴史民俗資料展示室で、新聞の切り抜き、「スクラップ」を行った。スクラップは2人で担当した。スクラップ箇所は戦後80年と奥尻島や江差周辺の2つであった。筆者は戦後80年の記事のほうを担当した。特集以外にも、読者投稿欄にも戦争に関する内容が多く掲載されていたことに驚いた。スクラップ作業はところどころ印がついていたり、途中担当を変えて行ったが、作業時間ぎりぎりまでかかった。今回の作業はスクラップのみだった。しかし、日々配達される新聞を見て、切り抜き、分野ごとに整理し、貼り、保存する作業までであるため、この作業の大変さを実感した。この作業で、新聞で情報を得ることの大切さを学び、興味のある分野だけでもスクラップ作業を行おうと決心した。

5. 奥尻島で過ごして感じたこと

今回町民センターに寝泊まりした。町民センター内には至るところに虫がいた。食事するスペースには数えきれないほどの虫がいた。風呂場にはいないだろうと思っていたが、数匹いた。冬に訪れれば虫の数も減っているだろうから、冬の奥尻島に行く機会があれば、訪れてみたい。虫で奥尻島に自然を感じたが、それ以上に夜空でも自然を実感した。星が一面に浮かんでいたのだ。筆者の住んでいるところは札幌市外の町で、自然もあり、星がきれいに映ることもあるが、奥尻島の星空はそれ以上に綺麗だった。あの景色は奥尻島でしか味わえないと思った。お土産は、フェリーターミナルの2階のお土産屋で購入した。うにまるや奥尻島の名産を使用した商品が多く並んでおり、実際にとてもおいしかった。

フェリーで奥尻島に着いたときに迎えたり、うにまる公園があったり、ライトがうにの形をしていることから、奥尻島のシンボルは鍋釣岩だけでなく、ウニもシンボルになっていると実感した。

6. おわりに

今回の研修で情報を聞いたり学んだりして得ることは大事だが、実際に目で見たり、経験したり、現地や関係者の方から聞いたりして情報を得ることがいかに重要かを学んだ。さらに稲垣さんから学芸員としての仕事についても学ぶことができた。講義や博物館実習とは少し異なる学芸員の形があることを知った。稲垣さんや先生、先輩方の会話が自分にとって大きな刺激になった。この研修を今後活かすためにも大学での学び以外にも大学外の自主的な学びを行っていきたい。

最後にこのような貴重な経験をする機会を設けてくださった稲垣さん、奥尻島の方々、手塚先生、蟬塚さん、本当にありがとうございました。

奥尻島での研修を終えて

人文学部日本文化学科1年 大山 遼斗

1. はじめに

今回、私は令和7年8月11日から8月15日の間に奥尻島を訪れ、研修を行った。今回の研修に参加を決めた理由は、事前に学習したことを現地に行き、調査をするという経験をしたことがなかったため、その経験を積む良い機会となるだろうと考えたからだ。加えて、私が現在受講している博物館実習は北海道開拓の村で行っているのだが、異なる博物館に学芸員課程を受講する学生としてその施設を訪れたいと考えたからだ。また、研修以前は奥尻との交流を直接持った経験がなかったため、今回の研修では奥尻において興味の惹かれる点や気になる点を発見し、整理することで、今後の調査の方針を決定することが目的となった。本稿では一日毎にどのような活動をしたかをまとめる。

2. 研修1日目

フェリーターミナルではうにまるくんがお出迎えをしてくれた。うにまるは奥尻島のマスコットキャラクターであり、夏の間には旅行者の出迎えをしているそうだ。フェリーの往来がある度に出迎えをするマスコットキャラクターは珍しいのではないだろうか。そして、私たちは奥尻町教育委員会の学芸員である稲垣森太さんと合流した後、賽の河原公園を訪れ、稲垣さんに賽の河原に関わることを説明していただいた。賽の河原自体は奥尻に特有のものではなく全国各地にみられるものだが、稲垣さんによるとこの賽の河原は奥尻島と北海道本島の間でさまよう船人を光が照らし導いたために無事その船人は島に帰ることが出来たという話からこの場所が祀られるようになったという。また、この賽の河原は「男はつらいよ」の撮影場所となったという。次に、私たちは宮津弁天宮を訪れた。宮津弁天宮は小高い丘の上であり、岩肌に沿って作られた急な階段を昇り降りしなければ宮津弁天宮に行くことは出来ない。宮津弁天宮の中には御神輿が置いてあり、祭りの際に先述の階段を降りるそうだ。祭りということもあり飲酒した人も御神輿を運ぶそうだが、かなり危険である。また、宮津弁天宮の位置するところは元々アイヌの人々の大切な場所であるチャシであった場所だという。アイヌの人々の大切であった場所を今では奥尻島民が弁財天を祀る場所としてまた大切に扱っていることは奥尻島の歴史の深さ



賽の河原

を実感させる。そして、この宮津弁天宮は本殿の老朽化が著しい。修復されている箇所もあるのだが老朽化したまま放置された箇所もある。外壁には塗料は塗りなおされている色や箇所とそうでない箇所があり、木に関しても交換された箇所とそうでない箇所が目立つ。このように全体ではなく一部を修復、交換している理由は予算にあるようだ。決められた予算内で文化的なものの修復や保管を行わなくてはならないことは学芸員にも通ずる永遠の課題である。



宮津弁天宮の急な階段



写真上部と下部の木材が異なる様子

3. 研修2日目

澳津神社を訪れ清掃の手伝いをした。床や壁の清掃はもちろん紙垂の交換も行った。紙垂とは雷のような形に折られた紙のことであり、この紙は五穀豊穰を祈るために付けるものだ。今回清掃は行わなかったが提灯や唐草模様の装飾がされた照明器具があった。周囲が森林となっていることもあり、清掃の際に出たごみはほこりよりも虫の死骸の方が多かった印象だ。札幌市と比べカメムシとクモが多く、蛾が少ない印象であった。次に、うにまる公園を訪れたのだがその道中でした発見を紹介したい。奥尻島の街灯の一部は灯りの覆いの部分に細い鉄柱がいくつも付いていることが確認できた。これは奥尻島の名産物であるうにをモチーフとしたものであり、奥尻島を訪れた人々の目を楽しませている。さて、うにまる公園ではうにまるモニュメントを見た。名前にうにまるとあるが、マスコットキャラクターのうにまるの愛らしい顔はなく金属で作られたより本来



うにをモチーフとした街灯

のうにらしいモニュメントだ。また、うにまる公園は通常の公園とは異なる。大きく開けた場所があり、そこに円形状の石レンガにうにまるくん描かれた広い場所がある。この場所はドクターヘリの緊急離着陸場となっている。奥尻島から北海道本島への移動は基本的にフェリーとなるため、急を要する移動はその他の手段で行う必要がある。しかし、奥尻島の面積はそれほど大きくはなく、地形も大きな平地が少ないため、ヘリポートを用意することは困難である。そこで、通常時は公園として利用が出来、緊急時にはヘリポートとなるうにまる公園は奥尻の地形が生んだ画期的な場所だと言えるであろう。

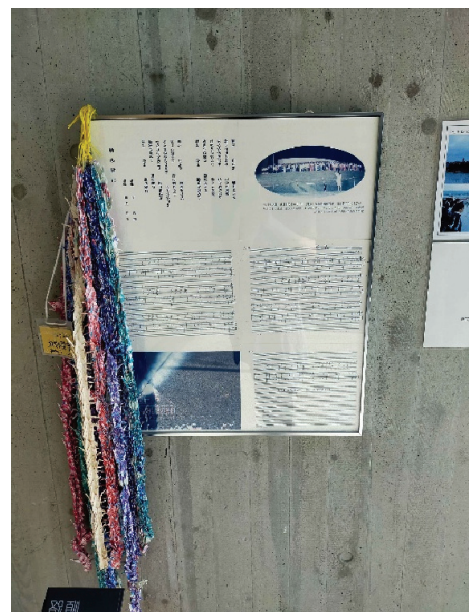


うにまるモニュメント



ドクターヘリ緊急離着陸場

そして、私たちは奥尻島津波館を訪れた。一階では被災当時のものを展示しているスペース、当時の様子を伝える写真や当時の子供たちが書いた地震に関する作文を展示するスペースがあり、当時の凄惨さを伝えるものとなっている。また、198の光というコンクリートに198個の穴があるモニュメントがある。これは被災によって亡くなられた198名を悼むために作られたものである。さらに、復興の様子を伝えるものも展示されている。その中でも印象的だったものは「岬の誓い」という震災を偲ぶ歌が展示されていたことだ。手書きの譜も展示されており、その文字には震災に対する強い思いを感じられる。加えて、北海道南西沖地震に関わるだけでなく、奥尻島の歴史についても学ぶことが出来る。複数のジオラマが展示されており、丁字頭勾玉が一際目立つように展示されていたことが印象的であった。地下には映像ホールがあり、被災から復興までのドキュメント作品を見ることが出来、音声と映像によるも



岬の誓いの展示

のであったためか当時の様子が非常によく伝わるものとなっていた。最後に、屋外にはもう一つモニュメントがある。巨大で扁平な石の中心上部にくぼみが彫られた時空翔である。地震が発生した7月12日に中心のくぼみが太陽と重なるというが、今回の研修ではそれを確認することは出来なかった。最後に、奥尻島での地域のお祭りに参加した。ビンゴ大会やカラオケ大会、参加自由の踊りなど非常ににぎやかなものであった。その中で奥尻しりふり音頭という奥尻島の曲も流れていたことが印象的であった。



198 のひかり



時空翔

4. 研修3日目

私たちは青苗言代主神社に行き、神事に参加した。その後、町の人々は神輿を担いで町内を巡るのだが、その神輿には奥尻島に固有の特性があるという。この神輿にはナマズを龍が押さえつける図が描かれており、言代主神社で神事に参加していた男性によると地震が起こらないようにその図が描かれたそうだ。この構図が描かれた神輿は日本でここだけだと言う。神輿にも北海道南西沖地震の影響がみられた。さらにその後、私たちは山車を見学した。奥尻島の人々は山車を人の手で引き、町内を巡る。私も山車を引かせていただいたのだが、複数人で引いているにも関わらず、ずっしりとした重さを感じた。そして、山車を引いて町内を巡る中で、いくつかの場所で立ち止まり、はおいというものを歌う。山車を引く男性によると元々はおいは北海道本島からきたものだという。はおいは江差などにもあり、はおいや下声さらに詞にも地域差があるそうだ。



神輿を外に出し準備する様子



山車を引く様子

5. 研修4日目

稲穂ふれあい研修センターを訪れた。この日は2人が新聞記事の切り抜き、まとめの作業を行い、2人が展示ラベルの制作を行った。私は展示ラベルの制作をした。展示ラベルの構成は稲垣さんが既に作成したものを見やすい大きさに印刷し、自立するように背面に発泡スチロールを付ける作業であった。大きさを決めるだけといっても稲穂ふれあい研修センターを訪れる人の様子を思い浮かべ、どちらの大きさに展示ラベルを作ればより見やすく、よりわかりやすくなるのかと議論をしながら進める作業は非常に面白く、興味深かった。発泡スチロールを切り出す際にも細心の注意を払った。展示に関係のないところでの雑さは展示を見るうえでのノイズとなるそのためカッターのぐらつきを抑え、時にはやり直しをした。

6. おわりに

今回の研修では様々な経験をさせていただいた。このような機会を設けてくださった手塚先生、稲垣さん、研修先で出会った全ての方々に深く感謝を申し上げます。また、私は研修3日目の午前中に気分が悪くなり、奥尻町役場青苗支所で休ませていただいた。意識がもうろうとする中で、受付にいた女性に枕や体を冷やすものを持って気にかけていただいた。その方にはいっそうの感謝を申し上げます。今回の研修では奥尻島に関わる様々な興味深い点が見つかったが、私は歌とその背景にある文化に最も興味を惹かれた。今回の研修の中でも岬の誓いや奥尻しりふり音頭、少し系統は異なるがはおいも奥尻に残る文化であろう。山車を引いていた男性によると奥尻島のおいは北海道本島のおいとは異なり、下声や詞に違いがあるという。下声や詞のどの部分が異なるのかなぜ違いが生じたのかについて非常に強い疑問を抱いた。今後は、その分野を調査するとともに、次回奥尻島を訪れる機会があれば、歌とその背景にある文化に着目し、調査を進めたい。

奥尻島研修を終えて

人文学部日本文化学科 1年 福原 龍平

1. はじめに

筆者は、2026年8月11日から15日までの4日間の日程で、奥尻島研修に参加した。研修の目的は、奥尻島にある地域文化や歴史に触れ、学芸員としての今後どのような行動をすべきかを学ぶためであり、学芸員としての姿勢や知識についてまだまだ未熟な自分にとってフィールドワークによる活動というのはとても有益なものだと考え、研修に参加した。そのため、本報告書は、どんな学芸員としての活動というよりも、奥尻で体験したことについてまとめたものが主な内容となる。

2. 稲穂地区・宮津地区

研修日一日目の8月11日、我々は先ず賽の河原へ訪れた。ここでの雰囲気は他の訪れた場所とは異なり、どこか神秘的な雰囲気を醸し出していた。その雰囲気を感じる要因のひとつなのか、奥尻島全域に生息しているクロアゲハが、ここでは一番多かった。賽の河原は、元々船の沈没者による犠牲者のための供養の土地であるが、南西沖地震の犠牲者の供養としての場所である。賽の河原には、河原の手前に置かれている地蔵一つ一つの背後に舟形の置物があることと、海岸の足場は岩石で、石が所々に積まれており、また河原近くの小屋の中にも地蔵があった。この小屋の中の地蔵には逸話があり、過去に商人が船で北海道本島から奥尻島に向かう際に、濃霧で遭難してしまい、そのときに地蔵が島まで光で遭難者を導いたという。その逸話からか、船で地蔵を北海道本土から奥尻島までの間を運ぶ行事が生まれたという。



写真1 賽の河原の慰霊碑。海の向こう側には北海道本島が見える。

次に、宮津弁天宮へ訪れた。この建物は、かなり急斜な崖の上にあり、宮津弁天宮のお祭りの際には、その崖を、神輿を担ぎながら建物のあるところまで持って登っていくという。さらに、その祭りのときには、神輿を担いでいる人は、酒を飲んだ状態で建物がある

ところまで昇り降りするという、かなり肝が据わる行事がある。建物の老朽化がすごく、今年の6月に、クラウドファンディングによる修復が完了した。



写真2 宮津弁天宮入り口
左にある階段の向こうに本殿がある。



写真3 宮津弁天宮
海を眺望することができる。

3. 奥津神社・青苗地区

研修二日目の8月12日朝、我々は奥津神社へ訪れ、掃除を行ったが、神社の掃除の際に、御神体の部屋を掃除する際、実物を見るのは初めてだったため、かなり貴重な体験をした。その後うにまるモニュメントお訪れ、周辺のタイムカプセルを見た。昼頃に、青苗地区に向かい、奥尻津波館へ訪れ、ガイドによる解説を通してと映像による解説動画での見学を行った。奥尻島は、1993年7月12日に発生した北海道南西沖地震により多大な被害を受け、津波は自身発生から3分で奥尻本島に到達したという。この津波による被害がこの震災で一番大きく、その中でも青苗地区が奥尻島の中で一番犠牲者が多かったという。当時は夜であったため、視界の悪さで避難場所が把握できなかった人や、車を使って逃げる人もいたため、渋滞が起き、逃げ遅れた人も多くいたという。私自身南西沖地震の概要は前から知っていたが、津波館で詳細を知っていくと、かなり悲惨な状況であることを知り、特に小学生の惨状を記した文章を展示したところがあり、その文章を読むと、心がいたたまれないものであった。奥尻全体の被害は甚大であったものの、全国からの支援により急ピッチで復興が行われ、2年で完全復興を遂げた。復興した奥尻島には、防波堤や避難経路などが整備されており、青苗地区は被害が大きかった分、奥尻町の中でも津波による対策がしっかり行われているように見える。また、奥尻津波館は津波以外にも、奥尻の遺跡から出土した土器などが展示されていたり、奥尻の歴史について学べる場所があった。津波館の敷地内には、「時空翔」という記念碑があり、犠牲者の名前が記されていた。



写真4 奥尻津波館の内部
当時の小学生の綴った文章に
津波の恐ろしさが伝わる。



写真5 時空翔
この窪みからとある時刻で覗くと、太陽が
窪みにはまり、希望のような光を持たせて
くれる。

奥尻津波館を出たあと、我々はその津波の避難経路について調べた。避難経路は全部で10ヶ所あり、私の他の一年生の4人で二人一組に分かれて調査を行った。避難経路の道幅や距離、スロープや階段の球面の角度、避難経路の長所や短所について調べた。避難経路は設置されているものの、雑草が経路に繁茂し、階段の段差が多く、整備は全くといいほどされておらず、老人や子供、身体に障害を持った人が逃げる際に転倒する箇所が多々あるという状況であることから、震災の教訓の風化がうかがえる。



写真6 津波の避難経路(1)
道に雑草が繁茂しており、避難の際に
通りにくい状況となっている。



写真7 津波の避難経路(2)
道路舗装が途中されておらず、路上の
真ん中にも草が生えており、つまづく
可能性がある。

調査を終えたあと、青苗言代主神社というところでお祓いをしてもらい、それが終わったあと、お祭りが行われており、町民は神輿を運びながら家を転々として町を練り歩いていた。練り歩きの際のウタは、口頭伝承で「ハオイ」「シタゴエ」という主旋律と追っかけの二つに分かれて唄われていた。青苗地区での神社やお祭り(主に神輿)は3つの組織によって運営されているという。お祭りは地元へ帰省してきた人もおり、盆踊りや様々な催し物が行われ、かなりの賑わいをも魅せていた。



写真8 お祭りで使用された神輿



写真9 青苗地区のお祭りの様子賑わいをみせている。

4. 青苗地区での神輿参加と稲穂ふれあいセンター

研修三日目の8月13日、我々は青苗地区の言代主神社の神輿の運びに参加した。「やんよ」という掛け声とともに町を練り歩き、途中神輿を振るう場面があるのだが、これは日本の諸地域でも行われており、地域差が存在するという。奥尻では波打つように神輿を振るわせていた。神輿についている鈴を鳴らしながら神輿を運んでいたが、特に深い理由はなく、とにかく盛り上げるために鳴らしているという。昔は神輿を持ちながら運んでいたが、現在は台車を使用して引っ張りながら運ぶという形態で、揺れることが少なくなったということもあり、鈴を鳴らす人がいることのも理由なのではと個人的に考える。神輿の前には天狗がいて、現人神的な存在としているのではと考える。特定の家の前に着いたとき、男の人たちが唄い始めたが、その唄にとっても勇ましさがあったことを覚えている。また、言代主神社とは異なる山車の運行にも参加し、「恵比寿山」と旗に掲げられていた山車には、子どもが数人乗っており、太鼓を交代で叩いていた。また、笛を吹く人も山車についていながら練り歩き、言代主神社の時とは異なり、楽器を使う場面が多かった。

研修四日目の8月14日は、稲穂ふれあいセンターへ訪れ、一年生は、事務作業の手伝いを行った。稲穂ふれあいセンターは、前は小学校であり、今は、奥尻の生活や文化に関するものが展示されており、さまざまな奥尻の歴史的な資料があり、興味深かった。



写真10 言代主神社の神輿



写真11 「恵比寿山」と掲げられている山車
笛を吹いている人が見受けられ、山車の中
では、子どもが太鼓を叩いている。

まとめ

奥尻島も人口減少の最中にあるため、昔あった活気が失われているのではと考えていたが、現地滞在中に青苗の祭りへ参加したり地元の人のお話を聞いた時に、昔ほどではないにしろ、まだまだ活気は衰えてはいないと思った。また、町民の間で道南訛りで会話している場面が多くみられ、道南が地元の自分にはかなり馴染みのある話し方だと感じたことも奥尻にきて思ったことである。反省点としては、積極的に話すことがあまり自分自身の中でもできていなかったことから、もっと地元の人と会話ができればよかった。奥尻島の遺跡について調べたいとも思ってもいたが、事前知識の乏しさや、ほかの仕事で行くことができなかった。もしまた機会があるのであれば、そのようなことを実現したい。

研修でお世話になった奥尻町教育委員会の稲垣さん、小樽市総合博物館の蟬塚さん、引率の手塚先生に感謝したい。



写真12 ガードレールから撮影した奥尻の海

奥尻島での研修を終えて

経営学部経営情報学科 1年 米谷 香澄

1. はじめに

私は 2025 年 8 月 11 日から 8 月 15 日にかけて実施された奥尻研修に参加した。一年生から参加し、早い段階から貴重な経験を積む機会をいただけたことをうれしく思う。8 月 11 日は賽の河原と宮津弁天宮の見学、12 日は澳津神社の掃除とうにまる公園、津波館、言代主神社の神事を見学と避難路の調査、13 日は言代主神社のお祭りへの参加、14 日は歴史民俗資料展示室での実習を行った。15 日は帰宅のための移動のみに時間を使った。以下では、今回の研修の中で学んだことについて述べていく。

2. 賽の河原

まず、私たちは奥尻町教育委員会学芸員の稲垣森太さんに賽の河原を案内していただいた。賽の河原は、奥尻島の北端に位置する稲穂岬にある。賽の河原とは、「死んだ子供が行くところといわれる冥途の三途の川の河原。ここで子供は父母の供養のために小石を積み上げて塔を作ろうとするが、絶えず鬼にくずされる。そこへ地蔵菩薩が現れて子供を救うという。」と説明されている¹⁾。奥尻島という小さな離島にも民間伝承が伝えられていることから、そもそも民間伝承がどのように生まれたのか、また、賽の河原の話はいつの時代の伝承なのか疑問を抱いた。現在では、海岸に多数の石積みが見られる様子を見ることができる。しかし、この石を積む習慣が始まったのは北海道南西沖地震の後であると教えていただいた。さらに、賽の河原の管理は一般の人々によって行われているというが、かつて奥尻島で行われていた奥尻三大祭が協力員の不足、高齢化、また、事業のマンネリ化によって無くなってしまったように²⁾、いつか管理が難しくなるのではないかと考えた。また、賽の河原にある慰霊碑は、水子供養、海難犠牲者、津波犠牲者の三者を追悼するものであるという。加えて、敷地内には地蔵堂があり、2 尊のお地蔵さんが祀られていた。この地蔵については、奥尻から江差方面へ船で渡る際に助けられたという伝承があるそうだ。そこで、このような地蔵に助けられた話を、実際に賽の河原を訪れた人に伝える方法はないのかと感じた。さらに、地蔵堂の周辺には砂岩で作られたお地蔵さんが並んでおり、風に当たるところだけ風化している様子が確認できた。そのため、風に当たることで風化が進むのは砂岩だけなのか疑問を持った。



写真1 慰霊碑



写真2 地蔵

3. 宮津弁天宮

続いて、宮津弁天宮を見学したのだが、ここでも稲垣さんに説明していただいた。宮津弁天宮は稲穂地区にあり、海に突き出た丘の上にある。ここに祀られている神は、弁財天と呼ばれる福の神であり、一般には弁天様として親しまれている。宮津弁天宮は奥尻の文化財であり、観光地としての側面も持つ。しかしながら、より知名度を高めて人を呼ぶには、単に存在を伝えるだけでなく、他の有名なものと関連付けて紹介する必要があるのではないかと考えた。また、この場所からは、細かい模様が特徴の続縄文土器と刻文期のオホーツク土器が出土しているという。続縄文土器については、道南の恵山貝塚で発掘された土器が典型とする「恵山式」と呼ばれるものではないか、という説明があった。研修では訪れなかった場所だが、青苗砂丘遺跡の方が人の往来が多かったとされる。宮津弁天宮がある場所は見張りに適しており、また海洋資源が豊富で釣りに適しているため、アイヌ語で砦や大事な場所を意味する『チャシ』と呼ばれる地域である。しかし、このアイヌ語である『チャシ』が現在の地名の由来になっていない点は意外であった。さらに、過去に修理費用を集めるためのクラウドファンディングが実施され、手すりと裏側の壁一面が修理されたという。このことから、寄付という形で協力し、応援をしたいと考える人々が存在していたことに気付くことができ、その点は非常に意義深いと感じた。一方で、屋根から水が落ちる影響により、床の一部が腐食している様子が確認され、今後も継続して管理する必要があると考えた。



写真3 裏側の壁



写真4 宮津弁天宮

4. 研修 2 日目

研修 2 日目は、まず澳津神社の掃除を行った。澳津神社は奥尻の総鎮守であり、奥尻地区に位置している。本殿の中には、稲作に適した環境をもたらすものとして、雷と雨に見立てた紙垂がある。このことから、紙垂という文化はどの神社でも見られるのかと、またその起源はどこにあるのか疑問を持った。さらに、神社を管理する人を増やすことは、専門性が高いため難しいのではないかと感じた。次に、うにまる公園を見学した。うにまる公園は小高い丘にあり、敷地内にはヘリポートが設けられていた。また、近くに佐藤義則野球展示室があると伺った。奥尻とスポーツの結びつきについて、これまで強く意識したことがなかったため、この点は意外に感じられた。その後、奥尻島津波館を見学し、続いて言代主神社の神事に参加させていただいた。神事の最中に流す曲は場面ごとに異なっており、その使い分けの基準や意味に関心を持った。また、神事を間近で見学する機会は滅多にないので貴重な機会だったと感じた。次に、津波対策として整備された避難路について、Field Maps という GPS を活用したアプリを用いて調査を行った。避難路の多くは草が生い茂っており、通行しづらい箇所が目立った。そのため、本当に毎年避難訓練が実施されているのか、また実際に避難路が使用されているのかという疑問を持った。また、GPS 機能を活用して現地調査を行うという手法を知ることができた点は、大きな学びであった。



写真 5 澳津神社の紙垂



写真 6 うにまる公園の
ヘリポート



写真 7 避難路

5. 奥尻島津波館

奥尻島津波館で、ガイドの方から説明を受けた。奥尻島津波館は青苗地区にある、震災の被害から復興までの記憶を伝える施設である。北海道南西沖地震は、平成5年7月12日22時17分に発生した。震災前の青苗地区では、多くの漁師が海沿いに住んでおり、家が504軒あった。当時、日本海中部地震(約10年前)の津波の経験から、住民は地震発生後すぐ高台に避難した。しかし、地震が夜間に発生したため車で避難した方たちが渋滞してしまった。このことから、北海道南西沖地震よりも前に津波を経験しているのにも関わらず多くの被害が出てしまったことが、被災した事実以上に傷になっているのではないかと推測した。その後、漁船で火災が発生し、車のガソリンや灯油に火がうつってしまった。高台から2台の消防車で消火を試みたが逆風のためできず、残っていた家については所有者の許可を得た上で、破壊消火を行ったそうだ。また、地震により岬地区の地盤が下がり、住民は沖から6m離れたところに住むことになった。さらに、この津波により42か所の避難所や漁師が避難するための高架道路が設置された。そして、1998年に完全復興したという。津波館の外には時空翔というモニュメントがあり、北海道南西沖地震が発生した7月12日にモニュメントの形に合わせて夕日が沈むように計算されているそうだ。加えて、敷地内にある慰霊碑が自然災害伝承碑に登録されているという。自然災害伝承碑とは、平成30年に発生した西日本豪雨をきっかけに地図記号となった、過去に発生した自然災害の様相や被害状況等が記載されている石碑やモニュメントのことである³⁾。他の日本にある自然災害伝承碑についても知りたいと考えた。



写真8 時空翔

6. 青苗言代主神社例祭

研修3日目は青苗言代主神社例祭の神輿渡御に参加した。この例祭は、神社役員、青苗神輿保存会、恵比須山協賛会によって行われている。このことから、祭りは神社役員の方たちだけでは成り立たないことが分かった。2019年に運営の代替わりがあったことで例祭が無くなり、その後もコロナウイルスの影響で行うことができなかったが、今年復活したそうだ。また、北海道南西沖地震でお神輿が消滅してしまったが、その8年後に復活したという。現在使用されているお神輿は富山の刑務所で作られた。この神輿には、地震の象徴であるナマズが龍に抑え込まれている構図の彫刻があった。かつては船魂山と恵比須山の2つの山車があったが、現在は恵比須山の山車のみが残っている。山車行列は、依頼のあった家に歌を歌いに行く。漁師の家には大漁祈願の歌を、商売をする人の家には商売繁盛の歌を歌うという。この際、はおいという歌を先導する人と、それに続く下声と呼ばれる人がいるという。以上の話を通して、他のお神輿、山車の文化と比較したいと感じた。

このとき、神社役員の方および神輿渡御の参加者から聞き取り調査を行うことができた。

まず、神社の建築様式について神社役員の方から話を伺った。神社の屋根には、千木と鯉木という木が取り付けられている。千木の種類と鯉木の数で、その神社に祀られている神様の性別が分かるという。千木の形には、先端を地面に対して垂直に削る外削ぎと、水平に削る内削ぎがある。外削ぎは祭神が男神であり、内削ぎは祭神が女神であるといわれているらしい。また、鯉木の数が奇数なら男神、偶数なら女神を祀っているという。これらの話から、神社の建築について興味を持った。次に、神輿渡御の参加者の方から、過去に行われていたムーンライトマラソンとお神輿についてお話を伺った。現在、ムーンライトマラソンは、コロナウイルスの影響に加え、人が集まらないことや受け入れ態勢が整っていないことを理由に中止されている。島が受け入れられるのは多くて500人ほどであるそうだ。また、重さ約650kgのお神輿は、基本的に台車に乗せて運んでいた。本来は担ぐことで振動により鈴が鳴る仕組みであったが、現在は手で振って鳴らしているとのことであった。



写真9 お神輿の彫刻



写真10 山車



写真11 お神輿

7. 稲穂ふれあい研修センター歴史民俗資料展示室

研修4日目は、稲穂ふれあいセンター歴史民俗資料展示室で解説パネルの作成を行った。厚紙にキャプションを印刷し、その後パネルを切って貼った。作業を進める中で、最初にどのサイズで印刷するか悩んだことから、パネルの大きさを考えるときは、展示室のどこに置くのかを気にすることが必要だと実感した。また、作業当初は上手にパネルを切ることが出来ず苦戦したため、慣れが必要だと感じた。

8. おわりに

今回の研修では、1日目から3日目は奥尻島の歴史や文化について、4日目は特に学芸員の仕事について学ぶことができた。この経験を通して、今後の勉学や自分の研究したい

分野を決める際に、この研修での経験を活かしていきたいと考えている。

最後になりましたが、研修を通してお世話になった学芸員の稲垣森太さん、学生を引率くださった手塚先生、ご助言くださった小樽市総合博物館学芸員の蟬塚咲衣さん、研修メンバーの先輩たちに深く感謝を申し上げます。

註

1) 小学館大辞泉編集部編（2012）大辞泉 小学館

2) 奥尻町. “奥尻三大際の廃止について” 2024-05-18,

<https://www.town.okushiri.lg.jp/hotnews/detail/00008560.html>

(参照 2026-01-23)

3) 国土交通省国土地理院. “自然災害伝承碑” 2025-12-25,

<https://www.gsi.go.jp/bousaichiri/denshouhi.html>

(参照 2026-01-24)

奥尻島の天候による自然の変化と植物文化

工学部生命工学科 2年 藤林 ひかる

1. はじめに

筆者は2025年8月11日から15日までの5日間、昨年につき二度目となる奥尻島研修に参加した。本年はお祭りやバーベキュー、花火ができ、とても楽しむことができた。

筆者の本年の活動のテーマとしては、前回の研修で島の豊かな自然に強い関心を抱いたことから、今回は特に「動植物」に焦点を当てて活動した。当初は、昨年多く観察された大型の昆虫類（アブ、クモ、ゲジ）と植物を対象とする予定であった。しかし、本年は昆虫の出現状況が異なったため、最終的に「アブ」と「植物」の2点に絞り、調査・観察を進めた。

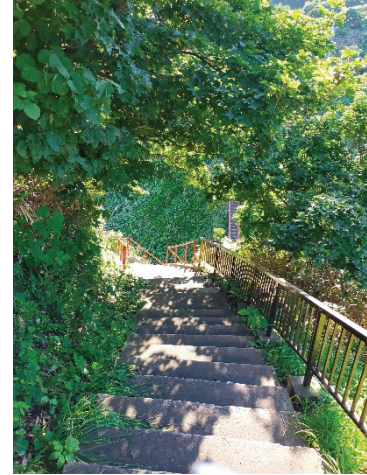
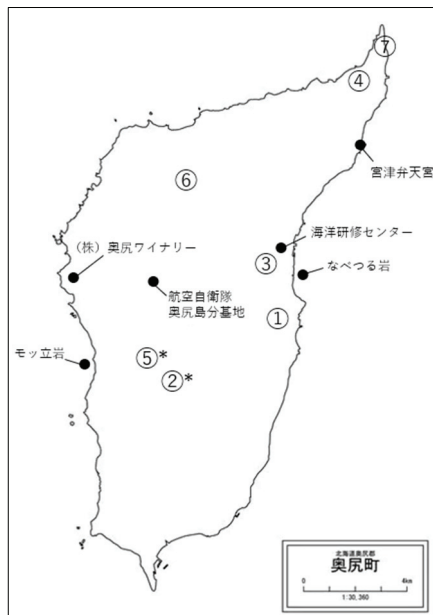


写真1 宮津弁天宮から見た大自然

2. 活動内容

今回の研修では、島内の主要な7地点において調査・観察を実施した。

主な調査場所は以下の地点の周辺である。これらは自然が豊かで、植物の群生やアブの飛来が期待できる地点として選んだ。



- ①奥尻町町民センター
- ②新生第2団地
- ③仏沢一号川（写真2）
- ④鷗崎神社（写真3）
- ⑤青苗集会施設
- ⑥奥尻21世紀復興の森
- ⑦賽の河原

図1 ①から⑦の位置（*は大まかな位置）

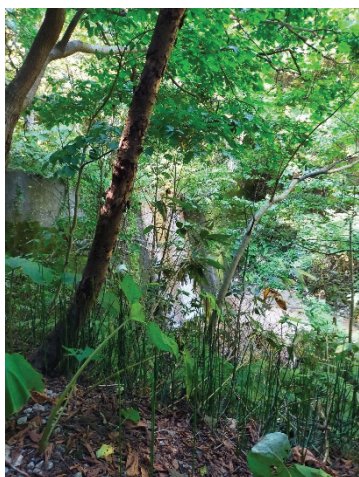


写真2 ③仏沢一号川



写真3 ④鷗崎神社

調査方法としては、各地点で観察して昨年度の観察記録を基準とし、本年度の発見しやすさや活発さを「出現頻度」として評価した。また、国土交通省気象庁の令和6年（表1¹⁾）と令和7年（表2²⁾）の同期間における以下の気象データを比較して考察した。

表1 令和6年の気象データ

令和6年	8月11日	8月12日	8月13日	8月14日	8月15日
平均気温 (°C)	23.8	24.7	23.8	23.7	23.2
平均湿度 (%)	97	95	100	100	97
合計降水量 (mm)	0	0	12.5	0	0
風速 (m/s)	8.6	10.8	6.8	7.2	7.8

表2 令和7年の気象データ

令和7年	8月11日	8月12日	8月13日	8月14日	8月15日
平均気温 (°C)	25.5	25.8	25.2	25.3	25.5
平均湿度 (%)	87	85	79	86	87
合計降水量 (mm)	0	0	0	13.5	0
風速 (m/s)	4.9	6.8	6.1	11.9	11.7

¹⁾ 気象庁ホームページ「過去の気象データ検索（奥尻 2024 年）」

(https://www.data.jma.go.jp/stats/etrn/view/daily_a1.php?prec_no=24&block_no=1199&year=2024&month=8&day=11&view=)

²⁾ 気象庁ホームページ「過去の気象データ検索（奥尻 2025 年）」

(https://www.data.jma.go.jp/stats/etrn/view/daily_a1.php?prec_no=24&block_no=1199&year=2025&month=08&day=11&view=p1)

3. アブ

アブ（写真4）について本年は昨年よりも活発だったと感じた。また、昨年よりもアブの死体が少なく活動中のアブが多いことも気になった。これはアブの生態的特徴と深く関係していると考えられる。アブの生態的特徴は以下の3つの気象条件が関わっていると考えられる。



写真4 車の窓に留まったアブ

- ・気温：アブは変温動物であることから外の気温の上昇により活動が活発化する。特に18℃～30℃の間が活動に適した温度である。
- ・湿度：活動するにはある程度の湿度が必要である。しかし、高すぎると羽が湿り飛行しにくくなる。
- ・風速：風が強すぎず安定していた方が飛行しやすい。

以上の気象条件から表1と表2を参照すると、気温については昨年に比べ、本年は25℃代で安定していた。これにより奥尻島のアブは25℃代の気温で生存率と活動性が向上している可能性が考えられる。

次に湿度に関しては、昨年（95%以上）のような極端に高い状態から、本年（79%～87%）は適度な湿度へと低下した。この変化が、アブにとって飛行時の身体的負荷を軽減し、より活発な動きを可能にしたと考えられる。

さらに風速についても、本年は昨年よりも穏やかで安定した日が多かった。それにより、飛行等の活発な動きがしやすくなったことも推測できる。

4. 植物・菌類

植物に関しては、仏沢一号川の周辺で観察したオオウバユリが印象的だった。また、復興の森で観察した多種類のキノコも印象に残っている。

（1）オオウバユリ

オオウバユリは、湿り気のある林内や沢沿いに自生するユリ科の植物である。草丈が、1.5m～2.0mで花数が多いことで特徴的である。私が観察した個体も1.5mほどあった。



写真5 オオウバユリ

オオウバユリが自生する気象条件には以下の関わりがある。

- ・気温：夏場の17℃～27℃の間が開花や種子の形成が促進する。
- ・湿度：適度な湿り気を好む。極端な乾燥に弱い。

以上の気象条件から表1と表2を参照して考察する。2つの表から昨年よりも本年の方が湿度が低下していることが分かる。しかし、オオウバユリは元気に生育していた。なぜなら、生息していた場所が仏沢一号川であり、沢沿いに自生しており、適度な湿度が維持されていたからだと考えられる。

オオウバユリはアイヌ文化の代表的な保存食である。根からとれるデンプンを「くず湯」のようにして飲んだり、デンプンの繊維を発酵して干して保存したり、団子を作る等の重要な食料だった。このことから、奥尻島民の方々にもオオウバユリを食べる文化があるのかとても気になった。

(2) キノコ

復興の森の散歩コースでは7種類のキノコを発見した。

散歩コースに入ってすぐに見つけたのがヤマドリタケモドキ(写真6)だった。復興の森は広葉樹林が多いことと、柄の部分全体に網目模様がある特徴からヤマドリタケモドキだと判断した。

次はドクベニタケ(写真7)である。鮮やかな赤い傘と靴でつついたときのもろさやチョークのような白い粉を出して崩れたことからドクベニタケと判断した。

続いてはオオイチョウタケ(写真8)である。このキノコは倒木に寄生していた。群生していたので非常に見応えのあるキノコであった。このように群生している点や、成長すると傘の中央がくぼんでいるという点等からオオイチョウタケと判断した。

最後はカエントケ(写真9)である。炎のように突き出しているような形でキノコ特有の「傘」や「ひだ」がないことからカエントケと判断した。このキノコはナラ枯れの影響で増えるので、周囲でナラ枯れがあった可能性がある。触れると皮膚炎を起こす猛毒キノコである。

他にもキノコ(写真10)(写真11)を発見したが、筆者の知識不足により名称がわからなかった。次に行ったときに確認したい。



写真6 ヤマドリタケモドキ



写真7 ドクベニタケ



写真8 オオイチョウタケ



写真9 カエントケ



写真10 名称不明のキノコ



写真11 名称不明のキノコ

5. 本研修の総括

今回の奥尻島研修は、2年連続で同じ時期で調査できたことからわずかな気象条件の違いが自然に大きな影響を与えていることを実感できた。また、動植物の生態を分析するだけでなく、それらが人の文化や歴史にどのように繋がっていたのか考えることができる有意義な機会となった。

アブやキノコについては、気象データや公開されているネットの情報から生物の動きを論理的に理解できるものと、理解できないものがあることを実感した。特にキノコの同定はとても難しく時間がかかった。インターネットに載っているものと形が違っているが実は種が同じものがよくある。このように苦労したからこそ自然科学的な観察眼を少し養うことができたと思う。次に奥尻島に行く際は観察だけでなく、島民の方々に聞き取り調査もしてより詳しく知りたい。

一方でオオウバユリに関しては文化的な一面もあり、面白さを感じた。歴史や文化の視点から見ると人々の貴重なデンプン源であった。オオウバユリの文化については、いつ、どのようにしてオオウバユリを利用されていたのか知ることが今後の課題にしたい。また、今回考察した動植物と気象データとの関係についても深堀りしていけば、何十年も前の奥尻島の動植物の状態を辿る手がかりになると考えると、このような分野に魅力を感じた。

フィールドワークを通して学芸員の重要な考え方を理解した。それは、理学的な考え方をもちつつ、歴史や文化と結びつけ多方面から考える事である。そうすることで、知識も調査も広がっていくと思う。

最後になりましたが、お世話になりました奥尻町教育委員会事務局学主任芸員の稲垣森太さん、引率して下さった手塚先生、助言をいただいた小樽市総合博物館学芸員の蟬塚咲衣さん、先輩として支えて下さった中村美月さん、研修メンバーの方々に深く感謝いたします。

参考にした資料

- ・国土交通省気象庁ホームページ
https://www.data.jma.go.jp/stats/etrn/view/daily_al.php?prec_no=24&block_no=1199&year=2024&month=8&day=11&view=p1 (2025年12月1日閲覧)
- ・農研機構ホームページ「アブ類の体温条件と飛翔能力の関係」
<https://www.naro.go.jp/project/results/laboratory/nilgs/1995/nilgs95-2-052.htm> (2026年1月5日閲覧)
- ・アース製薬「キャンプや川釣りなど夏のレジャーはアブに注意！ハチやブユとの違いは？」
<https://www.earth.jp/gaichu/wisdom/sonota/abu.html> (2026年1月5日閲覧)
- ・あきた森づくり活動サポートセンター「山野の花シリーズ95 オオウバユリ、ヤブカラシ」
<https://www.forest-akita.jp/data/sanya-hana/95-oouba/oouba.html> (2026年1月5日閲覧)
- ・ウポポイ（民族共生象徴空間）「ウポポイ PR キャラクター「トゥレツポん」」
<https://ainu-upopoy.jp/character/outline/> (2026年1月6日閲覧)
- ・公益社団法人農林水産・食品産業技術振興協会「ヤマドリタケモドキ」
<https://www.jataff.or.jp/kinoko/708.htm> (2026年1月5日閲覧)
- ・東京キノコ同好会
<http://www.tokyokinoko.com/zukan/to/dokubenitake.htm> (2026年1月5日閲覧)
- ・コトバンク「ドクベニタケ」
<https://kotobank.jp/word/%E3%81%A9%E3%81%8F%E3%81%B9%E3%81%AB%E3%81%9F%E3%81%91-3161490> (2026年1月5日閲覧)
- ・公益社団法人農林水産・食品産業技術振興協会「オオイチョウタケ」
<https://www.jataff.or.jp/kinoko/220.htm> (2026年1月5日閲覧)
- ・三重県ウェブサイト「オオイチョウタケの安定生産に向けて」
<https://www.pref.mie.lg.jp/ringi/hp/83415046144.htm> (2026年1月5日閲覧)
- ・厚生労働省「自然毒のリスクプロファイル：カエンタケ (Podostroma cornu-damae), ニクザキン科ツノタケ属」
<https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000143427.html> (2026年1月5日閲覧)

出会いの島

人文学部日本文化学科 2年 山木 敬太

1. はじめに

大学生になり、奥尻島へ足を踏み入れることになるとは高校生の頃の筆者には想像のできないことであった。また、発掘調査に参加するという夢も奥尻島で叶え、その夢はやがて学芸員になるというものになった。令和7年度の奥尻研修含め、一部ではあるが2年間で振り返る。

2. 2025年度奥尻島青苗遺跡発掘調査

2025年4月27日から5月4日にかけて行われた福島大学行政政策学類考古学研究室菊地芳朗教授による青苗遺跡の調査に参加した。2024年度には同じく福島大学行政政策学類考古学研究室菊地芳朗教授による青苗遺跡の調査があり、1日参加させていただいた。1週間参加するのは筆者も初の経験であり、学びが大きかった。溝の年代の検討や土層をどう分けるかの分層や、土層の断面図など非常に勉強になった。

ただ掘る、作業をするのではなく、何を目的にそれをしているのかを考えるということを菊地先生から学んだ。また、一度掘った場所は汚さないことを心がけ、道具は散乱させずにまとめておく。疲労からそれを疎かにしてしまわないように今後の発掘の機会では注意したい。



図1 2025年4月30日の現場（山木撮影）

3. 2025 年度奥尻島研修

2024 年度に引き続き、2025 年度も奥尻島研修に参加できた。筆者のテーマは考古学で、稲垣さんと兼ねてから話題に上がっていた米岡 5 遺跡に連れて行っていただいた。その遺跡は奥尻島かつ、海岸段丘を 50m 程降りた砂浜に位置する。年々、波で砂が侵食され遺物が顔を見せる。遮るものが全くない灼熱で目眩がしそうであった。



図 2 1974～1978 年の奥尻島米岡 5 遺跡周辺の上空写真(地理院地図・年代別の写真より筆者作成)



図 3 全国最新写真(シームレス)の奥尻島米岡 5 遺跡周辺の上空写真(地理院地図・年代別の写真より筆者作成)

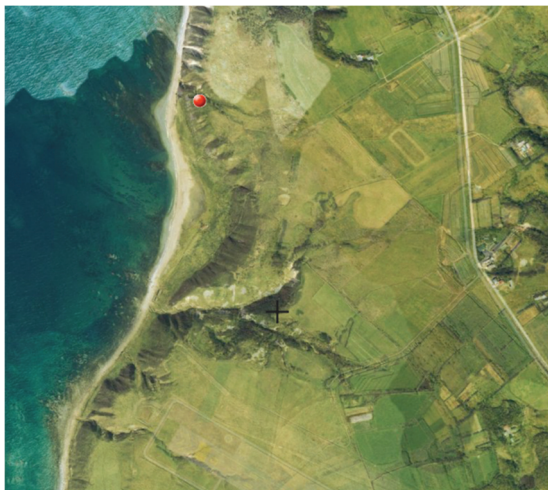


図 4 図 2 と図 3 を合わせたもの(地理院地図・年代別の写真より筆者作成)



図 5 図 3 に加筆(地理院地図・年代別の写真より筆者作成)

図 2～図 4 は 1974 年から現在までの海岸線の変化を示すため用意した。また、3 つの図に共通して見られるポイントは埋蔵文化財包蔵地登録されている米岡チャシの位置、図 5 のポリゴンで囲った部分は米岡 5 遺跡の範囲である。図 4 を見ると海と陸の境界線が変化していることがわかる。年を重ねるごとに遺跡の遺物包含層である砂丘が削られており、至急発掘調査が必要な遺跡である。

帰路の途中、海老原建設の自販機で休憩した時に稲垣さんが自販機の前に財布を忘れて

しまったのには焦った。2人ともくたくたであった。

研修では、旧奥尻町役場・ホテル建設予定地横にある澳津神社の清掃をさせていただいた。澳津の読み方は「おくつ」ではなく、「おきつ」である。現在の本殿は大正15年（1926年）に立てられたものであるという（本久2020）。100年という古さに驚く。

また、なかなか見学できない航空自衛隊奥尻分屯基地の見学が叶った。基地内には奥尻島に3つある一等三角点が1つ存在しており、筆者が残すのは青苗地区にある1つだけとなった。基地を案内していただいた航空自衛隊奥尻分屯基地の皆様、感謝申し上げます。



図6 航空自衛隊奥尻分屯基地から眺めた青苗地区（図6左側）と米岡5遺跡（図6中心付近）を写す（2025年8月14日筆者撮影）。

4. 目梨泊遺跡調査～オホーツクで過ごした1週間～

筆者は福島大学行政政策学類考古学研究室の目梨泊遺跡の調査に参加した。期間は2025年8月17日から8月25日までで、筆者は8月18日から8月24日まで参加した。目梨泊遺跡は国指定名勝に指定されている神威岬を望む立地が特徴で、古くから調査が行われ、多くの住居や墓壇が発見されているオホーツク文化を代表する遺跡である（氏江ほか2024）。

筆者が参加したのは小川に挟まれた舌状台地の先端部に位置するピットである。表土を3センチほど掘り下げると、丸い小さな石がゴロゴロ出土する。最初は1m×1mの範囲であったが、丸い小さな石の広がり確かめるため、少しずつ拡張していった。この小石は目梨泊遺跡に特有な墓制を示している可能性がある。目梨泊遺跡の墓制は遺体を埋葬した土の盛り上がりの上に砂利を撒くと言うものだ（佐藤1994）。最終的に小石は約縦2.5m×横

1mの広がりを見せた。今回は小石の広がりを確認したところで冬を迎える準備をした。小石の広がりの下に何があるかは2026年度の調査に期待したい。

目梨泊で過ごした1週間は非常に濃いものであった。オホーツク文化の遺物に実際に触れることができたのは良い刺激になった。筆者が思ったよりも黒曜石のフレーク、細かい骨が多く、ますます考古学の奥深さを体感した。

5. 10月26日奥尻シンポジウム

奥尻島青苗遺跡出土のヒスイ製の丁字型勾玉の謎に迫るシンポジウムが開催された。シンポジウムでは会場のお手伝いや、録音、撮影をさせていただいた。

登壇者は奥尻町教育委員会主任学芸員稲垣森太氏、福島大学教授菊地芳朗氏、大阪大学特任教授福永伸哉氏、札幌学院大学教授臼杵勲氏、北海道博物館事業部長鈴木琢也氏（発表順）の5名。最後に総合討論で話を深める。

各氏は青苗遺跡で1977～1978年にかけて行われた調査で発見された墳墓（以下青苗墳墓）（佐藤ほか1978）の被葬者や年代について考察した。全ては載せ切ることにはできないが、筆者なりに簡略にまとめる（下記参照）。

稲垣氏は奥尻島に流入したオホーツク文化と古墳文化を吸収した続縄文時代から奥尻島に住む在地の有力者が被葬者とし、年代は8世紀とした。また、有力者は漁業の達人を例に挙げ、単に人数が多いことからリーダーが誕生したというものではないと述べた。想定する青苗墳墓の年代である8世紀前後の奥尻島には、それほど多くの人口はいないだろうと言うことを踏まえてである（稲垣2025）。

菊地氏は在地の有力者である擦文文化の担い手が被葬者であり、青苗墳墓で出土した太刀をはじめとする副葬品の年代から8世紀とした。副葬品は海洋活動を通じて経済力や権力を高め獲得したとする。また、三浦地点と青苗墳墓の接続地点である福島大学Cトレンチにて完形の土器が出土した。完形の土器は擦文時代後期のものであり、青苗墳墓の年代とする8世紀とは年代のずれが生じている。そのずれをのちの時代の人々が青苗墳墓近くに土器をはじめとした供物をしたものであると土生田氏の説を引用した（菊地2025）。

福永氏は被葬者をオホーツク文化の担い手が8世紀前葉に埋葬されたとした。青苗遺跡から古墳系遺物である土製模造鏡が出土していることや、青苗遺跡眼下に位置する青苗砂丘遺跡のオホーツク文化の集落には大陸系の遺物が伴うことから、奥尻島は古墳文化、オホーツク文化が遭遇した場所であると述べた。また、そのことから奥尻島は「出会いの島」という言葉を残した（福永2025）。

臼杵氏は土師器集団が埋葬されたと述べた。また、土師器集団か擦文時代初期集団の区別の問題や、7,8世紀の奥尻島の人口の問題を挙げ、米岡5遺跡の資料など検討の必要性を述べた。臼杵氏はオホーツク文化の南下が鉄器の獲得を目的にしたと考察した（臼杵2025）。

鈴木氏は擦文時代の担い手が被葬者の可能性も考えられると述べ、年代は8世紀とした。オホーツク文化人を被葬者するには墓の特徴が異なること、米岡5遺跡で7世紀後葉から

11世紀までの擦文土器が出土していることを踏まえている（鈴木 2025）。

菊地氏の供物をしていたと言う仮説は興味深い。筆を滑らせたとご本人はおっしゃっていた。青苗砂丘遺跡を擦文人はどう見ていたのだろうかなど、個人的には気になる。8世紀に青苗砂丘遺跡での痕跡は薄れていくが、人は去ったとしても住居などは残ったように思える。それを擦文人はどう見たのであろうか。答えはないが。

各氏は奥尻島を舞台に古墳文化とオホーツク文化の交流があったと言う前提から被葬者や年代を定めていた。青苗墳墓の年代は8世紀とする意見が多く見られるも、被葬者は土師器集団、擦文文化、またはオホーツク文化の担い手と意見が割れる。

青苗墳墓の年代、被葬者をさらに考えていく上で欠かせないのが、青苗墳墓が出土した地層の問題がある。小嶋氏も指摘しているように1640年に降下したと言われる北海道駒ヶ岳火山灰（青苗墳墓発見時の報告書では乙部層）の直下ではあるが、もう一つの時代の基準となる苦小牧-白頭山火山灰(B-Tm)との関係が数少ない写真からは垣間見ることができない（小嶋 2022）。青苗墳墓出土時の報告書は刊行されておらず、謎に包まれたままである。

なんとか当時参加していたまだご存命の方からヒントを得ることはできないだろうか。報告書が刊行されたとしても、当時掘った人間にしかわかりえないことはきっと存在する。考古学の歴史を振り返るような、報告書の情報を補うような「聞き取り考古学」があっても面白いと思う。発掘調査報告書の刊行の重要性を改めて知る機会となった。

シンポジウムでは地域住民が多く参加していた。「質問ありませんか」と聞くより、実際に本物を見たり、触れたりする中で自然と質問が出る方が良いと感じた。学芸員を目指す身には非常に勉強になった。



図7 10月26日シンポジウムの様子(海洋研修センターにて筆者撮影)

6. おわりに

筆者の大学2年間があつという間に過ぎ去った。筆者の活動は1人でできるものではなく、多くの方々のお支えがないことには成り立たない。たくさんの方から色々なことを教わった。筆者は先行研究の読みがまだ足りておらず、やっと遺跡の発掘報告書も何となく読み解けるようになってきた。関わってくださった方々へ少しでも学恩を返せたらと思う。卒業研究に向けてより一層励みたい。

この場を借りまして、2025年青苗遺跡調査、2025年目梨泊遺跡の調査に参加させていただいたこと、並びに、奥尻島で行われたシンポジウム勾玉と奥尻島でご配慮いただいた福島大学行政政策学類考古学研究室菊地芳朗教授に感謝申し上げます。

本年も北海学園大学の学生を受け入れていただいた奥尻町教育委員会事務局主任学芸員稲垣森太様、感謝申し上げます。

調査に参加した筆者を温かく迎えてくださった福島大学行政政策学類考古学研究室の学生の皆様、感謝申し上げます。

7. 参考文献

- ・本久公洋 2020『北海道建築物大図鑑』北海道新聞社, 191頁.
- ・氏江敏文, 鈴木琢也, 高島孝宗, 北海道枝幸高等学校「目梨泊遺跡試掘調査報告(2024)」『枝幸研究』第16号, オホーツクミュージアムえさし, 12頁.
- ・佐藤隆広 1994「枝幸町目梨泊遺跡～北オホーツク海沿岸のオホーツク文化～」『環オホーツク』No. 2, 北のシンポジウム実行委員会, 46頁.
- ・佐藤忠雄・山田忍 1978『青苗遺跡発掘調査概報-道々奥尻島線～空港間道路整備事業に係わる緊急発掘調査-』奥尻町教育委員会.
- ・稲垣森太 2025「シンポジウム開催趣旨と青苗遺跡の紹介」『シンポジウム勾玉と奥尻島-青苗遺跡の発掘成果から大型ヒスイ勾玉の謎にせまる-資料集』奥尻町教育委員会, 1-12頁.
- ・菊地芳朗 2025「青苗遺跡の発掘調査成果とその意義」『シンポジウム勾玉と奥尻島-青苗遺跡の発掘成果から大型ヒスイ勾玉の謎にせまる-資料集』奥尻町教育委員会, 13-20頁.
- ・福永伸哉 2025「日本列島の古墳文化と奥尻島」『シンポジウム勾玉と奥尻島-青苗遺跡の発掘成果から大型ヒスイ勾玉の謎にせまる-資料集』奥尻町教育委員会, 21-36頁.
- ・臼杵勲 2025「北海道と北東アジアから見た青苗遺跡群の価値」『シンポジウム勾玉と奥尻島-青苗遺跡の発掘成果から大型ヒスイ勾玉の謎にせまる-資料集』奥尻町教育委員会, 37-42頁.
- ・鈴木琢也 2025「擦文文化の対外交流と青苗遺跡」『シンポジウム勾玉と奥尻島-青苗遺跡の発掘成果から大型ヒスイ勾玉の謎にせまる-資料集』奥尻町教育委員会, 43-59頁.
- ・小嶋芳孝 2022「青苗墳墓の造営年代と被葬者像について」『青苗遺跡重要資料総括報告書-調査概要の整理と丁字頭勾玉等出土墳墓の再検討-』奥尻町教育委員会, 87頁.

北海道奥尻島における GIS 分析と現地調査

人文学部日本文化学科 4 年 中村 美月

1. はじめに

本実習は、学芸員課程の研修としておこなわれている。今回、参加が四回目となる筆者は卒業論文に向けた現地踏査の一環として参加し、北海道奥尻島を対象に避難路の調査を実施した。

1993 年の北海道南西沖地震以降、島内に整備されてきた津波避難路の現状を把握し、地理的条件や社会環境の変化（高齢化・人口減少）に伴う課題を実地調査により明らかにすることを調査の目的とする。

2. 調査対象地の概要：北海道奥尻島

2-1. 地理的特性と空間構造

奥尻島は渡島半島の江差町から約 20km 沖合に位置する、面積約 142km² の離島である。島の中央部には神威山を主峰とする険峻な山地が広がり、平坦地は極めて限定的である。そのため、居住地や主要幹線道路は海岸線沿いのわずかな平地に集中せざるを得ず、島内の集落はほぼすべてが津波浸水リスクを孕む沿岸部に立地している。

島内の移動は海岸線に沿った環状道路が中心であり、内陸を横断するルートは乏しい。

公共交通機関が限られる中で、日常の移動は自家用車に強く依存しており、発災時の交通渋滞や避難行動への制約が懸念される。また、冬季の積雪や路面凍結といった気象条件も、避難路の通行性を著しく低下させる要因となっている。

2-2. 津波被災の経験と防災体制

奥尻島は、1993 年の北海道南西沖地震において大規模な津波被害を受け、特に南部・青苗地区は壊滅的な打撃を被った。この被災経験に基づき、島内には多種多様な津波避難路、避難施設、防潮堤が整備され、全国的にも先進的な防災体制が構築されてきた。本島は、過去の教訓が物理的なインフラとしてどのように空間へ実装されているかを学ぶ上で、極めて重要なフィールドといえる。

2-3. 社会環境の変化と「避難の実効性」

現在、奥尻島が直面している最大の課題は、急速な人口減少と高齢化である。高齢化率は 4 割を超え、災害時の自力避難や共助の体制に大きな変化が生じている。被災直後に整備された避難路の多くは、現在の高齢化した住民の身体能力や生活実態に必ずしも適合しているとは言い難い。

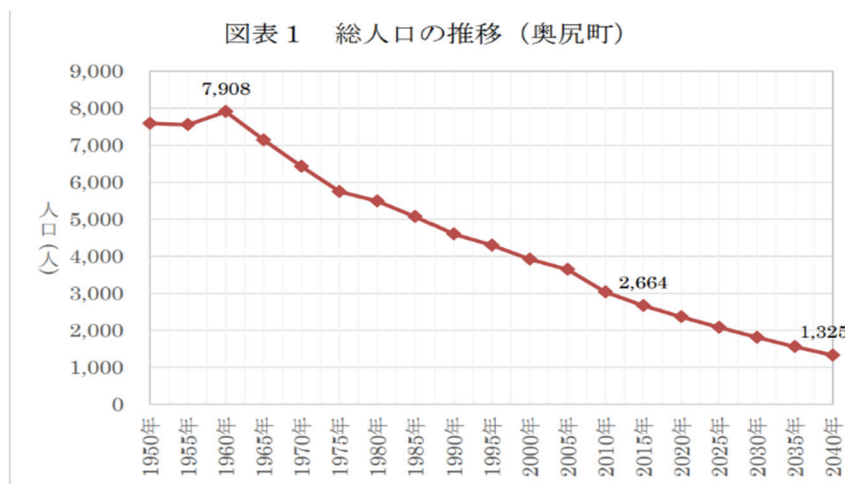
2-4. 実習地としての選定理由

以上の通り、奥尻島は以下の3点が複合的に重なる特異な地域である。

- **物理的制約:** 山がちで避難先が限定される地形。
- **歴史的背景:** 甚大な津波被災経験と、それに基づく防災インフラの集積。
- **社会的課題:** 高齢化・人口減少に伴う避難能力の低下。

これらの条件下で「避難路が現在も実効性を維持しているか」を検証することは、日本の離島・過疎地域が共通して抱える防災課題の縮図を捉えることに他ならない。したがって、本島を現地調査の対象地とすることは、卒業論文の目的を達成する上で極めて妥当であると判断した。

表1 奥尻町人口ビジョンから [奥尻町 2016]



50年から2010年までは国勢調査、2015年以降は社人研推計値

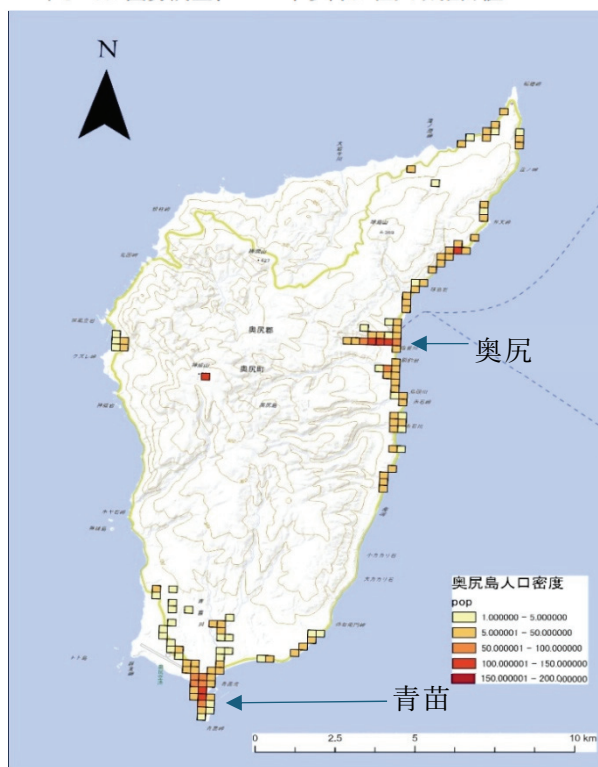


図1 GISで作成した奥尻島の人口密度マップ

3. 調査内容

3-1. 調査対象地域

1993年の津波で甚大な被害を受けた青苗地区、および島内の主要居住地である松江地区を中心に島内全域で調査を実施した。

避難路に関しては、奥尻町の「地域防災計画」に記載されている避難路を対象ルートとして選定した。

3-2. 現地踏査（フィールドワーク）

実際に各避難ルートを歩行し、地図上では判別困難な以下の項目について詳細な観察・記録を行った。

- **物理的通行性**：坂道・階段の傾斜、路面舗装の状態（ひび割れ、滑りやすさ）、有効通行幅、段差の有無。
- **環境的阻害要因**：落石、繁茂した草木などの障害物、夜間・冬季の通行に影響する要因。
- **視認性・誘導**：避難標識や誘導表示の有無、位置、視認のしやすさ。
- **身体的負担感**：調査者自身が実際に歩行することで、高齢者や要配慮者にとっての「登坂の過酷さ」を感覚的・実効的に評価。

3-3. デジタル技術の活用（GISによるデータ管理）

効率的かつ正確なデータ収集のため、GIS（地理情報システム）を用いたデジタル調査手法を採用した。

- **使用ツール**：ArcGIS Field Maps
- **データ連携**：GPSによる位置情報と、現地で撮影した写真・属性メモ（道路状況など）をリアルタイムで紐付け。
- **オフライン対応**：離島特有の通信環境を考慮し、事前にオフラインマップを作成することで、島内全域での安定したデータ収集を実現した。

3-4. ヒアリング調査（質的アプローチ）

数値や地図情報では補いきれない「避難の現実」を把握するため、以下の対象者へ聞き取り調査を実施した。

1. **行政（奥尻町役場 防災担当者）**：避難路の維持管理体制および行政側の想定する避難計画の確認。
2. **地域住民（特に高齢者）**：発災時の想定避難ルート、日頃の不安要素、冬季・夜間における避難の困難性、現状のインフラに対する要望。

3-5. 分析の視点

収集したデータに基づき、「行政が整備したインフラ(ハード)」と、「住民の身体能力・避難意識(ソフト)」の間に存在する乖離(ギャップ)を抽出することに重点を置いた。



図2 GIS上でデジタルデータとして整備した避難路の地図

4. 調査結果

4-1. 避難路の構造と身体的負荷の相関

本実習では、1993年の教訓(津波到達まで2~3分)を踏まえ、「5分以内での高台到達」を想定した運動強度測定を実施した。その結果、地区ごとの整備方針の違いが避難の実効性に顕著な差を生んでいることが判明した。

表2 避難路の構造と身体的負荷の相関

地区	主な構造	運動強度 (METs/RPE)	高齢者の避難可能性
松江地区	直線的な階段・急勾配	METs 6 / RPE 15(きつい)	休憩なしの登坂は困難
青苗地区	スロープ・ジグザグ構造	METs 4 / RPE 11 (楽)	一定の余力を持って避難可能

この対比から、単に「高台へ通じる道がある」だけでなく、「高齢者が息を切らさずに登り切れる構造か」という視点が、離島・高齢化地域における避難路整備の肝であることが示唆された。

4-2. 防災計画と現地実態の乖離（ギャップ）

GIS を用いた重ね合わせ分析および現地踏査により、行政の想定と実態の間に以下の 3 つの乖離が確認された。

1. 経路の複雑性：防災計画上の避難路は簡略化されているが、実際には生活道路や細街路を組み合わせた複雑な経路選択がなされている。
2. 維持管理の不備：松江・初松前地区等において、照明の故障や植生の繁茂が確認された。これらは特に夜間や冬季の避難において致命的な阻害要因となる。
3. 連続性の欠如：稲穂地区に見られるように、避難路の終点から先、より安全な高所へと続くルートが非公式な山道に依存しているケースがあり、避難完了までの安全担保に課題が残る。

4-3. 住民意識と行政課題：ハードからソフトへの転換

聞き取り調査を通じて、避難路の「物理的スペック」以上に「心理的・社会的障壁」が浮き彫りとなった。

- 住民側（心理的障壁）：急勾配への不安に加え、野生動物への恐怖や、避難先に滞在スペースがないことによる「避難後の不安」が、避難行動への意欲を削いでいる。
- 行政側（維持管理の限界）：人口減少に伴い、避難路の清掃や管理を住民組織に委ねる従来のモデルが限界を迎えている。新規整備よりも、既存インフラをいかに「運用可能」な状態に保つかが課題である。

5. 実習を通じた学びと自己評価

本実習を通じ、防災とは単に強固な施設を建設し、精緻な地図を整備することに留まるものではないことを痛感した。防災インフラが真に機能するためには、それを利用する人々の身体的特性や心理的負担、そして地域固有の生活実態に即したものでなければならない。

・理論と実践の統合

事前に GIS を用いて作成した避難路地図は、空間構造を把握する上で非常に有用であった。しかし、実際に現地を歩き、自らの身体に負荷をかけることで初めて、地図上の「線」に潜む勾配の険しさや視認性の低さといった「現実的な意味」を理解することができた。デジタルデータと身体感覚を往復する調査プロセスの重要性は、今後の研究活動における大きな指針となった。

・離島防災への認識

地理的に隔絶された離島において、「外部からの支援が即座には届かない」という現実、住民一人ひとりの自律的な避難行動に極めて重い意味を持たせる。人口減少と高齢化が進む中で、いかにして「動ける避難路」を維持し、避難意識を次世代へ継承していくかという問いは、奥尻島のみならず、日本の多くの沿岸地域が直面する課題である。

6. おわりに

本実習を通じた奥尻島での現地調査は、防災を単なる学問的な研究対象としてではなく、「個人の生命に直結する切実な社会課題」として深く捉え直す貴重な機会となった。

GIS を用いた空間分析や身体的負荷の計測といった客観的データに加え、現地で実際にルートを歩き、住民の方々の生の声を聴くことで得られた知見は、机上の理論だけでは決して到達し得ない重みを持つものである。本実習で明らかとなった「高齢化社会における避難路の実効性」という課題に対し、収集した多角的なデータを基に、卒業論文ではより実効性の高い、地域の実情に即した防災のあり方を追究していきたい。

最後になりましたが、本実習の実施にあたり、多忙な業務の中多大なるご協力をいただいた奥尻町役場の皆様、ならびに貴重な経験談や切実な思いを語ってくださった島民の皆様に、心より深く感謝申し上げます。また、過酷な調査行程を共に歩み、議論を重ねてくれた実習の仲間の協力がなければ、本調査を完遂することはできませんでした。ここに併せて深い謝意を表します。

7. 4年間の歩みを振り返って

本実習および現地調査を終えるにあたり、大学生活の4年間を捧げた奥尻島での日々を振り返りたいと思います。

1年目、未知の土地であった奥尻島への好奇心から始まったこの歩みは、年を追うごとにその深度を増していきました。2年目には、避難路への問題意識を抱くと同時に、稲穂ふれあいセンターでの学芸業務に携わる機会をいただきました。3年目には、同センターでの業務に加え、遺跡調査における初めての発掘作業を経験し、島の地層に眠る歴史の重みに直接触れることができました。そして4年目となる本年は、卒業論文の現地踏査を主軸としつつ、当時の一次資料を読み解くことで、震災の記憶とその後の歩みをより多角的に考察することができました。これらすべての経験は、知的好奇心を満たすだけでなく、私という人間を形作る上で欠かせない糧となりました。

4年間、常に変わらぬ温かさで私を迎え入れてくださった稲垣さんをはじめとする島民の皆様に、深く感謝申し上げます。また、4年間にわたり私をこの島へと導き、学びの機会を与えてくださった手塚先生には、言葉では尽くしがたい恩義を感じております。そして、実習の先輩として、また学芸業務の先達として、常に的確な助言と支えをくださった蟬塚先輩に、心より感謝を申し上げたいと思います。最後に、頼りない私を支えてくれた後輩のみんな、本当にありがとうございました。奥尻での経験を通じて、それぞれが自分のやりたいことを見つけていけるよう応援しています。

奥尻島で過ごした4年間は、私の学生生活における最大の財産です。ここで学んだ「現場を歩き、対話し、歴史を紐解く」という姿勢を、今後の人生においても大切にしていきたいと考えています。

4年間お世話になりました。いつかまた、大好きな奥尻の地を訪れたいと思います。

青苗言代主神社例祭における7年ぶりの巡行再開

－再開に至る諸事情の検討－

文学研究科博士（後期）課程・小樽市総合博物館学芸員 蟬塚 咲衣

1. はじめに

北海学園大学学芸員課程では、2018年より奥尻島の各地区で実施されている祭礼に関する研究を行っている。近年の特筆すべき動きとして、法要や神事だけではなくイベントが行われることが特徴の「奥尻三大祭」が、一つに統合されたことが挙げられる。「奥尻三大祭」は「賽の河原まつり（6月）」、「室津まつり（7月）」、「なべつるまつり（8月）」の3つで構成されていたが、協力員の不足や高齢化、事業のマンネリ化を理由に、2024年にこれらを統合した新たな祭り「第一回おくしりまるごと祭（7月）」が行われた（蟬塚 2025: 40）。また、宮津地区に鎮座する宮津弁天宮（中津嶋神社）では、2024年に修理を目的としたクラウドファンディングが行われ、3,308,600円の支援を集めた（蟬塚 2025: 41-42）。このように、地域が抱える課題を考慮した祭礼の再編や、神事を行う場である社殿の整備など、将来を見据えた取り組みが行われている。

一方で、島内各地区の神社で行われている例大祭は、筆者が祭礼の調査を開始した2018年と比較して、縮小傾向にある。赤石地区の保食神社では、ビンゴなどを楽しむイベントが廃止され神事の実施のみとなり、奥尻地区の澳津神社では2019年まで山車（神威山）の巡行を行っていたが、コロナ禍となった2020年以降は、2025年現在まで休止の状態が続いている。そのようななか、2025年の青苗言代主神社例祭において、2018年以来7年ぶりに神輿渡御と山車巡行が再開されるという嬉しい出来事があった。

本稿では、2025年8月11～15日に実施した奥尻島研修での調査成果をもとに、青苗言代主神社例祭の実施状況と、神輿渡御と山車巡行を再開できた理由について考察する。

2. 2018～2025年の青苗言代主神社例祭の実施状況

青苗言代主神社は、奥尻島の南端に位置する青苗地区に鎮座する神社で、毎年8月12～14日の3日間にわたって例大祭が行われる。12日に宵宮祭が行われ、13～14日にかけては本祭と、猿田彦・神輿1基・山車（恵比須山）1台による巡行が行われる。

2018年から2025年までの実施状況を整理したのが、表1である。青苗言代主神社例祭は、1993年に発生した北海道南西沖地震によって、社殿、神輿、山車などを失ったが、生活が復興した後に神輿や山車を新調した（蟬塚 2021: 7-9）。2018年は、震災から25年の節目の年であった。震災後に作られた神輿には「津波が来ないように」という祈りが込められた、龍が鯰を押さえつける彫刻が施されており、神輿渡御の最中に神輿の担当者が沿道で神輿を眺める住民や観光客に対して彫刻の由来を説明することで、祭礼による震災伝承が行われていた（蟬塚 2021: 10）。2019年は、巡行時に神様を先導する役割を担う猿田彦を担当している、氏子総代（神社役員）の世代交代と人員不足が原因で、巡行は行われ

なかった（蟬塚 2020：39-40）。2020～2022 年にかけては、2020 年初頭からの新型コロナウイルス感染症の影響で、巡行のみならず青苗地区の浜風公園で毎年行われていた夏祭りも実施されず、神事のみが継続されていた（蟬塚 2023：16）。しかし、2022 年の大きな動きとして、青苗言代主神社において社殿の修理や社務所の建て替えを目的としたクラウドファンディングが行われた（蟬塚 2023：16-17）。2023 年には 4 年ぶりに浜風公園での夏祭りが再開され、飾り付けられた山車の恵比須山が公園に運ばれ、カラオケ大会などが行われたが、巡行は神社の役員不足と神輿の担ぎ手不足のため実施されなかった（蟬塚 2024：30-31）。2024 年は、猿田彦と神輿は前年と同様の理由で実施されなかった一方、山車は時間の短縮や住宅 1 軒 1 軒を回って行うはおいしさを希望制にするなどの対応を行ったうえでの実施を予定していたが、台風を理由に中止となった（蟬塚 2025：38-39）。2025 年は、2018～2024 年にかけて例祭に関わる 3 組織間での兼務不可の原則（蟬塚ほか 2020：127-128）の緩和が進められたほか、4. で詳述するが、時間やルートに関しても変更を加え、ついに 7 年ぶりの神輿渡御と山車巡行の実現に至ったのである。

表 1 青苗言代主神社例祭の 8 年間の実施状況

		北海道南西沖 地震から25年				北海道南西沖 地震から30年			
		コロナ禍							
		2018年	2019年	2020年	2021年	2022年	2023年	2024年	2025年
神 事		○	○	○	○	○	○	○	○
猿田彦		○	×	×	×	×	×	×	○
神 輿		○	×	×	×	×	×	×	○
山 車		○	△	×	×	×	△	△	○
特 記 事 項		・ 浜風公園で夏祭り実施	・ 氏子総代の世代交代による巡行中止 ・ 恵比須山協賛会による催し(ねまり)			・ 青苗言代主神社が、社殿修理のためのクラウドファンディングを実施	・ 浜風公園での夏祭りを4年ぶりに再開 ・ 恵比須山協賛会による催し(ねまり)	・ 山車(恵比須山)が巡行予定だったが、台風を理由に中止 ・ 恵比須山協賛会による催し(ねまり)も、台風を理由に8月17日に延期 (宮津地区に鎮座する宮津弁天宮が社殿修理のためのクラウドファンディングを実施)	・ 7年ぶりに神輿渡御と山車巡行を実施 ・ 神輿渡御は1日に短縮

3. 2025 年度の青苗言代主神社例祭について

2025 年度の例祭は、まず 8 月 12 日の 15 時から青苗言代主神社の社殿内で宵宮祭が行われた。参加者は 14 人（宮司 1 人、猿田彦 1 人、地元男性 7 人、北海学園大学の学生 4 人、筆者）だった（写真 1）。神事のみが行われていた 2024 年までと異なる点は、猿田彦

を担当する男性が、面以外の装束を身に着けて宵宮祭に参加していたことである。氏子総代長は宵宮祭の挨拶のなかで、「7年前に祭りを復活しようと総代長を引き受け、コロナ禍を乗り越えて、猿田彦・神輿・山車を出すのは初。クラウドファンディングで神社も綺麗になり、黙っていても仕方がないのでここまでこぎつけた。信金・警察・自衛隊も一緒に神輿を押し」²⁾と7年ぶりの巡行に向けた意気込みを語ってた。宵宮祭は15時25分頃に終了し、神社の境内から出ると、民宿「島じかん」の前で恵比須山の飾り付けが行われていた。17時30分頃から18時5分頃までは、太鼓などの山車の祭囃子が演奏されていた。

8月12日の18時30分からは、浜風公園にて毎年恒例の夏祭りが行われた（写真2）。恵比須山が公園の脇に置かれて会場に花を添え、公園内のテントでは恵比須山協賛会がお酒やえだまめ、焼き鳥などを販売していた。イベントの内容は、カラオケ大会と盆踊りで、20時55分頃からはビンゴ大会が行われた。



写真1 宵宮祭の様子



写真2 浜風公園での夏祭りの様子

本祭は、8月13日9時25分ごろから始まり、参加者は、宮司1人、猿田彦1人、男性22人ほどだった。9時50分ごろに神輿への魂入れを行い、10時18分頃にはそれまで休台に乗せていた神輿を道路に置かれた台車に乗せるために、神輿を一時的に担いだ。そして10時21分頃、主に神社の役員（総代）が担当する行列（猿田彦1人、神社役員2人、警護2人、太鼓を乗せて音楽をかけながら走るトラック1台）を先頭に、渡御が始まった（写真3）。例年2日間行う神輿渡御だが、2025年は1日のみであった。渡御の基本的な構成は、図1の通りである。祭典委員長や神社役員は御祝儀の回収のため歩く場所が前後することがあり、交通整理や神輿の世話役などもその時々で位置が変わる。午前中のみ最後尾にパトカー1台が走行していた。なお、神輿の担ぎ手は出発時点では13人だったが、昼過ぎから1人増えて最終的には14人だった。神輿は10分に1回ほどのペースで休憩をはさみながら進んだ（表2）。神輿を振る時は、世話役が吹く笛の合図に合わせて、「ヤンヨ！ヤンヨ！」の掛け声で神輿を上下に振る動作を

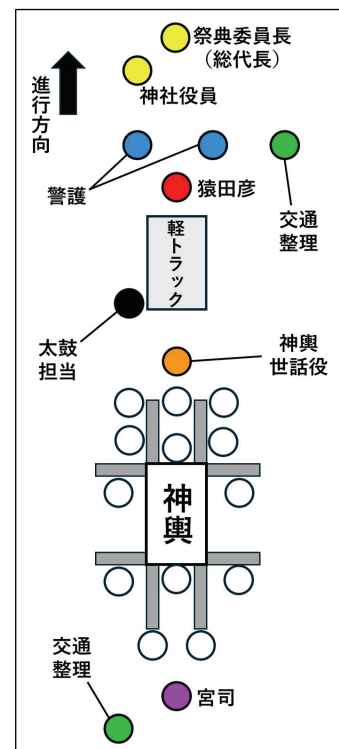


図1 神輿渡御の構成

行った（写真4）。神輿を振るのは、飲み物や食べ物などの「ふるまい」があった場所や神社役員の自宅前などで、かつては各家の前で神輿を振ったり、御祝儀をたくさんもらった場所で振ったこともあるという³⁾。12時30分には、島唯一の特別養護老人ホームの「おくしり荘」に到着し、10人以上の利用者が神輿を見るために、職員とともに建物の入り口まで出てきていた。12時44分には担ぎ手の提案で、利用者の前で神輿を振った。「おくしり荘」利用者の女性は神輿を見て、「よかった！私も青苗の祭りで、恵比須山に乗って太鼓を叩いていた。自分も入りたいくらい！」⁴⁾と楽しそうに思い出話をしてくださった。



写真3 神輿渡御の様子



写真4 渡御の最後に神社前で神輿を振る

表2 2025年8月13日の神輿渡御の動き

10:21	青苗言代主神社を出発	12:02	再開	16:32	再開
10:29	休憩1：神社の裏の通り	12:12	休憩6：恵比須山収納庫付近	16:35	神輿を担いで振る
10:34	再開	12:20	再開	16:41	神輿を担いで振る
10:40	休憩2：青苗郵便局前	12:30	休憩7：おくしり荘前	16:43	世話役の男性とその孫1人を胴上げ
10:47	再開	12:44	神輿を担いで振る	16:44	再開
10:50	神輿を担いで歩く（約1分）	12:47	再開	16:49	神輿を担いで振る
10:51	小休憩	12:52	休憩8：青苗支所（昼食）	16:53	神輿を担いで振る
10:54	再開（10：58ワサビ谷地川折り返し）	14:00	再開	16:55	男性1人を胴上げ
11:07	休憩4：麓電機商会前	14:20	休憩9：浜風公園前（墓参り休憩）	16:56	休憩10：明上石油前
11:24	神輿を担いで振る	15:59	宮司によるお祓い	17:03	再開
11:26	神輿を台車に乗せる	16:07	再開	17:07	青苗言代主神社前で神輿を担いで振る
11:28	再開	16:17	室津島に向けてお祓い	17:09	総代長を胴上げ
11:32	小休憩（JAはこだて奥尻事業所前）	16:23	再開	17:10	神輿が境内に入る
11:34	再開	16:29	小休憩	17:19	神輿の魂抜き
11:49	休憩5：土井民宿付近	16:31	神輿を担いで振る	17:33	神輿を収納庫に入れて終了

男性は、「7年ぶりですごく良い！地元の祭りに貢献できて、俺たちが受け継ぐみたいな気持ちがある」⁵⁾、神輿の世話役の男性は、「きつくて暑いけれど、それが神輿のやりがい。快感で楽しい。それがないと面白くない」⁶⁾という声があった。また、青苗みこし保存会会員の男性は、「7年もしていないと埃っぽい気がする。普段は職場と家を往復する生活で、まちのなかを歩くことはない。年に1回地区を練り歩くと、こんな人が住んでいたんだと、地域の人を知るきっかけになる」⁷⁾、と渡御に参加することの魅力についても話をうかがうことができた。渡御の道中で、青苗の巡行が休止している期間に奥尻島に移住し、初めて渡御を見たという男性に出会ったが、「神輿の鯨の彫刻に、地震が起きないようにという意味があるという話を聞いた」⁸⁾と話しており、1993年の震災の経験がない人に対しても、神輿渡御を通じて震災の経験やそこに込められた願いが伝承されている様子を確認することができた。

表3 恵比須山協賛会役員

	2019年	2025年
会長	1	1
副会長	2	2
監査	2	2
会計	2	2
いかまわし管理	2	1
はおい管理	7	7
下声管理	5	9
運行管理	5	6
設備管理	1	0
安全・救護管理	3	3
太鼓・笛管理	3	1
合計(人)	33	34

表4 8月13日の山車巡行の動き

8月13日	内容
—	筆者は途中から巡行に合流
18:53	恵比須山収納庫横を通過
18:55	はおい開始
18:57	休憩
20:00	再開
20:04	はおい開始
20:06	再開
20:07	はおい開始
20:09	再開
20:10	はおい開始
20:12	再開
20:20	巡行終了
20:40	山車を青苗支所の横に設置

表5 8月14日の山車巡行の動き

8月14日	内容
12:42	山車が青苗支所横から出発
12:51	巡行開始地点到着
13:14	巡行開始
13:17	はおい開始：1
13:19	再開
13:20	はおい開始：2
13:23	休憩：1
13:57	再開
14:06	はおい開始：3 丘の宿 優風
14:08	休憩：2
14:55	再開
14:57	はおい開始：4
14:59	再開
15:00	はおい開始：5
15:02	再開
15:04	はおい開始：6
15:06	再開
15:12	はおい開始：7
15:17	はおい開始：8
15:20	はおい開始：9
15:22	再開
15:26	はおい開始：10 青苗支所
15:29	再開
15:30	はおい開始：11
15:32	再開
15:35	はおい開始：12
15:44	はおい開始：13 スナック白樺
15:46	休憩：3
16:10	再開
16:16	はおい開始：14
16:20	再開 (16:24 墓地前の坂を下る)
16:38	家主不在のため、はおい未実施
16:42	休憩：4 浜風公園横 (青苗支所で夕食)
18:04	再開
18:07	はおい開始：15
18:09	休憩：5
18:29	再開
18:32	はおい開始：16 宿屋のな
18:35	再開
18:36	はおい開始：17
18:38	休憩：6
18:55	再開
19:03	はおい開始：18
19:06	休憩：7
19:18	再開
19:21	はおい開始：19
19:26	再開
19:28	はおい開始：20
19:30	再開
19:32	はおい開始：21
19:36	再開
19:42	はおい開始：22
19:46	はおい開始：23
19:48	再開
19:51	はおい開始：24
19:54	運行頭取の男性を胸上げ
19:56	休憩：8
20:27	再開
20:31	はおい開始：25
20:34	はおい開始：26 素泊まり民宿鳥じかん
20:40	再開
20:48	はおい開始：27 青苗言代主神社社殿内
20:50	巡行終了
20:51	山車が神社を出発し収納庫へ向かう
21:32	山車が収納庫に入る
21:34~	人形などの片付け

筆者は、神輿渡御に同行していたため、山車の出発の現場に立ち会うことはできなかったが、8月13日の13時頃から、山車の恵比須山の巡行が始まったと聞いている⁹⁾。神輿渡御と聞き取り調査が終了してから、19時近くに山車の巡行に合流すると、ちょうど恵比須山収納庫の横を通過するところだった。恵比須山協賛会の役員の男性に、筆者が合流するまでのはおいの回数を尋ねると、これまでに10軒ほど行ったというが、もし2018年以前のようにはおいが希望制ではなく、御祝儀の有無に関わらずかけていた場合は、ここまで50~60軒行うのが普通だったという¹⁰⁾。また、久しぶりの巡行について感想を聞くと、「理由はわからないが、恵比須山協賛会の人が増えている。20代が多い。若い人が引っ張ってくれて、やろう！と言う。このまま衰退して終わるかと思っていたので、増えてありがたい」と話していた。恵比須山協賛会の会員の方からご提供いただいた「恵比須山協賛会役員名簿」について、2019年7月25日時点の名簿と2025年7月3日時点の名簿を比較すると、役員的人数としては33人から34人増えており(表3)、2025年にかけて新たな役員が5人加わっていた。8月13日は20時40分に青苗支所の横に山車の恵比須山を設置して終了した(表4)。

8月14日は、13時14分に巡行を開始した(表5)。恵比須山を15人が曳き、恵比須山の上で電線を避ける係が1人、太鼓を叩く小学生が10人、笛を吹く大人が5人だった。はおい管理を担当する男性によると、今回恵比須山に乗って太鼓を

担当している小学生は 10 人おり、青苗小学校の全児童数の約半分にあたるという¹¹⁾。また、太鼓の練習は経験者の指導のもと 8 月 2 日から 9 日間、毎日 1 時間行っていると教えていただいた。恵比須山は、はおいを希望した家に立ち寄るたびにその場で停止し、はおいが終わると再び進行するという動きを繰り返す(写真 5)。はおいは個人宅の玄関のなかに入っていることが多く、後ろから見ていても何が行われているのかがわかりづらい面があるが、今回の調査ではご厚意でご自宅に上がらせていただき、初めて家主側の視点からはおいを記録する機会をいただいた。はおいをかける 1 人の声を追いかけるように、下声 12 人ほどと掛け合いを繰り返すことが特徴である(写真 6)。19 時前から雨が降ったり止んだりを繰り返し、19 時過ぎの時点で 46 人ほどが山車曳きや太鼓・笛で参加していたが、全員ずぶ濡れの状態で巡行を続けた。青苗言代主神社にて巡行が終了したのは 20 時 50 分で、神社から収納庫に向かう時のみ演奏する、通常とは異なるテンポの「帰り山」と呼ばれる曲に乗せて、山車が高台にある恵比須山収納庫に入ったのは、21 時 32 分だった。恵比須山の発電機と収納庫の照明の調子が悪く、収納直前に何度も電気が消えて辺りが真っ暗になるという出来事があったが、「ハプニングはつきもの」¹²⁾、「これも子どもたちの思い出になるからいいのさ」¹³⁾と朗らかな雰囲気の中終了した。



写真 5 8 月 14 日の巡行の様子



写真 6 青苗支所でののはおいの様子

4. 7 年ぶりに巡行が実施できた理由

2025 年に巡行を実施することができた理由として、時間の変更、ルート短縮、担い手の募集の 3 点が挙げられる。1 つ目の時間の変更については、まず本来 2 日間行う神輿渡御を 1 日のみにした。これには 3 つ目の理由にも関わるが、「担ぎ手 14 人中、7~8 人は自衛隊や警察、信金の職員。自衛隊を 2 日も拘束できないし、担ぎ手や人も足りないので 1 日になった」¹⁴⁾といい、働いている人でも参加しやすいように考慮されていた。ただし 1 日で行う関係上、2018 年は午後から開始した神輿渡御を、2025 年は午前から始めている。山車については、2018 年の終了時間が 1 日目は 21 時頃、2 日目は 23 時頃だったが、2025 年の終了時間は 1 日目が 20 時 40 分頃、2 日目が 21 時 30 分頃で、少し短くなっていた。2 つ目のルートの短縮については、2025 年は青苗地区に隣接する富里地区に行くこ

とを断念したという。神輿の担当者は、「今回行くのは青苗だけにした。富里にあるニコットにはたくさんお客さんがいるので、見せようとこれまでサービスで行っていたが、今日は渡御が1日だけなのでルートを短くした」¹⁵⁾、恵比須山協賛会の会員は、「今回は1軒ずつ寄らないので、富岡をルートから外そうということになった。その手前にある山（恵比須山）の関係者の家までは行こうということになった」¹⁶⁾と話し、聞き取りによると神輿より山車の方が先に道道39号を折り返したという。なお、青苗地区に隣接する米岡地区は、2018年と同様に巡行している。3つ目の担い手の募集については、今回の神輿の担ぎ手のうち約半数を占めたのが、航空自衛隊6人、道南うみ街信用金庫職員1人、警察官1人などの青苗が地元ではない担い手だった。参加の理由は、青苗言代主神社の総代長が携わっていた2024年の宮津弁天宮（青苗地区ではなく宮津地区に鎮座）のクラウドファンディングがきっかけで、弁天宮を修理するための材料を運ぶ時に協力してくれた方々に声をかけたところ、快く神輿に参加してくれたのだという¹⁷⁾。神輿を担ぎ慣れていない人への対応としては、台車の積極的な活用や、世話役の男性が怪我をしない担ぎ方を教えていた。担い手の参加しやすさを考慮したことで、実施時間が短くなりルートも短縮されたが、そのような対応が実を結び、7年ぶりに巡行を行うことができたと考えられる。

5. おわりに

7年ぶりの巡行を行って、神輿と山車の担い手からは、「神輿が1日で体力は楽だが、あまりにも面白くない。来年は細かな道も回って時間が延びるかもね」¹⁸⁾、「今までの伝統通りに1軒1軒にはおいをかけたい」¹⁹⁾などの意見が上がった。久しぶりの実施で終了時間も予測できないなかで、今後の形を模索しながらの巡行となったが、2025年の経験をもとに来年について考えたいという声が多く、非常に前向きな印象を受けた。担い手不足の課題が完全に解消されたわけではないが、宮津弁天宮での協働のような地区を越えた人の繋がりが今後も継続されることで、2026年も巡行が行われることを期待したい。

2026年の春、奥尻町教育委員会事務局で学芸員として15年間勤められた稲垣森太氏が、2026年3月末で奥尻を離れるという衝撃的なニュースが飛び込んできた。筆者が初めて奥尻島を訪れたのは、2017年2月で学部1年生の時であり、稲垣氏には10年近くお世話になっている。次に島に行く時はもうお会いできないのかと思うと、非常に寂しい気持ちである。これまでの奥尻調査で、初めて調査をする地区でどなたに話を聞けばいいかわからなかった時に、いつも最初に島民の方々と私たちを繋いでくださったのは、稲垣氏であった。コロナ禍を含め奥尻に調査に行くことが難しい時にも、お忙しいなか島民の方への聞き取り調査や情報提供など、多大なるお力添えをいただいた。この場を借りて心より感謝申し上げます。筆者は奥尻という場所に、人としてもフィールドワーカーとしても育てていただき、幸いにも学芸員として就職する機会をいただいた。今度は筆者が現在勤務している小樽が、人同士がともに語り合い、学び合える場所となるように、これからも尽力していく所存である。

※証言者に関する情報は、仮名／性別／年齢／職業／例祭での役割／取材年月。不明箇所については、一で記す。

注

- 1) はおいはとは、ニシン漁の網起こしの音頭を起源とする音頭で、表記について、本稿では恵比須山協賛会役員名簿の表記にもとづき、ひらがなで表記する。
- 2) A氏／男性／70代／小売業／氏子総代・青苗みこし保存会／2025年8月
- 3) B氏／男性／70代／一／青苗みこし保存会／2025年8月
- 4) C氏／女性／一／観客／2025年8月
- 5) D氏／男性／40代／神輿の担ぎ手／2025年8月
- 6) 注3に同じ。
- 7) E氏／男性／50代／地方公務員／青苗みこし保存会／2025年8月
- 8) F氏／男性／一／宿泊業／観客／2025年8月
- 9) G氏／男性／70代／一／氏子総代・青苗みこし保存会／2025年8月
- 10) H氏／男性／60代／一／恵比須山協賛会／2025年8月
- 11) I氏／男性／50代／一／恵比須山協賛会／2025年8月
- 12) J氏／男性／60代／一／氏子総代・恵比須山協賛会／2025年8月
- 13) 注11に同じ。
- 14) 注9に同じ。
- 15) 注9に同じ。
- 16) 注10に同じ。
- 17) 注2に同じ。「活動報告（2025年4月29日）」<https://camp-fire.jp/projects/753963/view/activities/698541#main>（2025年3月30日閲覧）
- 18) 注3に同じ。
- 19) K氏／男性／50代／一／氏子総代・恵比須山協賛会／2025年8月

参考文献

- ・蟬塚咲衣、稲垣森太、手塚薫（2020）「地域課題に直面する奥尻島青苗言代主神社例祭とその対応」『歴史都市防災論文集』14：123-130.
- ・蟬塚咲衣（2021）「「記憶地図」を用いた奥尻島青苗言代主神社例祭における災害伝承のあり方」『地域生活学研究』12：1-15
- ・蟬塚咲衣（2023）「奥尻島におけるコロナ禍前後の例祭」『北海学園大学学芸員課程学事報告書』35：15-20.
- ・蟬塚咲衣（2024）「奥尻島における例祭の経年調査を通じた博物館展示の実践」『北海学園大学学芸員課程学事報告書』36：29-34.
- ・蟬塚咲衣（2025）「奥尻島における祭礼の廃止および統合と存続に向けた取り組み」『北海学園大学学芸員課程学事報告書』37：37-44.

ミニミュージアムのねらいと講評

北海学園大学教授 手塚 薫

3年生以上に開講されている「博物館経営論」では、今までに学んだ知識をフルに使ってミュージアムの展示計画を練り、ミニチュア模型、図録、ポスターの3点を実際に作成する課題を与える。財団法人日本博物館協会が2012年7月にまとめた『博物館の原則 博物館関係者の行動規範』は10の行動規範から成る。行動規範の7. 展示・教育普及と前提となる認識を以下に掲げる。

博物館に携わる者は、博物館が蓄積した資料や情報を通じ、人類共有の財産として、教育普及活動など様々な機会を捉えて、広く人々と分かち合い、新たな価値の創造に務める。

多くの人々は、展示や教育普及活動を通して博物館と出会う。博物館の原則7に掲げたように、展示や教育普及活動を通じ、新たな価値を創造することで社会に寄与することができる。そのためには展示や教育普及活動を通じ、博物館が蓄積した資料や情報を広く共有する必要がある。

このように展示は、来館者が博物館に出会う最も一般的な場であり、最大の接点であることは論を俟たないであろう。したがって、博物館に携わる者は、経営資源を最大限に活かし、透明性を維持しつつ、安定した経営を行うことで公益の向上に寄与することが求められている。旧来型の知識偏重型の講義を志向するより、組織が直面する現実のなかでターゲットを設定し、リソース配分を最適化して価値創造のプロセスを擬似体験させる実践的な課題がふさわしいであろう。ミニミュージアムの制作に取り組んでもらうことは、高度な経営シミュレーションを体験することに他ならない。

現実のミュージアムでも、さまざまな問題点から解放されて自由になることはない。博物館経営は常に「限られた予算・人員・時間・空間」という制約とのせめぎ合いである。制約下におけるマネジメント能力を育成することは、たとえミュージアムの学芸員にならなくとも、社会で生きていくうえで有用である。ミニ展示の工作には必ず「スペースの制約」や「材料の限界」が伴う。限られた時間内で何を選択し、何を捨てるかという判断が求められる。誰もが見やすく、安全に鑑賞できる設計はリスク管理とも重なる。これらのプロセスを通じて、机上の議論としての「経営論」を、具体的なプロジェクトのマネジメントとして捉え直すことができる。完成には相当の時間がかかり、工作が苦手な人には忍耐が求められるが、デザインや文章が得意な人はポスターや図録で真価を発揮できる。完成した作品は、上記3セットがディスプレイされ、学生同士で互いに作品評価も実施する。

ミニミュージアムの作成に当たっては、「ビジョン」、「基本理念」、「展示趣旨」を設定してもらおう。参考になるのがマッキンゼー&カンパニー社が提唱するソフトの4S（経営スタイル、スキル、スタッフ、シェア・共有された価値観）とハードの3S（戦

略、組織、システム)である。ソフト要素は人の感情や価値観が影響し、変更が難しい一方、ハード要素は経営者の意思や企業努力で改革が実現する。マ社では、「シェア・共有された価値観」を組織内全メンバーの行動の規範になる考えかたとして最重要視しており、「ビジョン」と「基本理念」から構成される。ミニミュージアムでは、現代社会が直面している諸課題の解決に資するため、なによりも新たな価値の創造を目指す。「ビジョン」はゴール達成のために目指すべき短期目標であり、「基本理念」はやや抽象的で長期的な展望としている。この2つが融合して「展示趣旨」(シェア・共有された価値観)になる。また、「現状分析」することで、出発点を明確にし、現時点の課題とその解決を意識させた。

作品のプレゼンテーション後に実施した学生たちによる作品評価の結果、ミニチュア模型、図録、ポスター部門をあわせた総合評価で最高得点を獲得した学生6人の作品を、次ページ以降紹介する。本年は受講生の多さから、2人1組のペアで作成に当たってもらった。これからミニミュージアム制作に挑戦する学生は、本講評の後に掲載されている各優秀作品のレポートを参考にしてもらいたい。

日本語の誤用や正しい言葉遣い、ネットミームから生まれる新しい日本語などについて、包括的に学べるような企画展「ヤバい！日本語展」を立案した東田純奈さんと二ノ宮彩愛さんのペアは、展示に使えるモノが少ないことを、「横転」「顔ない」などの若者言葉をモチーフにフィギュアをつくることでクリアする相違工夫が印象的であった。図録やポスターの作成では、人目を引くデザイン性や見やすさを意識したという。ペア間での緻密なコミュニケーションや、お互いが思い描く作品の完成形の共有に心を砕いたというが、作品の質を確保するうえでとても重要であったはずである。

加賀谷朋伽さんと楠本玲来さんが企画した「いのちと技術のゆくえ：バイオテクノロジーと生物多様性の対話」は、バイオテクノロジーの発展と生物多様性との関係にフォーカスした作品で、ビジョンやコンセプトの設定がしっかりしており、来館者に技術と生命との関係について自ら考えるきっかけを提供し、思索を深めてもらうことを意図している。法学と工学という異なる専門性を有する2名が共同で作業を行ったことで、互いの知識や視点を補完し合いながら制作を進めることが可能となり、多角的な視点から展示内容を深められたのも、共同制作の長所といえるものであろう。

『考～サメについて～』展を企画した劔持ひよりさん・鈴木小夜子さんペアは、近年サメという生き物が人気を博していることに着目し、海洋生物を扱う水族館と博物館の両方の側面を持った博物館系施設を考案したという。後者では海洋生物たちを取り巻く問題の解決策などを念頭に置いている。学芸員の仕事の大変さや着眼点、来館者の立場に立って考えることの重要性など、学ぶことはとても多かったそうで、作品の完成後に強い達成感を感じることができたという。来館者目線に立って考える力や博物館系施設の実際の運営がどのように行われているのかを実際に経験できたのはおおい。これこそはまさに、ミニミュージアム制作課題の究極のねらいである。

今回は従来とは異なり、2人ペアでの制作になった。3作品とも多様かつ大胆なアイデアが披露されており、新たな価値の創造が意識されている。制作上の実践的な創意工夫とともに、これからミニミュージアムを制作する人が得ることはおおいだろう。

博物館経営論 ミニミュージアムの制作を終えて

人文学部日本文化学科 3年 東田 純奈

人文学部日本文化学科 3年 二ノ宮 彩愛

はじめに

この博物館経営論において最も重要な課題がミニミュージアムの制作である。例年各自が自分でテーマを決め、模型や図録、ポスターを作成する。今年度に関しては履修人数が多かった関係で2人1組のペアを組み、そのペアで1つのミニミュージアムを完成させるという課題が課された。これまでは1人で行っていた課題を2人でできるようになったからとはいえ、すべてが楽になったわけではない。ペアでの活動になったことにより、意思疎通や情報共有の重要性が浮き彫りになった。

また、ミニミュージアムの提出は学期末の忙しい時期になるので、計画性をもって課題に取り組むことが肝要である。

本稿では実際の自分たちの反省点などを記し、ミニミュージアムの制作について順を追って振り返っていききたい。

(東田)

構想

ミニミュージアムの企画展を考えるにあたり、まずは問題意識を持つことがスタート地点だった。私は日頃 SNS を見る中で、日本語が誤用されている場面が多いことに気が付き、問題意識を持っていた。日本語は時代の流れの中で本来の意味とは異なる意味で使われ、いつしか後から生まれた意味の方が主流になることで意味が変わることがある。しかし私は、だからと言って誤用を甘んじて受け入れるべきではないと考えていた。そういった問題意識を端緒として、本企画展を構想した。また、昨今は若者の言葉遣いの乱れなどが社会問題になることも多いのではないかと感じたので、日本語の誤用や正しい言葉遣い、ネットミームから生まれる新しい日本語などについて、包括的に学べるような企画展が作れたら面白いのではないかと考えた。

企画展名は「ヤバイ！日本語展」。意味が多義化しているこの「ヤバイ」という言葉をあえて企画展名に用いることで、インパクトのある企画展名にするとともに、主に若者世代の興味関心を惹こうと考えた。

(東田)

現状分析・ビジョン・コンセプト

以下、実際に図録に記載したことを基に述べていきたい。

<現状分析>

日本語というのは実にさまざまで、話す人や状況によって使用する単語や言葉づかいはかなり異なる。代表的な日本語の種類としては「敬語」「方言」「男言葉・女言葉」などが挙げられる。そのなかで「若者言葉」と呼ばれるものがあることはご存じだろうか。文字通り若者たちが日常的に使用し、他の世代にはあまり使われない語のことである。「ぴえん」や「草」などがこの「若者言葉」に該当する。言葉というのは時代が進むごとに代わっていくものだが、この若者言葉を「日本語の乱れ」として問題視する声が他の世代から上がっている。特に40代以上の世代からの声が大きいが、これは若者言葉と呼ばれる語ひとつひとつの意味がわからないからだと考えられる。

だが言葉の乱れはなにも若者言葉に限った話ではない。熟語やことわざ、敬語などには本来の意味とは違った意味で使われてしまっているもの、誤用されたまま浸透してしまっているものも多く存在するのだ。そんな現代において、日本で使われている日本語というのはどういったものなのだろうか。この社会を生きていくうえでコミュニケーションは必要不可欠なものである。その手段で「言葉」というものについて、今一度向き合ってみてはいかがだろうか。

現状分析では、若者の言葉づかいの乱れや、敬語・熟語の誤用を課題として述べた。そのため、若者言葉とはどういったものなのか、誤用されがちな言葉の本来の意味を知ってもらう必要があると考えた。また、「博物館＝堅い」というイメージを取り払ってもらうため、体験型のアクティビティやゲームを展示に取り入れて、若い世代にも気軽に訪れてもらえるような展示を心掛けた。

<ビジョン>

- ・本企画展を通して、さまざまな「ことば」というものについて知ってもらいたい。
- ・言葉というものは時代とともに変化していくものだが、昔使われていた言葉や間違っ使われている言葉について学んでほしい。
- ・本企画展では若者言葉のほかに、英語の略語やネットミームといったものも紹介しており、知らない語があるかもしれないが、それらもひとつの知識として楽しんでほしい。

ビジョンでは、来館者にどのような意識を持ってもらいたいかを考え、上記の三点を本企画展のビジョンとした。

<コンセプト>

- ・紹介されている語の中に自分が間違っているものがあったら、これを機に今後の言葉づかいについて考えてほしい。
- ・死語などは世代によって感じるものが違うと思われるので、当時を懐かしんだり、知識として吸収してほしい。

コンセプトでは、現状分析やビジョンを踏まえたうえで、最終的に来館者に求めることをまとめた。

以上のことを主軸としながら制作を進める必要があるため、どのような展示にすることでそれを達成できるのか、展示構成やラベルのデザインはどうするのかなどを意識して制作する必要がある。

(二ノ宮)

模型制作

模型制作において最も苦勞したのは展示品の作成だ。本企画展は「日本語」や「ことば」を題材にしたという特性も相まって、目に見える形として展示できる「モノ」が少なかったのである。しかし展示パネルだけの模型ではつまらない。そこで、〇×クイズのエリアは「ヤバイ」の語源になぞらえて刑務所風のコンセプトで作ったり、「横転」「顔ない」などの若者言葉をモチーフにフィギュアを作ったりして、視覚的にも楽しめるように工夫した。



写真1 入口から見た模型の様子

また、制作の際にかかる費用はすべて自費負担である。そのため、いかに材料費を安価にすませるかというのも重要なポイントだった。

材料費を削減できるかは、行き当たりばったりで購入するのではなく、事前に模型の完成形をいかに具体的に想像できるかという所にかかっているだろう。もちろん、制作を進める中で変更が生じることは往々にしてあるので、その際に柔軟に対応できるよう、余裕をもって制作を進めることが重要である。結果的に購入したものは粘土、黒い端切れ、粘土の保存ケース、リメイクシート、針金の5つであった。竹串や段ボールに関しては家にあったもの

を活用したので、安価に抑えることが出来たと思う。

以下に、今後博物館経営論を学ぶ学生のために私が実際に行った模型制作のコツを記しておく。

・箱の中に仕切りになるような壁を作りたいときは、段ボールの穴に竹串を通して発泡スチロールに刺すとよい。

・布で仕切りたい場合は布地の粗いものを買って、上部を針金や棒などで貫けばのれんのようなになる。

・壁や床は絵の具で塗るよりも百均でリメイクシートを買うと簡単で早い。

・壁に貼る展示パネルは1度画像データとして作成してから、PowerPoint に貼り付けるとサイズを自由自在に可変できる。

・展示パネルの縦書きや横書きは展示の内容や、動線の向きに合わせて考えるとよい。

他にも、それぞれの展示に合わせてできる工夫は様々にあると思う。ぜひ、各々の創意工夫が見られる模型を期待したい。

(東田)

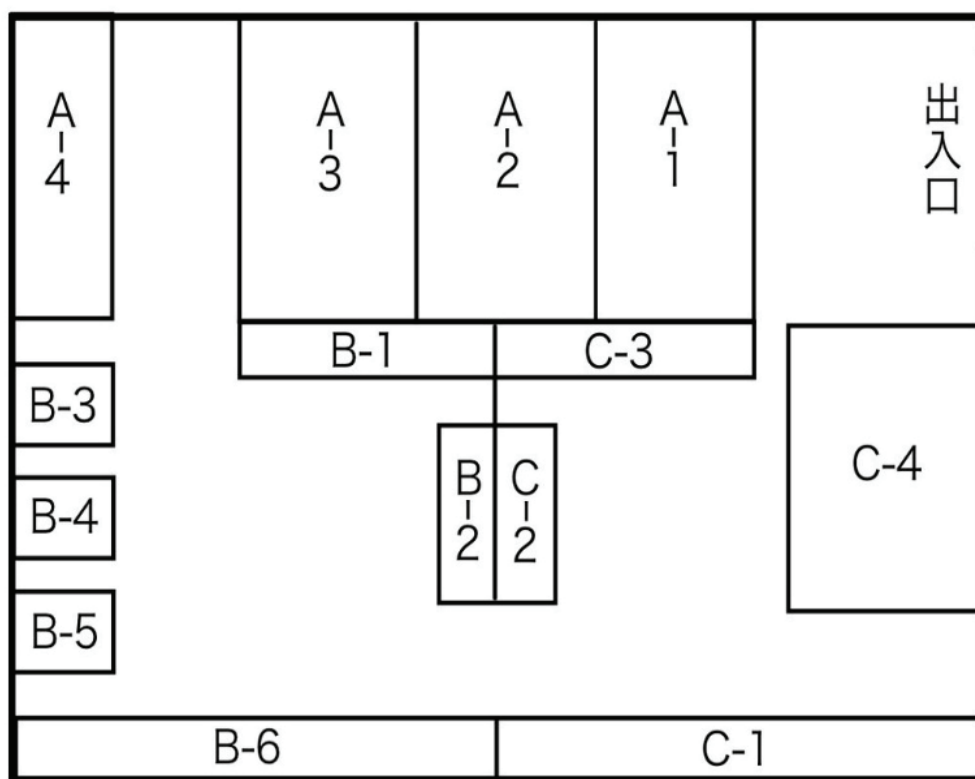


図1 模型の設計図



写真2 模型の完成図

図録

ごあいさつや最後の一言、謝辞などに関しては先輩方の作品や図書館にある図録を参考に作成した。特に図書館にある図録は、凡例の書き方について参考になった。

また、図録の制作において、より見やすいものにできるよう心掛けた。本体はA5サイズとコンパクトなため、文字の大きさや行間を工夫した。また、文字が敷き詰められては、新聞のようで読む気がなくなってしまいそうなので、余白は多めに確保した。後悔している点があるとすれば、展示資料目録の項目で、展示資料に関する解説を、図録独自で作らなかったことだ。時間の都合であきらめてしまったが、その要素があればより充実したものになっていただろう。

(二ノ宮)

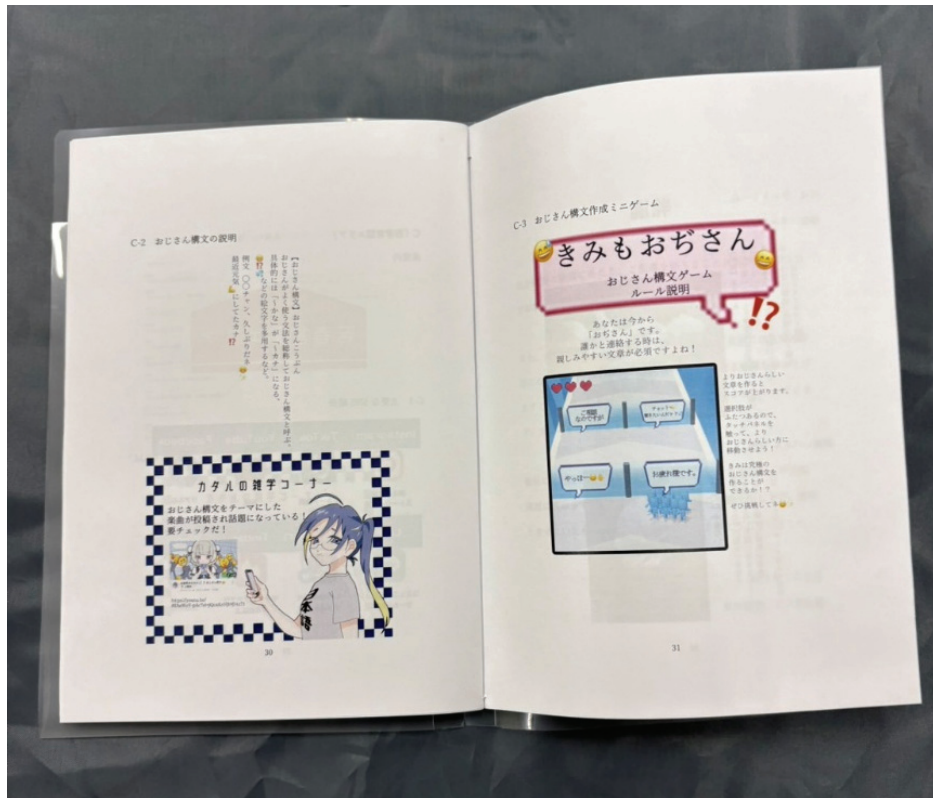


写真3 図録の写真

ポスター

ポスターに関しては、イラストを用いて親しみやすい雰囲気になることを意識した。また展示の中では「若者言葉」のエリアもあったため、ゲーム風の加工をするなどした。

ポスターは模型に貼り付けるとともに、図録の表紙にもなるものだったので、企画展名が見やすいようにするなど、目を引くデザインかどうかという点に特にこだわった。

また会期や開催場所などの必要な情報を漏れなく記載するという基本的な部分はきちんと守ってデザインした。ポスター担当者同士で話した際には、Canva や ibispaint などのアプリを使用したと言う人が多かったので、参考にしていきたい。

(東田)

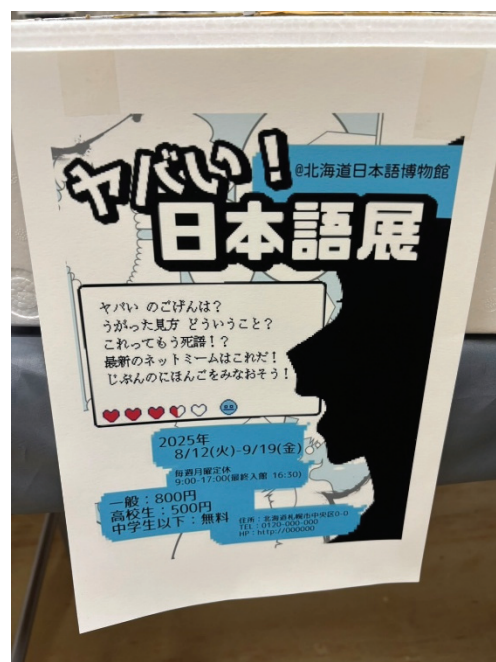


写真4 ポスターの写真

ミニミュージアムの製作を通じて成長した点

ミニミュージアムの製作を通じて、物事をより深く考え、整理する力が身についたと考える。展示構成を考えたり模型を作ったりする中で、伝えたい情報をより分かりやすく伝えるにはどうしたらよいかについて考えさせられた。また、実際に模型を作ることは、これまでに学芸員課程で学んだことの集大成でもあった。学芸員課程で学んだことを思い出しながら、相手に伝わる伝え方について模索したことは今後の生活でも生かせると思う。また、ペア間での製作ということで、お互いにコミュニケーションを取りながら相手の意図を汲み取る力も養われたと感じる。

(東田)

今回のミニミュージアム製作は、ペア間での細かいイメージのすり合わせが必須だったため、コミュニケーション能力や物事を掘り下げる力が成長したと思う。曖昧なイメージ像では完成度が低いものになるほか、内容は東田の案を採用したため彼女が想像しているものをしっかりと理解する必要がある。そのうえで自分なりに展示内容を考え、意見を出すことで、ミニミュージアム製作に貢献した。また、ミスは自分だけのことではなく、相方にも迷惑が掛かるので、この製作を通して責任感が増した。自分の担当範囲についてはしっかりと答えられるように、下調べを入念に行き作業に臨んだ。これらの力は社会人になった時に大いに役立つと予想されるため、今回学んだことを生かして就職したい。

(二ノ宮)

おわりに

今年度のミニミュージアム制作は、履修人数の関係で二人一組のペアで行った。しかし、だからといって課題が楽になったわけでは決してなかった。その分より高い完成度が求められたからだ。ペア間での緻密なコミュニケーションや、お互いが思い描く作品の完成形の共有は必須項目であった。このミニミュージアム制作において、最も肝心だったのは出だしであろう。作品の内容をどこまで深掘りできるかが作品の完成度を根本的に左右する。具体的にどういった展示内容にするか、動線はどうするか、ターゲットの年齢層は、といったことは二人でよく話し合っ決めて。どちらか一方の考えだけを取り入れず、積極的に意見を交わしあいながら構想を練るべきである。

役割を分担したら、そこからはひとりで作業する時間となってくる。どのように分担するかはそれぞれのペアに任されているが、私たちはポスターと図録をそれぞれが一人で作る方針をとった。そこからは限られた時間の中で何をこだわるか、どこを妥協するか、どう効率よく作業を進めていくかが重要になってくる。いつまでにこれをやる、など段取りを組めばスムーズに作業を進めることができるだろう。だが、大抵のことは思った通りに行かず、

初期の計画から変更を余儀なくされることがほとんどだ。そのため、想定外のトラブルにぶち当たった際の柔軟な対応が求められる。

大きく分けて模型・ポスター・図録の三つがあるが、その中でも特に模型は早めに完成させるに越したことはないだろう。なぜなら模型は最も予定を変更する可能性が高いからである。模型をなるべく早く完成させて、それに沿ったポスターや図録を制作するのが望ましいと考える。図録は特に「展示資料目録」という項目があり、私たちは実際の展示物の画像を掲載するスタイルだったため、模型が完成しなければ図録が作れないという状況であった。また、ミニミュージアム制作には一か月以上の時間が与えられていたため、まだ時間があるからと後回しにしていたのは失敗であった。正直、一夜漬けでなんとかかなるような課題ではない。直前の徹夜ですべてを済ませようとしては身体がもたないため、決して最後の数日間に詰め込むことのないように。これから博物館経営論を受講する学生には、同じ失敗を繰り返すことなく、より完成されたミニミュージアムを作り上げてほしい。

(二ノ宮)

博物館経営論 ミニミュージアムの作成を終えて

法学研究科修士課程2年 加賀谷 朋伽

工学部生命工学科3年 楠本 玲来

1. はじめに

3年生以上を対象に開講される「博物館経営論」では、これまでに学んだ知識を総動員し、ミニミュージアム（以下、「MM」とする。）の展示計画を立案するとともに、発泡スチロールを用いたミニチュア模型の制作、図録およびポスターの作成が課題として課されている。

MMの制作にあたっては、博物館経営の基本理念および展示意図を明確にするため、「現状分析（課題）」、「ビジョン（短期目標）」、「コンセプト（長期展望）」、「展示趣旨（展示タイトル）」をあらかじめ設定し、これらに基づいた展示計画および制作を行った。

本レポートでは、以上のMM制作過程を振り返り、制作において工夫した点および今後の改善点について報告する。

2. 構想

MMの制作は、2人一組のペアを組み、展示計画の立案から制作までを共同で行う形式で進められた。まず、2人で本格的なテーマ設定を行う前段階として、各自が自身の興味・関心に基づき、仮のMM作成における基本理念を作成した。その後、互いの基本理念をふまえ、いずれの理念や展示趣旨も損なわないよう調整を行い、両者を統合したテーマをMM制作の本論テーマとして設定した。

仮の基本理念の段階では、加賀谷は「生物多様性」を軸とした基本構想を、楠本は「バイオテクノロジー」を軸とした基本構想をそれぞれ提示した。

これらの構想をふまえ、MMの基本（展示）テーマは、「バイオテクノロジーの発展と生物多様性との関係」に焦点を当てた「いのちと技術のゆくえ：バイオテクノロジーと生物多様性の対話」とした。本制作の特徴は、これまで別個に語られることの多かった「技術」と「自然」という2つのテーマをあえて交差させ、生命をめぐる新たな視点を提示することを意図した、分野横断的な試みである。

3. 現状分析・ビジョン・コンセプト

(1) 現状分析

本MMの企画にあたっては、まず現代社会におけるバイオテクノロジー技術の発展状況を整理した。遺伝子編集やクローン技術に代表される生命科学技術の発展は、医療や環境保全といった分野において大きな可能性を有しており、新聞や各種メディアを通じて広く認知されつつある。

しかし一方で、報道や一般的な理解においては、技術の成果や利点が強調される傾向が強く、生物多様性や倫理的課題、さらには生態系全体への影響といった側面についての理解は十分に深まっているとは言いがたい。また、こうした技術の発展が生物多様性に及ぼす影響については、研究自体がなお発展途上にあり、社会的関心も必ずしも高いとは言えない。

以上の状況をふまえ、本MMでは、バイオテクノロジーと生物多様性との関係を改めて問い直す必要があると考えた。

(2) ビジョン（短期目標）

前項の現状分析をふまえ、本MMでは、バイオテクノロジーの発展と生物多様性との関係に注目し、技術と生命との関わりを多角的に捉えることを短期的な目標として設定した。技術の恩恵のみならず、それに伴う課題にも目を向けることで、来館者が生命科学技術をより立体的に理解する契機を提供することを目指した。

展示を通じて、来館者が技術と生命との関係について自ら考えるきっかけを得ることを、本MMのビジョンとしている。

(3) コンセプト（長期展望）

本MMのコンセプトは、生命科学と生物多様性という 2 つの領域を横断的に扱うことにより、「いのちとは何か」「私たちにとって本当に必要なものは何か」といった根源的な問いについて、来館者が思索を深める機会を提供することにある。

DNAや遺伝子組換え技術、絶滅危惧種といった展示テーマを通じて、生命科学および生物多様性の重要性を改めて見つめ直し、バイオテクノロジーの未来と私たち自身の選択とがどのように関わりあうのかを考えるきっかけとなることを目指した。

4. 模型製作

本MMの制作にあたり、配布された発泡スチロールを基に展示室のミニチュア模型を制作した。まず初めにゾーニングを行い、来館者がどのような順序で展示を鑑賞するかという動線計画を検討した。本展示はDNA技術や遺伝子組換えの歴史から将来の展望までを扱う内容であり、時間的な流れを理解することが重要であると考えた。そのため、来館者が入

口から出口まで順に展示を追えるよう、展示順が明確な強制動線を採用した。

次に、展示内容を整理し、「第1章：DNA・遺伝子組換え」「第2章：遺伝子組換えによる環境への悪影響」「第3章：遺伝子組換え生物の規制」「第4章：今後の展望」の4章構成とした。第1章から第3章までは基礎知識や社会的課題を理解するため、主にパネル展示を中心とした。一方、扱うテーマの性質上、実物資料の展示が難しいと判断し、第4章ではマンモスの再現模型やクローン羊ドリーの模型を配置することで、来館者に未来への想像を促す構成とした。

また、本棚とベンチを設置し、資料や新聞記事を読むことができるスペースを設けた。これにより、展示物だけでなく、情報を「読む」行為を通して理解を深められる場をつくり、実物資料の不足を補完することを意識した。展示構想が八割ほど固まった段階で材料調達を行い、段ボール、紙、紙粘土、爪楊枝、ボンド、絵具、スポンジ、クリアファイルなどを主に百円ショップで揃えた。制作は自宅で行い、A4対応プリンターを用いて展示パネルの縮小再現も行った。

工夫した点として、講評のため模型を自宅から大学へ持ち運ぶ必要があったため、爪楊枝を発泡スチロールに差し込み柱として用いることで、模型全体の強度を高めた。さらに、展示コンセプトに合わせ、本棚やベンチなどの爪楊枝は無着色のまま使用し、木の素材感を生かすことで、生命や環境をテーマとした展示空間の雰囲気づくりを意識した。

制作を通して、展示内容だけでなく「どのように見せるか」が理解の深さに大きく影響することを学んだ。限られた素材やスケールの中でも、動線や配置を工夫することで展示の意図を伝えられること、また模型制作を通して展示全体のバランスを意識して考えることの大切さを実感した。

5. 図録・ポスター

(1) 図録制作

本MMの図録制作は、模型製作と並行して進めた。図録は、MMの基本（展示）テーマである「いのちと技術のゆくえ：バイオテクノロジーと生物多様性の対話」に基づいて構成し、現状分析・ビジョン・コンセプトに加え、本展示における展示区画（展示構成）に沿って本文を作成した。展示ゾーンは、「第1章：DNA・遺伝子組換え」、「第2章：遺伝子組換えによる環境への悪影響」、「第3章：遺伝子組換え生物の規制」、「第4章：今後の展望」の4章構成とした。これに対応して図録も章立てを行い、各章ごとに論点を明確化したうえで、「どのような問題が生じているのか」「それらの問題にどのように向き合うべきか」という視点から、展示パネルの内容を補完・深化させる記述を行った。

一方で、本MMでは展示テーマを「バイオテクノロジーの発展と生物多様性との関係」に焦点化したことにより、バイオテクノロジーの観点に議論が集中し、生物多様性に関する文

献の収集や論点整理が難しくなる場面もあった。企画展を制作するにあたっては、「何を伝えるのか」を明確にするために一定のテーマ設定が必要になるが、主題を絞り込み過ぎることで、かえって展示内容の幅や深みが制限される可能性があることを実感した。このことから、展示テーマの設定においては、「広すぎず、かつ狭すぎない」適切な射程を見極めることの重要性が明らかとなった。

また、本MMは、「技術」と「自然」という、これまで別個に語られることの多かった2つのテーマを意図的に交差させる分野横断的な試みであった。そのため、企画立案や図録制作の過程においては、専門分野の異なる内容を統合的に扱う難しさも少なからず存在した。しかしながら、法学と工学という異なる専門性を有する2名が共同で作業を行ったことにより、互いの知識や視点を補完し合いながら制作を進めることが可能となった。

以上のことから、本MMにおける図録制作は、展示内容の理解を深める補助資料としての役割を果たすとともに、分野横断的な展示を成立させるうえで不可欠な要素であったと評価できる。

(2) ポスター制作

本MMのポスター制作では、展示コンセプトに基づき、生命や自然を感じさせるビジュアルを用いることを意識した。そのため、AOAO SAPPOROを訪れた際に撮影した魚の写真を使用し、来場者に展示内容を直感的に伝えられるよう工夫した。制作にはCanvaを使用し、写真と文字のバランスを調整しながらレイアウトを行った。

ポスターには展示タイトルに加え、キャッチコピーとして「遺伝子組換えと生物多様性を考える」を設定し、展示の主題が一目で伝わるようにした。また、会場、開催期間、開館時間、休館日といった基本情報も明記し、来場者が必要な情報を容易に把握できるよう整理した。特に文字サイズや配置に配慮し、視認性を高めることを意識した。

さらに、掲示環境や印刷条件の違いを想定し、カラー版とグレースケール版の二種類のポスターを制作した点も工夫した点である。これにより、紙質やインクの制約がある場合にも柔軟に対応できるよう配慮した。

ポスター制作を通して、展示の第一印象を決定づけるビジュアルデザインの重要性を学んだ。また、単に美しく見せるだけでなく、コンセプトを反映させながら情報を整理し、来場者に伝えることの難しさと面白さを実感した。展示内容とデザインを結び付けて考えることで、MM全体の世界観を統一できると感じた。



図1 模型、図録、ポスター

6. おわりに

本MMの制作を通して、展示は単に情報を並べるだけではなく、構想からデザインまでを一体として考えることが重要であると学んだ。2人ペアで取り組む中で、それぞれが担当する分野を共有しながら構成を調整することで、多角的な視点から展示内容を深めることができた。また、模型制作やポスター制作を通して、来館者の動線や第一印象といった空間的・視覚的要素が、展示の理解度に大きく影響することを実感した。限られた時間や素材の中でも、コンセプトを意識して形にしていく過程は、展示づくりの難しさと同時に楽しさを感じる経験であった。本制作を通して得た学びを、将来学芸員として展示づくりに携わる際や、今後のものづくりの活動に生かしていきたい。

博物館経営論 ミニミュージアム制作を終えて

人文学部日本文化学科3年 劔持 ひより

人文学部日本文化学科3年 鈴木 小夜子

1. はじめに

博物館経営論の講義では「ミニミュージアムの構想及び制作」の課題が課される。ミニミュージアムとはその文面からも分かる通りミニチュアサイズの博物館である。1人1つずつ制作する例年とは異なり、今年はペアでミニミュージアムの構想と制作を行った。相方がいるということで構想の相談や材料の調達など楽しい反面、当然のことながらクオリティが求められたが工夫を凝らして完成させることが出来た。本稿では、我々のミニミュージアムの構想や制作過程やコンセプトなどを紹介する。今後ミニミュージアムを構想、制作する方々の手引きとなれば嬉しい。

2. 構想

ミニミュージアムを制作するにあたって、ただ「博物館」らしいテーマとするのではなく、今までの講義内容や実習などを参考にしつつ何か独創性のあるミニミュージアムというものを作り出したいと考えていた。しかし、あまりマニアックなものをテーマとして選んでしまうと資料が少なかったり、イメージがしにくいということで、博物館自体のテーマは実際にあるようなものを選択し、博物館そのものに工夫をした。「サメ」という生き物は近年映画やマスコットのキャラクターとして人気を博してきている。また、メガロドンの化石などの事例や海洋問題の犠牲となる面など人々が注目する存在をテーマとし、「博物館」に仕掛けを施した。当たり前のことながら「サメ」は海洋生物である。そこで、海洋生物を扱う水族館と博物館の両方の側面を持った博物館系施設を生み出せば良いのではないかと考えた。第1章「サメの生態・進化」、第2章「サメと文化」、第3章「サメと人々」の3つのブースに分けて構想を練り、水族館的なサメの生物としての解説のみならず、サメが人々の中でどのような存在となっているのか、どのように共生してきたのかについて資料を展示し、博物館としての役割も果たすミニミュージアムを構想した。

3. 現状分析・ビジョン(短期目標)・コンセプト(長期目標)

現状分析

現状分析について、実際に掲載した内容をもとに述べていく。まずは北海道における海洋問題や海洋生物に携わる博物館系施設(動物園や水族館)の孕む問題、また海や海洋生物の持つ可能性について触れ、海や海洋生物についての理解を促し、ミニミュージアムのテーマへとつなげることを目的とした。「北海道立海洋生物博物館」はこのミニミュージアム構想における架空の施設であるが、「水族館」と「博物館」の間の施設ということで博物館系施設の新たな運営構造に役立てられるのではないかと分析した。

ビジョン(短期目標)

以下をビジョン(短期目標)に設定した。

- ① 海洋生物の生態や人々との関わりについて知ってもらう。
- ② 海洋生物が持つ魅力を知り、興味を持ってもらう。
- ③ 展示を通じて一つでも海洋生物について知らなかった」ことを知り、理解してもらう。

コンセプト(長期目標)

以下をコンセプト(長期目標)に設定した。

- ① 海洋生物に興味を持ってもらい、自ら知識を深めてもらう。
- ② 海洋生物たちを取り巻く問題の解決策について一人一人に考えてもらい、解決の糸口とする。
- ③ 「博物館」と「水族館」の間であるという強みを活かし、海洋生物に対しての理解を深める場の先駆けとなる。

4. 模型制作

模型を制作するにあたって、本物のサイズに近くなるようにすること、展示物が見やすくなるように設置することを意識した。

博物館の構造は、出入り口を写真1の右下に設け、館内を1周できる導線にした。また、壁の色を青色、床の色を白にし、海を連想させるような色にした。

展示台は雑紙を四つ折りして制作し、展示台のガラスはCan★Doの透明なミニカーケースを使用した。

ガラスは展示台の大きさに合わせて切り、セロハンテープで接着した。解説パネルは、文量が多くならないようにすること、必要最低限の情報を入れることを意識したが、分かりやすい解説を作ることに重点を置きすぎてしまい、いくつか文量が多くなりすぎたものもあった。レイアウトは中央揃えにし、題名を解説の文字よりも少し大きくする、文の中途半端なところで改行をしないなど、読みやすくなる工夫をした。博物館の構成は、先述の通り、3つの章に分けられており、これらを記すパネルは『銚子ジオパーク』のパネルのレイアウトを参考にした。

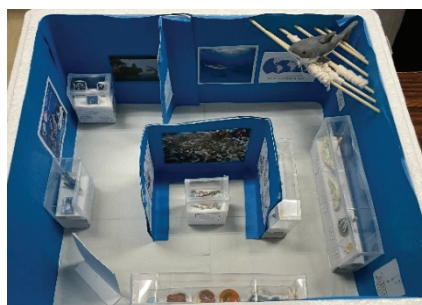


写真1 博物館を上からみた写真

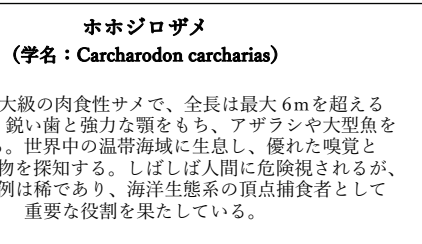


図1 展示解説ラベル

第1章の「サメの生態・進化」では、サメの歯の化石やサメの顎骨の標本の展示を設置した。サメの歯の化石は実際の歯の大きさを調べ、その大きさに近くなるように意識した。また、大きめの歯の化石や顎骨の標本は展示台に穴をあけて竹串を刺し、それを展示物に固定し、展示物を立たせて見やすくなるように工夫した。

また、第1章では、サメの模型を角の天井に設置し、臨場感を味わえるようにした。サメの模型を天井に設置するにあたって、当初はたこ糸でつるす予定だったが、模型の重さに耐えきれなかったため、竹串を壁と壁に何本も刺し、その上に模型を乗せるという対応をとった。



写真2 竹串を使った展示



写真3 サメの模型

第2章の「サメと文化」では、サメに関するDVDや本、サメのぬいぐるみなどの展示を作成した。

DVDは粘土でパッケージを作り、それに本物のパッケージ画像を粘土に貼り付けて作成した。本は雑紙とプリント用紙で作成し、『因幡の白うさぎ』の絵本の白うさぎがサメの背中を渡っている場面の画像を紙に貼り付け、見開きにして設置した。また、展示している場所の先に、サメと白うさぎの顔出しパネルを設置し、子供も楽しめる設計にした。

サメのぬいぐるみはIKEAのものを参考にし、色や形などをなるべく参考にしたものに近いように意識した。

また、第2章ではモニターを設置し、サメのキャラクターを紹介する動画を流すことを想定して、様々なサメのキャラクターの画像を組み合わせることで1つの画像を作成した。キャラクターの画像を組み合わせる際、背景が白い画像もあり、キャラクターのみを貼り付けられるよう、Wordの余白を消す機能で背景を消す作業に苦戦した。



写真4 顔出しパネル



写真5 サメのキャラクター画像

第3章の「サメと人々」では、サメ料理や、サメの胃の内容物、サメに関する新聞記事などを展示した。サメ料理は、Can★Doのミニチュアのお皿を使用し、料理は粘土で作成した。フカヒレスープを作る際はオレンジ色のUVレジンを使用し、スープを再現した。

サメの胃の内容物を調べてみるとガラスやプラスチック、機械の破片や網などがあると書かれていた。そのため、たこ糸を切って網のようにし、粘土に薄い水色を塗り、ガラスやプラスチックを再現し、黒色や薄い赤色を塗って機械の破片や錆などを再現した。また、汚れている感じを出すために、作成したもの全てに薄いグレーを塗り、汚れを再現した。

また、第3章では、サメの乱獲問題の新聞記事やサメの胃の内容物の展示などをし、サメに関する社会問題を来館者に知ってもらえるような展示になるよう工夫した。



写真6 フカヒレスープ



写真7 第3章 サメに関する新聞記事
サメの胃の内容物

模型にかけた制作費(材料費)は1,200円程度で、あまりお金をかけずに制作できたと考えられる。制作時間は30時間以上に及び、時間は相当かかってしまったように感じるが、早めに作業に取りかかったため、焦らずに完成させることができた。よって、今後、模型を制作する方たちには、早めに作業にとりかかることをお勧めする。

5. 図録・ポスター

図録では、図を大きくする、図の数を多くするなど、見やすい図録を作成することを意識した。解説は、解説パネルの内容に何点か解説を加え、さらに詳しく展示物を知ることができるような図録になるよう意識した。

第1章のサメの歯や顎の標本の図録を作成する際には、自分が作成した展示物の写真に加えて、サメの写真も貼り付け、どのような見た目のサメの歯の化石や顎骨の標本なのかのわかりやすくなるように工夫をした。

第2章のサメに関するキャラクターを紹介するものは、模型では、「キャラクターとしてのサメ」としてしか紹介していなかったものを、図録では「マスコットキャラクターとしてのサメ」「アニメキャラクターとしてのサメ」「グッズとしてのサメ」と分類を細かくし、解説文をつけ、さらにわかりやすく、例をたくさん知ることができるよう工夫した。

模型の第3章の部分では、サメに関する新聞記事の画像を展示していたが、解説をつけていなかったため、図録では解説をつけ、サメに関する社会問題がわかりやすくなるようにした。

ポスター制作に関しては、「水族館」に寄りすぎず、「博物館」に寄りすぎずを目指してデザインを作成したため絵画風になっている。また、博物館の情報に関しても、ポスターのイラストとの統一感や色合いなどを考えつつ見やすさなどにも考慮した。設定にもこだわりがある。日時設定に関しては、子どもの夏休みを利用して、など時期に応じた客層を想定している。入館料が無料なのもより多くの人々に足を運んでもらいやすくなるためなどのアイデアから採用したものである。



写真8 ポスター



カダラザメの歯の化石

深海に生息する原始的なサメの一種で、最大で体長6m、体重1tにもなる大型のサメ。歯(えら)の数が6対あり、胎生であることが特徴。「生きた化石」とも呼ばれている。歯は上顎と下顎で形状が異なり、形は、細長い三角形で、基部が近心・遠心方向に広がっている。この上下の組み合わせによりカダラザメは効率的に獲物を捕食することができる。



戦前の昭和10年代、三重県で起こったサメ騒動について書いた記事。当時の人々が恐怖する様子や、サメに対してどのような対応、対策を行っていたのか、またサメの飼育(捕獲されたサメのその後)についてが記されている。現在でもサメの出没はニュースに取り上げられたりしますが、昔の人にとっても大きな話題であったことが分かる。

写真9. 10 第1章(上) 第3章(下) 図録



サメは映画『ジューズ』熱い人々から怖いイメージを持たれることも多いが、近年ではサメはマスコットキャラクターとしての人気も高まっている。ゆるキャラやアニメキャラクターのモチーフになったり、かなりデフォルメされ可愛いデザイングッズとなったり、サメは文化的には怖い存在としてではなく、可愛い存在としての地位も築き上げてきている。

写真11 第2章 図録

6. おわりに

ミニミュージアムを制作するにあたって、自分たちで現状分析や長期目標、短期目標など、様々なことを考え、さらに、博物館の構成や展示物の内容を決めなければならなかったため、苦勞することが多かった。また、模型の制作では、大変さや難しさ、思うようにいかないもどかしさなどもあったが、模型を完成させた際には強い達成感を感じることができた。

今回、ミニミュージアムを制作したことによって、学芸員の仕事の大変さや着眼点、来館者の立場に立って考えることの重要性など、学ぶことはとても多かった。

よって、今後、博物館や展示に関わる立場になった際には、今回の経験を活かしていきたいと考える。今回のミニミュージアムの評価会において、我々が制作したミニミュージアムを優秀作品に選定していただいたことを、ありがたく思う。

7. ミニミュージアムの制作を通して

ミニミュージアムの制作を通じて、来館者の立場に立ち、展示物の見やすさやわかりやすい構造を考えるなど、人の目線に立って考える力が身についたように感じる。また、解説文や図録の文章などを考える際には、必要最低限の情報で分かりやすい内容になるよう工夫をし、相手にわかりやすく説明するための文章構成力や必要な情報を取捨選択する力も養うことができたように感じる。

今回の制作を通じて培った、人の目線に立って考える力、文章構成力や情報の取捨選択能力などを、今後、社会に出た際の仕事やコミュニケーションの場面において活かしていきたいと考える。

劔持 ひより

ミニミュージアムを制作してみて感じたことは、博物館の運営が具体的にどのように行われているのか、ということである。自分たち自身で構想から現状分析、模型の制作をしたことで実際の博物館系施設がどのように企画を行い、資料の配置や博物館利用者への配慮について策を練っているのかを身をもって体感することが出来たように思う。ここから私は、事業や企画に携わるとはどのようなことか、また運営能力というものが培われたと実感している。この力を、今後社会に出た際に活かし、私にしか出来ない社会貢献が出来るものと考えている。

鈴木 小夜子

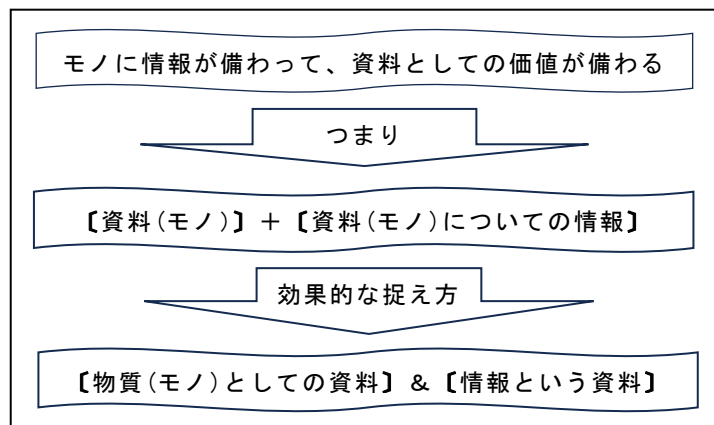
「情報という名の資料」と「展示という教育手段」への活用

北海学園大学講師 水崎 禎

博物館資料の捉え方

20年前に『博物館資料論』を担当し始めた当初から、資料を「フィジカル」（物質）と「インテレクトチュアル」（情報）の両面で捉えてのコレクション・マネージメント（管理）の有用性について説いてきた。その中で、「実物資料」と「それに関する情報」という捉え方が間違いではないが、私が推奨する捉え方として、「モノとしての資料」と「情報という資料」という考え方が効果的であるとしている。分かりやすく示すと以下ようになる。

この捉え方が無形資料の保存と活用に効果的であると考え。例えば歴史的出来事に関する実物資料は、その出来事に関する残存するモノが中心的な資料とされてきた。日本の博物館関係者が好む表現を用いると一次資料と呼ばれることが多いモノである。しかし、これらのモノは「歴史的出来事に関するモノ」ではあるが、「歴史的出来事の実物」ではない。「歴史的出来事の実物」とは、タイムマシンに乗ってその出来事が起こった年代/日時まで遡り、実際にそこで見る景色である。現代の技術では過去を訪れて実際の現場を見るということとはできないため、その出来事を記録したモノが実物の役割を果たすことができる。その形態は当時を記録した文字（テキスト）、画像、映像、音声などがあり、昨今の日本に於いて、これらを文化情報アーカイブと称している。



また、その出来事に遭遇した（関わった）人々が多数いれば、同じ出来事であってもその観点や体験は三者三様である。しかしこれらの体験は当事者の記憶として残っているため年月の経過とともにいずれは消失してしまう。そこで、当事者（体験者）の存命中にその記憶を文化情報アーカイブとして記録しなければならない。上述のように同じ出来事でもそれぞれのストーリーは三者三様であるから、より多くの人々の記憶を文化情報アーカイブとして記録することにより、その歴史的出来事に関する資料が充実することとなる。

また、その出来事に遭遇した（関わった）人々が多数いれば、同じ出来事であってもその観点や体験は三者三様である。しかしこれらの体験は当事者の記憶として残っているため年月の経過とともにいずれは消失してしまう。そこで、当事者（体験者）の存命中にその記憶を文化情報アーカイブとして記録しなければならない。上述のように同じ出来事でもそれぞれのストーリーは三者三様であるから、より多くの人々の記憶を文化情報アーカイブとして記録することにより、その歴史的出来事に関する資料が充実することとなる。

従来の展示の典型的な形態は、残存したモノがメインの資料となり、映像、画像、音声などはモノをサポートする副次的なものとされてきた。

博物館は教育機関としての役割を担っているため、展示は博物館的な教育手段の一つである。博物館という場で、博物館の特徴を生かして来館者に学んでもらうには、様々な形

態の資料を適切に取り入れて組み合わせ、視覚（言語）、聴覚（言語）、視覚（画像）、聴覚（音声）、視覚+聴覚（映像）、実物、触覚、味覚、嗅覚、……そしてこれらの組み合わせというように、多くの形態、および感覚で「体感」して学べる構成が重要である。

先に言及した「【資料(モノ)】 + 【資料(モノ)についての情報】」という捉え方では、有形の資料が中心で、文化情報アーカイブ的な資料が副次的という構図に陥りやすい。そこで「【物質(モノ)としての資料】 & 【情報という資料】」という同等に位置する構図で捉え、展示のテーマについて、より効果的に多感覚で体験してもらうために様々な形態の資料を選択して組み合わせる構成することが求められる。

『博物館資料論』での導入

授業では、全体を通して資料の捉え方について言及しているが、それらの中から2つのアクティビティについて紹介する。

1 つ目は言語コミュニケーションと非言語コミュニケーションに関連した内容で、特に非言語的伝達の体感に重点を置いた。始めに“Interactive Experience Model”^(注1)と、その中の“Physical Context”についての説明を施し、Physical Context の非言語的作用について焦点を当てた。文化により特定の色や形状に付与された意味があることを説明し、言語（文字）についてもフォントやサイズ、デザインによって与える印象が異なるという文字の可能性について体感してもらった。また、言語の方が伝わりやすいことと、イラストの方が伝わりやすいことについても言及した。次に、聴覚による無意識のイメージ（印象付け）について、いくつかのシチュエーションで異なるBGMを流し、無意識に受ける印象（感覚）の違いについて体感してもらった。このようにして、非言語の要素による無意識の印象による学びの効果を実感してもらった。

2 つ目はデジタルアーカイブのメディアの組み合わせによる理解度（イメージ）の違いについてである。まず“Cone of Experience”^(注2)を提示し、教材としての様々な形態とそれぞれの特徴を示した。そして、某シンガーと曲について、【文字のみの説明⇒画像（写真）を加える⇒音楽のみ⇒音楽+映像（白黒）⇒音楽+映像（カラー）⇒これらの組み合わせ】というように異なるメディアを加えていくことによる理解度の変化を体感してもらった。

これらのアクティビティについては、授業に取り入れることの効果を感じることができたため、来年度はこれらを応用したアクティビティを加えることを検討している。この様に、学芸員らしい資質を養うため授業では言語で説明された事柄の暗記による知識の獲得という枠を超えた、体感による感覚での理解を得ることができるよう工夫を凝らしている。

(注1) The Interactive Experience Model

Falk, John H.; Dierking, Lynn D., *The Museum Experience*, Whalesback Books, Washington, DC, 1992, p5

(注2) The Cone of Experience, also known as the Learning Pyramid, introduced by Edgar Dale,

in 1946. Dale introduced the Cone of Experience concept in a textbook on audiovisual methods in teaching at Ohio State University. He revised it for a second printing in 1954 and again in 1969.^(注3)

(注3) Kovalchick, Ann; Dawson, Kara, *Education and Technology: An Encyclopedia*. ABC-CLIO, 2004, p161

博物館資料ドキュメント 『木製の鳥の置物』

人文学部日本文化学科 1年 伊藤 早来

オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 1

この資料は「木製の鳥の置物」であり、所有者は伊藤早来（いとうさく）である。メインで使われている木材、くちばし部分の木材、そして目の部分では色が異なるため、使用されている木材はおそらく3種類であると推測する。しかし、目は焼きを入れて色を付けている可能性もある。

サイズについては、最も高さのある所は鳥の頭頂部であり、そこから床に接するところを高さとする 65mm である。本資料の鳥の顔を正面とすると正面と後ろの横幅の最長は 45mm、本資料を横から見たときの横幅の最長は 115mm である。窪みは上から見て楕円形であり長軸は 60mm、短軸は 35mm である。また、床に接する面も楕円形であり、長軸は 40mm、短軸は 30mm となっている。資料全体の質量は 46g である。

使用されている木材の種類は現在不明だが、木材に詳しい者であれば、経年変化で色が多少変わっているものの、密度や確認できる表面の木目から本資料で使われている木の種類を特定できるかもしれない。

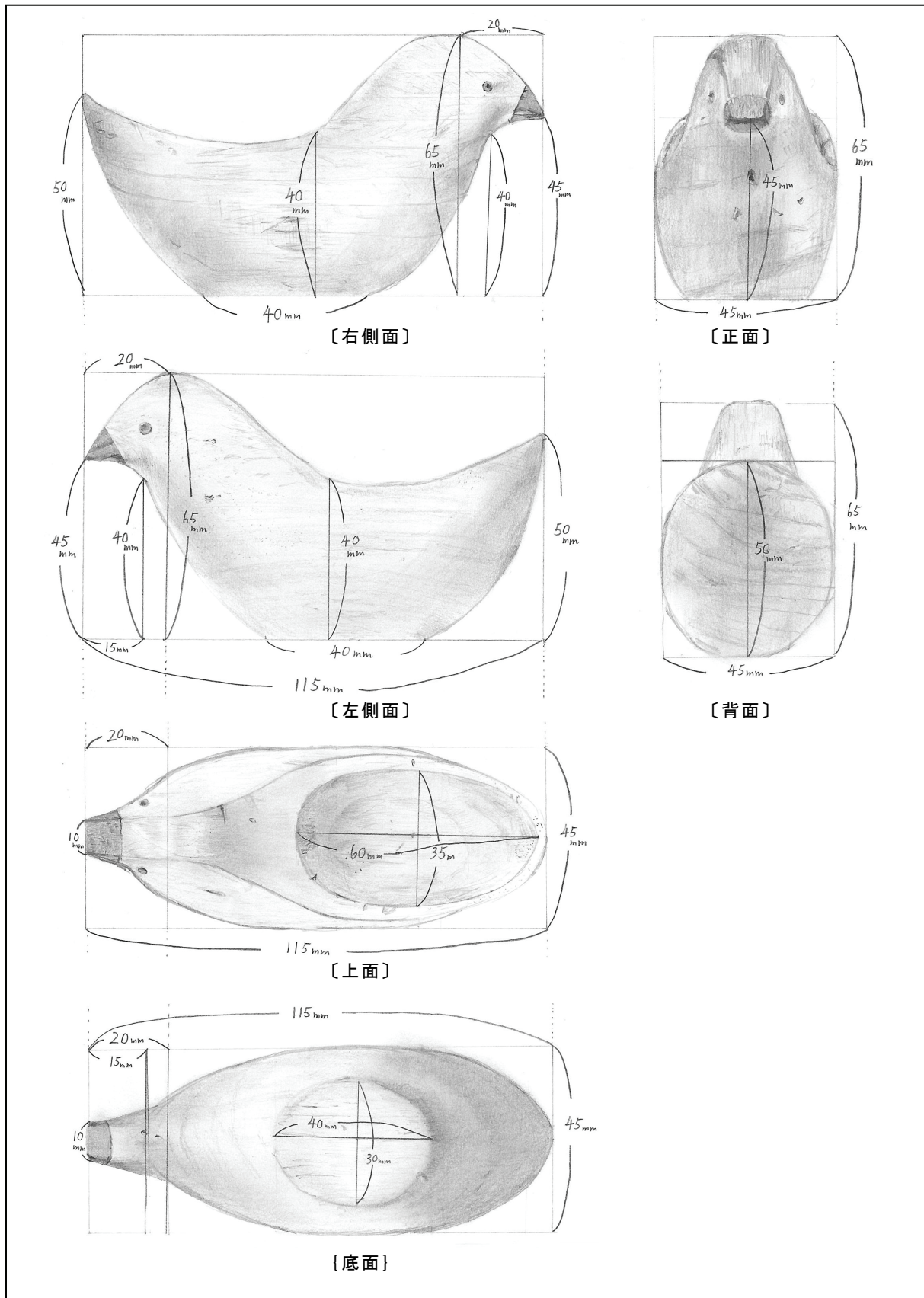
本資料は木目により木の質感を見て味わうことができるが、ツルツルとした艶がある。そのことから、ヤスリ等による研磨に加え、ニス塗装が薄く施されていると思われる。

オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 2

2014年に元所有者であった伊藤の曾祖母が亡くなり、親戚が北海道札幌市西区琴似にある曾祖父母の家を片付けしている際に現在の所有者である伊藤に渡った。伊藤は本資料を曾祖母が亡くなる1年前に、亡くなった曾祖父が作ったものだと考えていた。しかし最近、伊藤の父親が「昔、あの家（曾祖父母の家）の中を一部貸していた時に入ってきた木工芸屋さんが作ったものではないか」と言ったため、正確な製作者と製作年月日はともに不明である。伊藤に渡るまでどのような場所でどのように使用されていたかは不明だが、伊藤に渡った2014年以降については判明している。基本的には部屋の窓から離れた棚にショーケースに入れずに置いて飾られていたが、模様替え途中には窓台（窓の前にあるカウンターのような所）に置いていたため、短期間ではあるが日光を直接浴びていた期間がある。

本資料にある窪みの使用目的だが、現在は製作者と元所有者であった曾祖父母のどちらもないため正確には分からないが、鳥がモチーフになっていること（明確な鳥の種類は不明）と、窪みのサイズからおそらく卵を置くエッグカップとして作られたと考える。しかし、伊藤はアクセサリーや小さいフィギュアを入れて使用していた。（現在は何も入れず、棚に置いている）

イラストレーション (Illustration)



コンディション・レポート (Condition Report)

現在の所有者である伊藤に渡ってから 11 年が経過していることから、作られてからは更に長い年数が経っている。そのため経年変化がかなり進んでいると考えられる。

損傷に関しては、鳥の形が変形するような大きいものはないが、小さい凹みが数か所確認できる。目視できるもので、正面は 3 箇所、後ろは 2 箇所、右側は 6 箇所、左側は 4 箇所、真上は 6 箇所ある。窪みの頭側には 7 mm×3 mm の範囲で傷を確認できる。

目視と手で触ってニス剥がれの確認を行ったが、今のところニスの剥がれは窪みのキズ以外には確認できなかった。

リクワイアド・エンバイロメント (Required Environment)

本資料には木材とニスを使用されているため、直射日光には強くない。理由は主に 3 つ挙げられる。1 つ目は日光によって資料の温度が上がることで木材が乾き、資料が割れてしまう可能性がある。これは木材内部の水分が一気に蒸発することで、木が小さく縮むため起こる現象である。2 つ目は、紫外線による木の変色である。これは我々の肌が日に焼ける仕組みと似ている。最後の 3 つ目は、紫外線や熱で劣化が進行することである。紫外線はニスを酸化させ、黄ばみや色あせが発生する。また、100℃以上の高温になるとニスが軟化し、少しの衝撃でも跡がつきやすくなり剥がれやすくなる。

湿度は 40%～60%の間が人間の健康と資料の保存に適している。この湿度より低すぎると上記の直射日光の木が割れる理由と同じように乾燥して木が割れる可能性がある。逆に高すぎるとシロアリやキクイムシなどといった害虫が発生して木を食われることやカビが発生する可能性が出てくる。

また本資料は木材を主としているため、火元に近づけると燃え移る可能性が大きいので絶対に火気のある場所に置いてはならない。

以上より、本資料の保存環境は、直射日光が当たらず、かつ風通しが良い場所であるべきと考える。

ハンドリング・インストラクションズ (Handling Instructions)

ニスの塗装が施されているため、ニスを塗っていないものに比べて多少汚れや傷に強くなっている。しかし、ニスの塗装は分厚いものではないため、アクセサリやペンなど硬く鋭利なものは資料のそばから離しておき、資料の損傷を阻止する必要がある。

また、前述した通り火元や直射日光の当たる場所に置くと本体の変色や変形につながり、最悪の場合は焼失する可能性があるため、ストーブや窓の近くでは絶対に作業をしてはいけない。

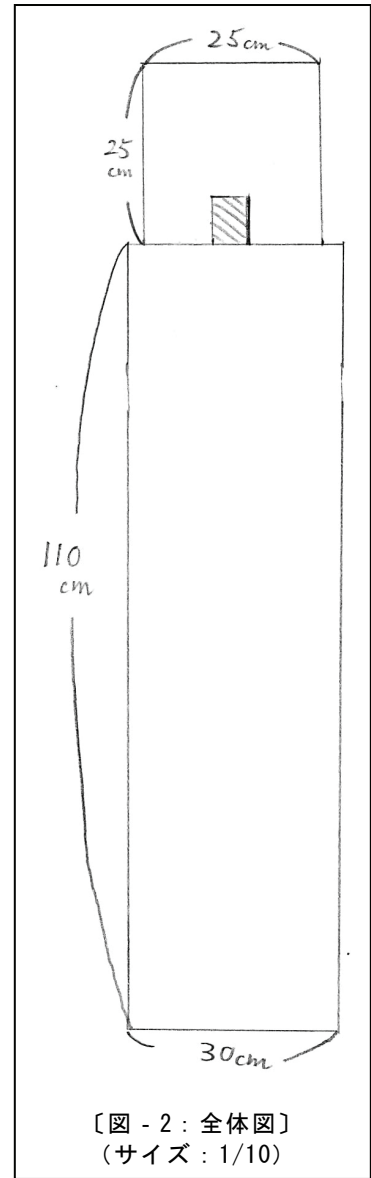
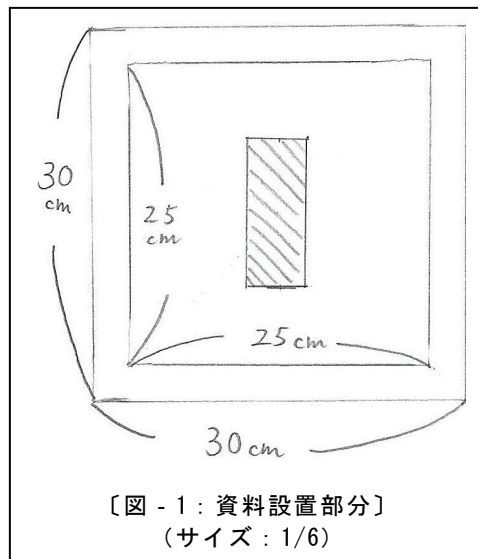
エキジビット・マウント・デザイン (Exhibit Mount Design)

この資料は水平で平らな面であれば、支えが全くいらぬほど安定して自立することができるので、資料全体を見まわしやすいように本資料の周辺にはなにも置かない。水平で平らな台に本資料を置くことにより、鳥をモチーフにしていることを分かってもらいつつ、本資料の特徴である真上の窪みを目立たせたいと考えている。

展示を見るために訪れる来館者は、幼い子供というよりは木製のオブジェを好む大人が中心となるのではと考えている。よって、展示された資料を見る人の身長は140cm以上であると仮定し、台の高さは110cmとする。また、資料を乗せる台の面は30cm×30cmが適当であると考え。来館者が誤って触ってしまったことで資料が破損するのを防ぐこと、かつ窪み部分に埃がたまることを防ぐために、展示ケース(25cm×25cm)を設置する。

博物館の全体の資料を北海道で作られた木製オブジェと仮定しているため、台の色に関しては白色にすることで、展示会場に清潔感を与えつつ、木のぬくもりを伝える。

照明は、前述したように資料が照明の熱で高温になると木とニスの変色につながるため紫外線の放出を抑えるLED照明のスポットライトにして可能な限り低い明るさ(照度基準500lx)に抑える。設置場所は天井にして、清潔感を出すため白色の光を放つライトを設置する。



※ 図の斜線部分は資料を表す

レーベル (Label)

資料名を「木製の鳥の置物」ではなく「背中に窪みのある鳥」としたのは、博物館の展示会場全体に北海道で作られた木製オブジェを展示すると仮定しているため、他の資料にはない特徴を目立たせるためである。

資料を展示する台に白色を用い、かつ展示会場全体をシンプルにすることで、素朴な雰囲気強い木製オブジェでも資料として存在感が生まれると考え、レーベルも白黒でシンプルに仕上げた。

展示の対象者を大人としているため、上品な雰囲気を醸し出すことをねらい、フォントはMS_P明朝を採用した。また、レーベル自体を資料近くの台上に設置するためゴシック体では、資料に対して文字の主張が強いと考えた。

背中に窪みのある鳥

現所有者の琴似に在住していた曾祖母の家に飾られていたオブジェである。曾祖母が2014年に息を引き取った際に現所有者の伊藤氏の元に渡った。

窪みの明確な使用用途は不明であるが、鳥がモチーフになっているかつ、窪みの深さから卵を置いて使用するエッグカップと推測する。

現所有者:伊藤 早来

〈参考文献〉

木と人「ちょっとディープな木の世界①木材の調湿効果って本当？」(参照 2026. 1. 18)
<https://woodlink-kitohito.jp/979/>

伊川彫刻展「木製品を取り扱う際の注意点は？木製品の特徴やお手入れ方法について」(参照 2026. 1. 18)
<https://www.hori-masa.net/blog/4175/>

博物館資料ドキュメント 『シルバーの指輪』

人文学部日本文化学科 1年 大山 漣斗

オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 1

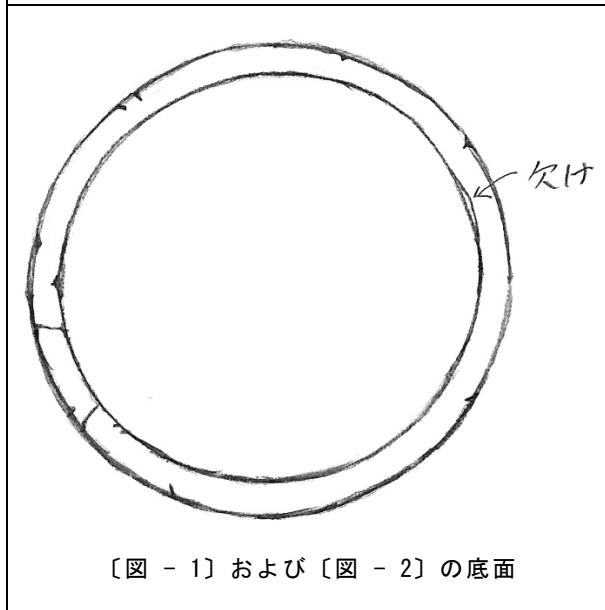
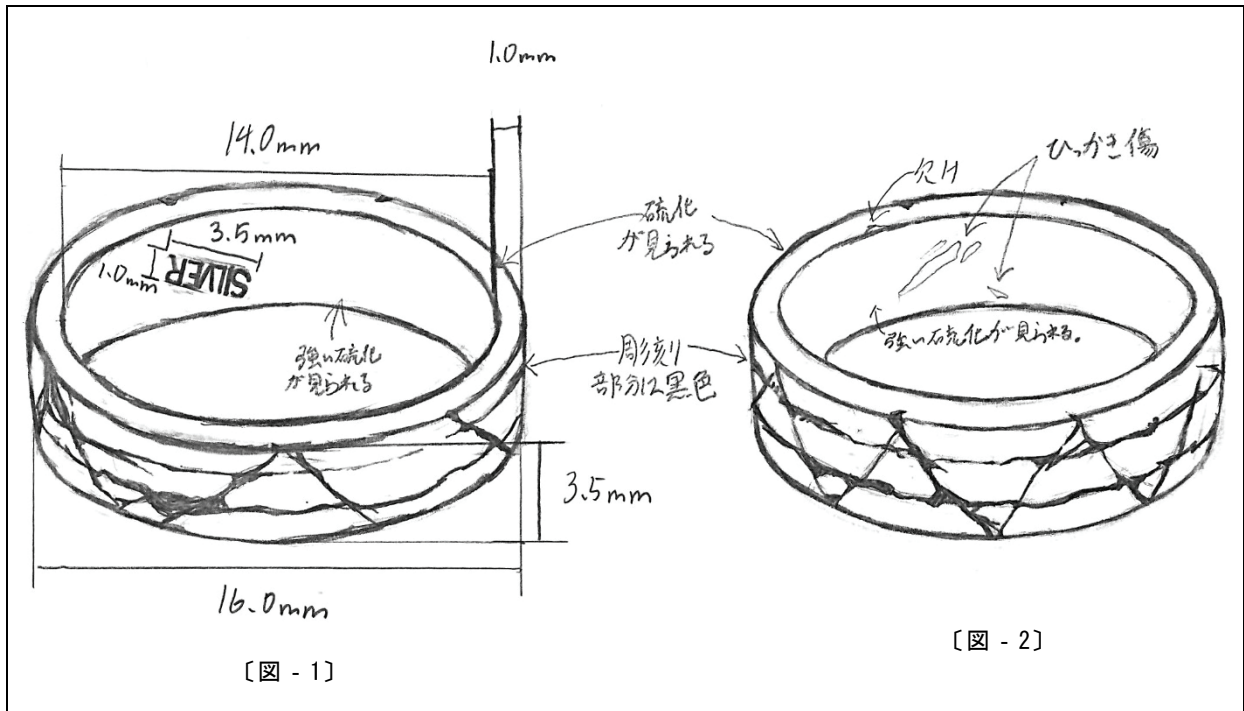
本資料は素材が銀の指輪である。リング幅は約 3.5mm、内径は約 14.0mm、外径は約 16.0mm である。よって、号数は 3 から 5 号ほどと推測できる。指輪の内側には SILVER の刻印があり、このことから一目でこの指輪の素材が判断できる。また、指輪の外側にはかなりガタつきのある二本の直線が指輪の外周上に彫刻されている。掘り下げられた部分は銀本来の銀色とは異なり、黒色となっている。さらに、リングの右端から左端にかけて斜めの直線が彫刻されており、左右交互になっている。一部を除いて外周上のほぼ全体にその彫刻がなされている。こちらも銀本来の銀色とは異なり、黒色となっている。また、先述の二直線同様にガタつきある直線となっている。加えて、角度についても概ね 90 度前後だが、約 40 度の箇所から約 60 度の箇所までである。彫刻部分は一部の線が二重から三重となっている。重量は 2g 程度となっており、非常に軽い。指輪の中でも小型のものであることに加え、装飾は全て彫刻によって掘り下げられているためであろう。また、表面にコーティングなどはなく、銀素材そのままとなっている。

オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 2

本資料の所有者は大山漣斗であり、また表面の彫刻のデザインも所有者に同じである。本資料は所有者が小学校 6 年生の修学旅行の際に小樽市でものづくりを学ぶために行った活動の中で作成したものである。予め銀粘土を指輪の形に成形したものの中から右手小指に合う大きさのものを選択してもらった。そして、彫刻刀で溝を彫り、焼成したのち、いぶし液を流し込み硫化反応により黒化させることで作成した。リングの右端から左端にかけて斜めの直線が外周に彫刻されているが、一部だけ彫刻がされていないのはデザインをした大山漣斗の彫り方が不十分であったため、焼成後光沢を出すために磨く過程で消えてしまったためである。

また、指輪内側には修復の際に役立つという素材を示す刻印は中心に刻印されておらず、さらには斜めになっているため、美しさに欠ける。これは指輪の作り方を教えてくださった方が一つずつ完成後に刻印するのだが、修学旅行中につき多くの指輪に刻印をしなくてはならなかったということもあり、作業の速さを優先したがためのズレであるという。

イラストレーション (Illustration)



[図 - 2] は [図 - 1] を
180° 回転させた方向から見た図

コンディション・レポート (Condition Report)

外側表面、側面、内側表面でコンディションが異なる。これは所有者の手入れの頻度や、各部位への接触回数が異なることによる。

外側は最も銀色が強く、硫化はあまり見られない。これは所有者が消しゴムを用いて摩擦することで表面の硫化膜を落としていたためである。しかし、擦りキズが多く金属光沢はあるものの反射の程度はあまり良くない。何度かの落下や紛失をしたため、その際に付いた擦りキズであると思われる。

側面は硫化がやや進んでいる。頻度は外側に劣るがこちらにも消しゴムを用いて表面の硫化膜を落としていた。擦りキズのようなものが表面にあるがこれは指輪制作時の切断跡であるため、後に付いたものではない。

内側は指輪の内径が小さいこともあって消しゴムを用いて硫化膜を落としたことがない。また、素手で触ることも多かったため、かなり硫化が進んでいる。そして、擦りキズは基本的に見受けられないが、端にかなり多くの欠けがある。金属光沢を出すための作業でスプーンの背を用いて擦る過程があったことを思い出し、ティースプーンを内側に入れ、乱雑にかき回したことで多くの欠けを生じさせた。全体、彫刻部分の溝に少量の埃の付着が確認できるが、指紋や汚れ、変色はそのほかにはない。

リクワイアド・エンバイロメント (Required Environment)

銀粘土の焼成後はほぼ純銀となる。そのため、外からの強い衝撃によって変形しやすい。地震等の影響により物自体が移動し、この指輪に強い衝撃を与える可能性があるため、周囲に重たいものがある環境は避けるべきである。また、熱膨張を避けるため、長く保管されてきた所有者宅の平均温度である 20℃が適切である。銀は錆が発生せず、また乾燥によるひび割れも発生しないため、カビの発生を抑えるためにも湿度は 50%未満が好ましい。

銀は空気中の硫化物と結びつくと黒く変色するため、ガラスケース等に入れ、空気を遮断することで硫化を遅らせることが出来る。また、硫化の面からみても湿度が高いと硫黄分子が銀により早く拡散するため、やはり湿度は低いことが望ましい。

ハンドリング・インストラクションズ (Handling Instructions)

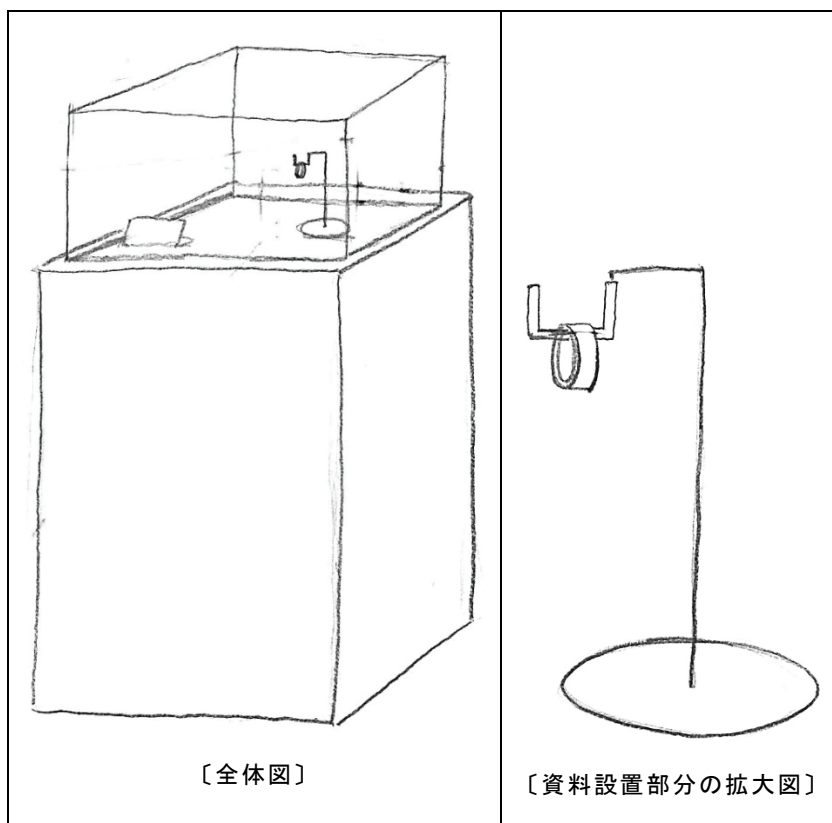
- ・ 皮脂の付着によって変色が進むので直接皮膚で触れないようにする。
- ・ 水気は錆の心配はないが変色を進めるため避けるべきである。また、汚れた水であると水垢が付着するため避けるべきである。
- ・ 過度な温度の変化は指輪を変形させるため避けるべきである。
- ・ 銀は燃焼しないが変形の原因となるため火気は厳禁である。
- ・ 博物館資料の保存としては変色しない環境設定が求められるが、諸事情により変色した際の対処として研磨を施す場合、粒子の大きい研磨剤を使うと表面にキズがつくため専用の研磨剤を用いて専門家による非常に弱い力での研磨が望ましい。
- ・ ほかの指輪（および資料）とまとめるとこすれ合い互いにキズをつける可能性がある。欠けや表面のキズへの対処は研磨のみである。そのため不要不急の研磨を避けるためにも一つずつ保管、移動すべきである。

エキジビット・マウント・デザイン (Exhibit Mount Design)

目線以下かつ目線からそれほど離れていない距離感を意識し、資料の高さは120cmとする。また、より多くの角度から資料を確認できるように台座に全面透明のアクリルケースを設置する。そして金属製の棒に下げることによって指輪の外側、内側、側面を展示し硫化の進行度の違いも展示する。なお、内側にある SILVER の刻印は必ず見えるように金属の棒に重ならないよう設置する。

金属製の棒に直接本資料を設置すると表面にキズ

が付く恐れがあるのでゴム質のような柔らかい素材で保護し、そこに下げる。そして、ラベル以外に余分なものは置かず、万が一指輪が落下しても指輪をキズつける要因となるものは設置しない。さらに、硫化の進行を極力抑えるため。アクリルケースと台座の接地面は柔らかいゴム素材を設置することで空気を遮断する。



〔全体図〕

〔資料設置部分の拡大図〕

レーベル (Label)

本資料は非常に小さく、色味もモノクロであるため、レーベルが華美であると資料を見る際の妨げになると考えた。レーベルもモノクロでデザインし、サイズも大きすぎないように縦 7.5cm、横 10.0cm と小さくした。

レーベル自体が小さいため解説の文字数は最小限とし、見やすくわかりやすいことを意識してデザインした。なお、解説文から分かるようにこのレーベルはいぶし加工と硫化について着目した資料であり、装飾品、工芸品、民芸品にみられる特異な加工に着目した博物館での展示を想定したものである。

シルバーの指輪

いぶし加工がされた銀素材の指輪。銀粘土により成形されたものである。いぶし加工とは人の手によって硫化反応を進め強い黒色を出し、風合いを出す加工のことである。

博物館資料ドキュメント 『眼鏡』

法学部法律学科 2 年 中野 夏花

オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 1

本資料は眼鏡である。レンズには度が入っており、視力の矯正を目的として使用される視覚補助具である。製作年代については不明である。販売元は JINS であり 2021 年 8 月 11 日より現所有者のもとにある。

本資料の外観は焦げ茶色であり、ネジ部分は銀色である。品番は「MMF-16A-176-84」である。製造国は中国である。本資料のサイズはレンズ横幅 52 mm、レンズ縦幅 29 mm、ブリッジ（鼻部分）17 mm、テンプル（サイド部分）143 mm であり、これらは資料本体に印字されている情報である。実測値としてフロント幅 135 mm、重量は 18.2 g である。レンズの球面の度数は右目 -3.50、左目 -4.00 である。

右テンプルの内側に白色で「MMF-16A-176UA 84 52□17-143○29 Made in China」
左テンプルの内側に薄茶色で「Designed in Tokyo」、白色で「J!NS」と印字されている。フレームの材質は金属であり、耳に当たる部分（テンプル先端部）のみプラスチックが用いられている。レンズの材質はプラスチックである。

オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 2

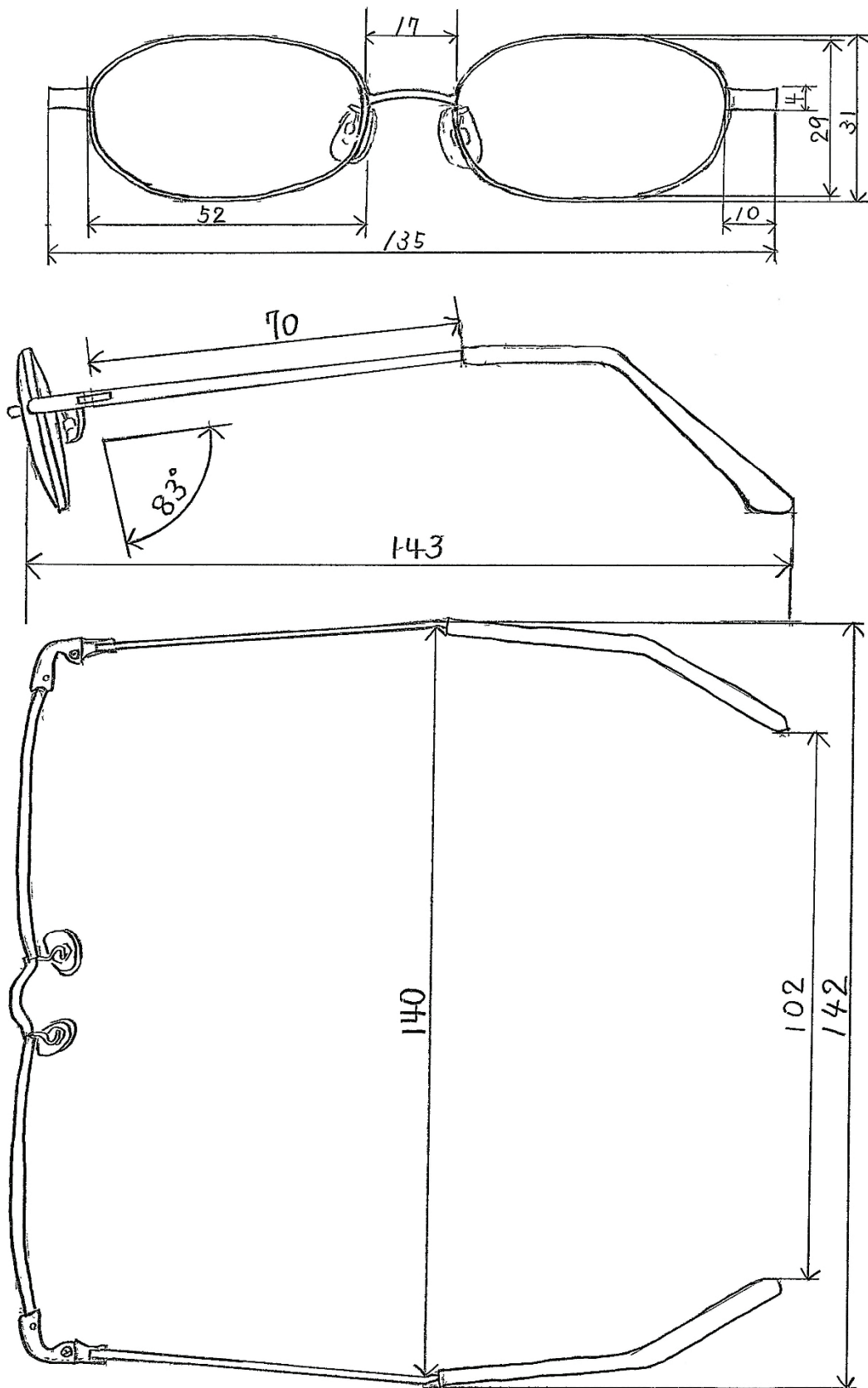
本資料は 2021 年 8 月 11 日に当時 18 歳だった所有者に対し、所有者の母が購入したものである。購入場所は JINS イオンモール札幌平岡店であり、購入価格は 5,500 円である。所有者は日常生活において常時眼鏡を使用しており、本資料取得後はほとんど毎日着用していた事実が確認できる。

使用中の事故として、2024 年冬に机上（高さ 72.5 cm）から落下させたことにより、左レンズ外側中央部に約 1 cm の線状のキズが生じた。当該のキズは視界に入り、使用上支障があったため修理するまでは所有者は別の眼鏡を使用していた。

2025 年 4 月 21 日には JINS 札幌ステラプレイス店にてレンズ交換及び鼻当て交換が行われた。鼻当て部分には緑青の発生が確認されており、これについては無償での対応がなされている。レンズについては保証期間を経過していたため、レンズ交換費用として 6,600 円を要した。交換されたレンズには特別なオプション加工は施されていない。

視力測定は同店舗で行われ、近視や遠視の度合いを示す球面度数は、右目 -2.75 から -3.50、左目 -3.25 から -4.00 へと変化しており、視力測定結果として、球面度数が変化した記録がある。なお、修理時点においては購入から 2 年以上が経過していたことから、店舗スタッフから修理ではなく買い替えが推奨された。本資料の後続にあたる、形状の近いモデルが当時販売されていたことが確認されている。

イラストレーション (Illustration)

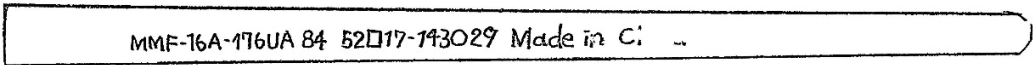


【単位：mm】 【倍率：100%】

コンディション・レポート (Condition Report)

本資料フレームの金属部分において、角部の塗装が剥離し、銀色の金属の地の部分が露出している箇所が確認される。また右テンプレの内側に印字されている「Made in China」のうち「n China」の部分が消失している。原因は特定できないが、当該部位はいずれも本資料着用中に直接顔面と接触する箇所ではなく、日常的な着脱動作や髪との接触による摩擦の影響である可能性が考えられる。

構造面においては、ネジの緩みは確認されず、テンプレの開閉動作は円滑であり、異音の発生も認められない。また、本体に欠け、ひび、曲がりなどの損傷、腐食は確認されない。劣化は主として塗装部分に限られている。



MMF-16A-176UA 84 52□17-143029 Made in C: ..

〔右テンプレ金属部分：内側〕

【倍率：200%】

リクワイアド・エンバイロメント (Required Environment)

本資料のフレームは主に金属素材が使用されており、塗装の剥離により金属地が露出している箇所が確認されている。現時点では腐食は確認されていないが、当該部位から腐食が進行するおそれがあるため、保存に当たっては相対湿度の上昇を避ける必要がある。

レンズ及びテンプレ先端部はプラスチック素材が使用されており、熱や物理的衝撃、擦りキズに弱い。特にレンズは透明であることから、熱や紫外線、水分の影響による変色や劣化が生じる可能性がある。またレンズにはコーティングがされており、経年劣化や熱により膨張し、ひび割れや剥離が生じるおそれがある。

以上の点から、本資料の保存にあたっては、急激な温湿度変化を避け、安定した温湿度環境を維持する必要がある。

ハンドリング・インストラクションズ (Handling Instructions)

本資料はレンズおよびテンプレの金属部分に指紋が付着しやすいため、取り扱いの際には手袋を着用することが望ましい。

テンプレの開閉は、構造部への負担を避けるため、無理な力を加えず、ゆっくりと行う。テンプレの折りたたみは左側から行うことが望ましい。

ほこりが付着しない環境での保存が求められるが、万が一、ほこり等の汚れを除去する必要が生じた際には、ほこりや異物が付着した状態での乾拭きには最新の注意を払う。レンズおよびフレーム表面に擦りキズを生じさせてしまうことがないように、必要に応じてブロワー等で異物を除去したうえで作業を行う。

持ち運びの際には、ネジ部分に過度な負担がかからないようテンプレを折りたたみ、ケース等の保護容器に収納することが望ましい。

エキジビット・マウント・デザイン (Exhibit Mount Design)

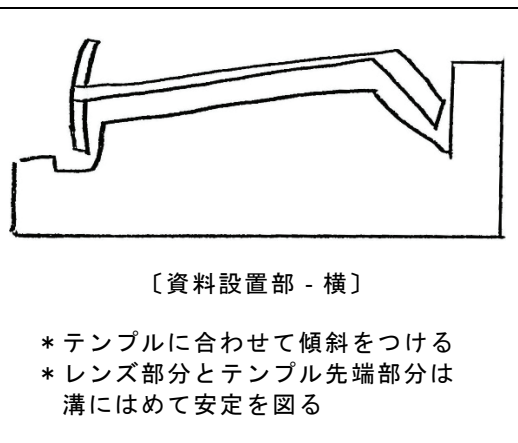
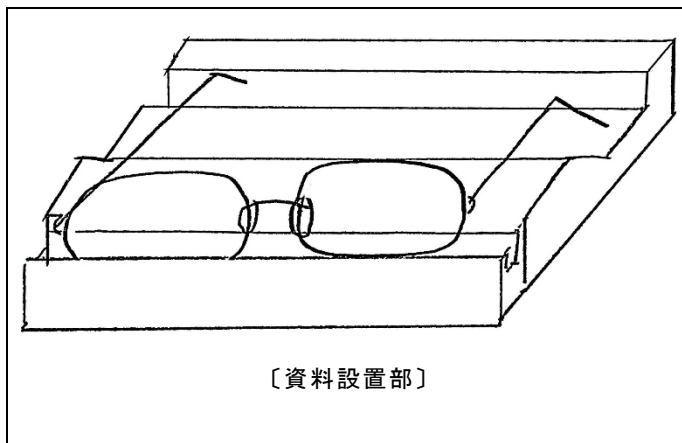
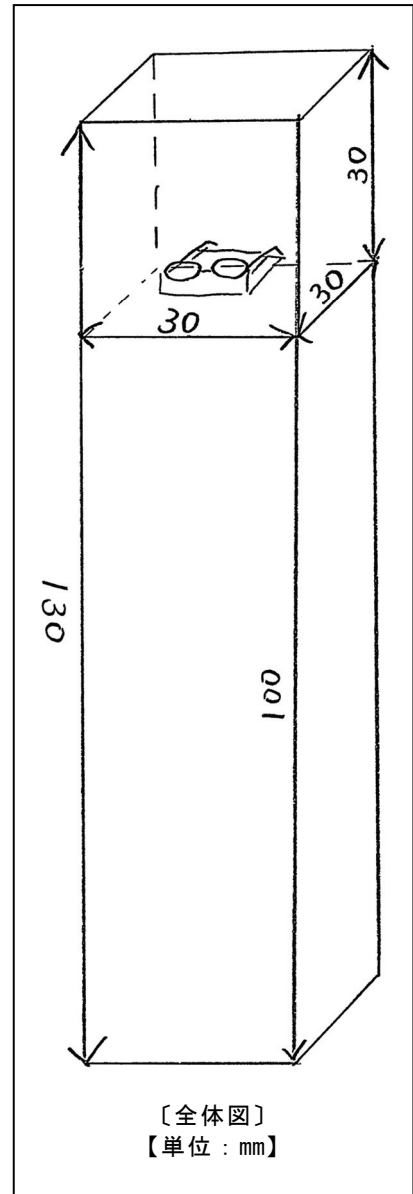
本資料は眼鏡であり、キズや摩耗を防ぐため、来館者が直接接触することのないよう、ケース内に収蔵・展示することが望ましい。特にレンズおよびフレームにはキズが生じやすいため、展示中の接触や振動を最小限に抑える必要がある。

また、本資料には金属およびプラスチック素材が使用されており、熱や急激な温度変化の影響を受けやすい。そのため、展示では照明による発熱や紫外線への配慮が求められ、照明位置や照度には十分留意する必要がある。

置き方については、保存のみを目的とする場合には、 temples を折りたたみ、レンズ面を上向きにして設置する方法が安定性および安全性の点から望ましい。しかし、展示資料として来館者の観覧のしやすさを考慮すると、 temples を開いた状態での展示が適している。

temples を開いた状態で直接置く場合、安定性の観点からは眼鏡を逆さに設置することが望ましいが、展示においては着用時の形態を来館者に伝えることが重要である。そのため、本資料については、台座を用意し、資料を固定し、上下はそのままに展示する方法が最も適切である。

展示台は、来館者が上方から容易に観察できるよう、高さ約 100cm の台座を使用し、その上に高さ約 30cm の透明カバーを設置する。展示スペースの大きさは縦・横ともに約 30cm とし、資料の視認性と安全性の両立を図る。



レーベル (Label)

本資料は、特別な歴史的イベントや著名人に由来するものではなく、日常的に使用されてきた眼鏡であるという事実そのものに資料的価値があると考え、その点を重視した。

説明文では、使用目的、入手元、使用履歴といった事実関係を簡潔に記載し、過度な解釈や装飾的表現は控えた。

レーベルのサイズは縦 80mm×横 150mm とした。

本資料である眼鏡の横に設置することを想定し、展示空間の中で主張しすぎず、かつ視認性を確保できる大きさとして、眼鏡ケースと同程度のサイズを基準に設定した。資料と並べた際に違和感が生じないことを重視している。

フォントには UD デジタル教科書体 N を使用した。本資料は「見やすくするための道具」である眼鏡を展示するものであるため、説明文においても、より多くの人を読みやすいユニバーサルデザインフォントを用いることが適切であると判断した。

文字サイズは以下の通りとした。

- ・資料名：20pt (太字)
- ・説明文：14pt
- ・所有者表記：12pt

眼鏡 (めがね、がんきょう)

視力矯正を目的として作成された眼鏡。販売元は JINS。

2021 年 8 月より所蔵者が使用している。

使用中に一度レンズ交換が行われており 2026 年 1 月時点では継続使用中であった。

所有者 中野夏花

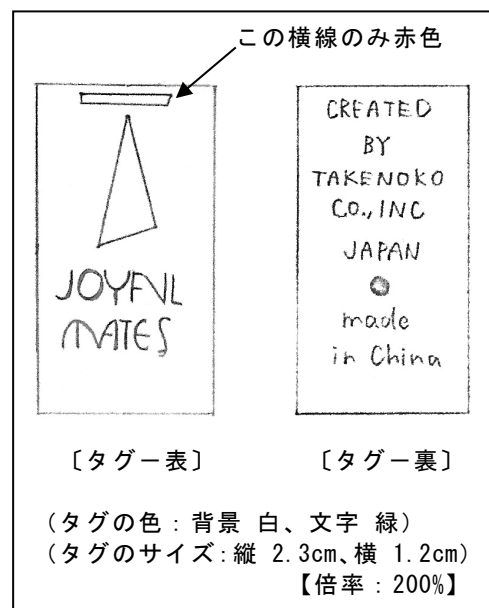
博物館資料ドキュメント 『ぬいぐるみ（ミズクラゲ）』

経営学部経営情報学科 1年 米谷 香澄

オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 1

本資料は、ミズクラゲを模したぬいぐるみである。大きさは約 9.5cm×10.0cm、重さは 57g である。クラゲの傘の部分は楕円体の形で、上から見ると円形に近いボリューム感がある。また、傘の上部にはミズクラゲの特徴である「胃腔」が四葉のクローバーのような模様としてプリントされている。楕円体の底部中央には吸盤があり、それを四方から囲むように、口腕を模した逆三角形のヒダ状のパーツが取り付けられている。さらに、正面中心部分にはプラスチック製のビーズの二つの黒い目が固定されている。加えて、資料の目の下にある細い線や影のように見える部分は白い糸による並縫いの縫い目であることが確認できる。なお、吸盤はシリコンゴム製と推察されるが、黄変が見られる。また、表面素材は手触りの良いソフトボア生地が使用されていると思われ、内部には綿が詰まっている。素材の検証として、ダイソーで販売されているぬいぐるみ用ボア生地を購入し比較したところ、毛の長さこそ異なるがその感触は一致していた。本資料は薄ピンク色であるが、その他にも、白色、水色、クリーム色、紫色、黄緑色のカラーバリエーションが存在することが確認されている。

本資料のタグは購入後に切り取ってしまったため、現物からの直接確認は不可能である。しかし、同一製品の色違いのぬいぐるみにあるタグの記載から、「JOYFUL MATES」「CREATED BY TAKENOKO CO., INC. JAPAN」「made in China」の情報が読み取れた。以上の点から、本資料は株式会社たけのこが展開する、JOYFUL MATES というブランドの製品で、中国産であることがわかる。なお、現時点において商品の販売は確認されておらず、正確な商品名は不明である。



オブジェクト・ディスクリプション・レポート(Object Description Report) - 2

本資料はミズクラゲをモチーフとしたぬいぐるみであり、所有者は米谷香澄である。入手場所は神奈川県にある新江ノ島水族館で、2012年10月12日撮影の写真に、本資料が写っていることから、所有者が5歳の時(2012年)に親に購入してもらったと思われる。当時は本資料である薄ピンク色のぬいぐるみの他、色違いの白色のぬいぐるみも同時に購入された。薄ピンク色の方には「ぴんたん」、白色の方には「しろたん」と名付けた。

購入当時、所有者はクラゲに関心があった訳ではなく、本資料の色や見た目に惹かれて選択したと思われる。本資料は約13年間にわたり所有されており、その間に著しい劣化が見られる。購入当初、所有者は外出時に持ち運んだり、窓ガラスに吸盤で貼り付けたりというように活発に使用していた。そのため、2017年に新江ノ島水族館で新たに購入された同色の個体と比較すると、本体の退色が顕著である。また、幼少期には石鹸を用いた手洗いが繰り返し行われていた。

内部の綿については、収縮によるボリュームの減少が著しかったため、購入から約5年後に所有者自身によって綿の追加補修が行われている。現在は直射日光の当たらない棚に保管されているため、近年の劣化速度は緩やかである。購入直後は口腕によって自立が可能であったが、現在は経年により口腕が外側へ開き、底部の吸盤が直接地面に触れる形状へと変化している。

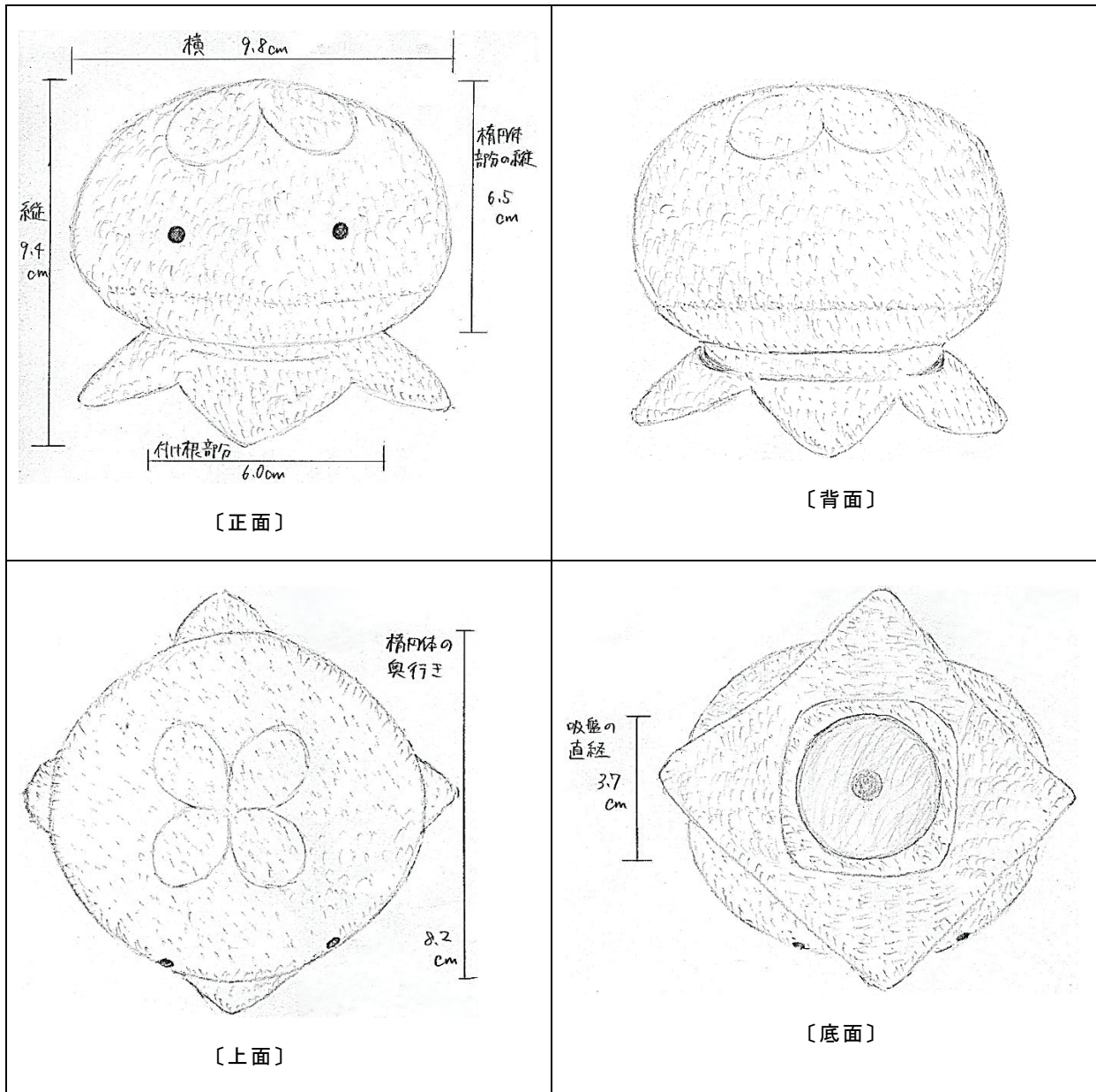
所有者は本資料との出会いをきっかけに、同シリーズの収集を行った。2013年に同じ種類の水色のぬいぐるみを同じく新江ノ島水族館で、2015年にクリーム色、黄緑色、紫色のぬいぐるみを通販で購入している。2017年に本資料と全く同じピンク色と、本資料と同時に買った白色を新たに新江ノ島水族館で購入した。

本資料は株式会社たけのこの商品である。JOYFUL MATES と検索すると、「たけのこ(TAKENOKO)ぬいぐるみ通販」のページを確認でき、「水族館グッズ・動物ぬいぐるみのお店まんぼう屋ドットコム」というサイトに繋がる。また、「TAKENOKO」と検索すると「TAKENOKO gift shop」が表示され、ぬいぐるみメーカー株式会社たけのこが運営するギフトショップであることがわかる。

《補足事項 (ミズクラゲとは)》

体色は透明～白っぽく、半透明の色をした寒天質の傘を持つクラゲである。傘は扁平な皿状をしており大きさは平均で直径10cm～15cmほどである。ミズクラゲは水族館などでもよく見かける認知度の高いクラゲである。ミズクラゲの体は、傘、傘の縁に生えている触手で出来ている。傘の内側にはハリボン状の口腕があり、傘の中央にある四葉のクローバーに見える部分には胃腔がある。

イラストレーション (Illustration)



(本体の色 : 薄ピンク色) 【倍率 : 100%】

コンディション・レポート (Condition Report)

本体から見た左側の目付近に 0.7cm と 0.2cm の赤い線状の汚れが認められる。また、本体から見た右側の目の下に同色の 0.1cm 程度の点状の汚れがある。これらは赤色のボールペンが接触した際に付着したものと思われる。2017年9月9日に撮られたぬいぐるみの写っている写真にはこれらの汚れが確認できないことから、それ以降に発生したと判断される。購入当初は滑らかな手触りであったが、現在は繰り返された洗濯の影響により生地にごわつきが生じ、弾力性が損なわれている。色味も本来のピンクから灰色がかった色味へと変化しており、下部の吸盤は黄変している。また、資料の頭上にあるピンク色の模様が、

本体から見て右後ろが消えかけている。構造面では、クラゲの口腕部分の綿がかなり縮んで購入時の半分ほどの厚さになっており、本体背面には綿を補充した際に直した白い糸が見えている。購入時は口腕部分で自立することが可能であったが、現在は口腕が完全に開いて吸盤が底についている状態である。資料に付いていたタグは取り外してしまったため無くなっている。

リクワイアド・エンバイロメント (Required Environment)

カビの発生を抑制するため、湿度は70%以上を避け、50~60%の範囲を維持することが推奨される。温度については、20度を超えるのを回避し、20度以下に保つことが理想的である。特に60度を超える高温環境下では、目のパーツに使用されているプラスチックが融解する恐れがあるため、厳重な注意を要する。直射日光や暖房器具、熱を発する照明が直接当たる場所では、熱と乾燥により生地質感が損なわれる。また、紫外線は不可逆的な退色の原因となるため、UVカット機能付きのケースやカバーを導入し、光の影響を遮断する必要がある。本資料は既に褪色が認められるため、今後は高温多湿を避け、遮光された冷暗所での保存を基本とするべきである。

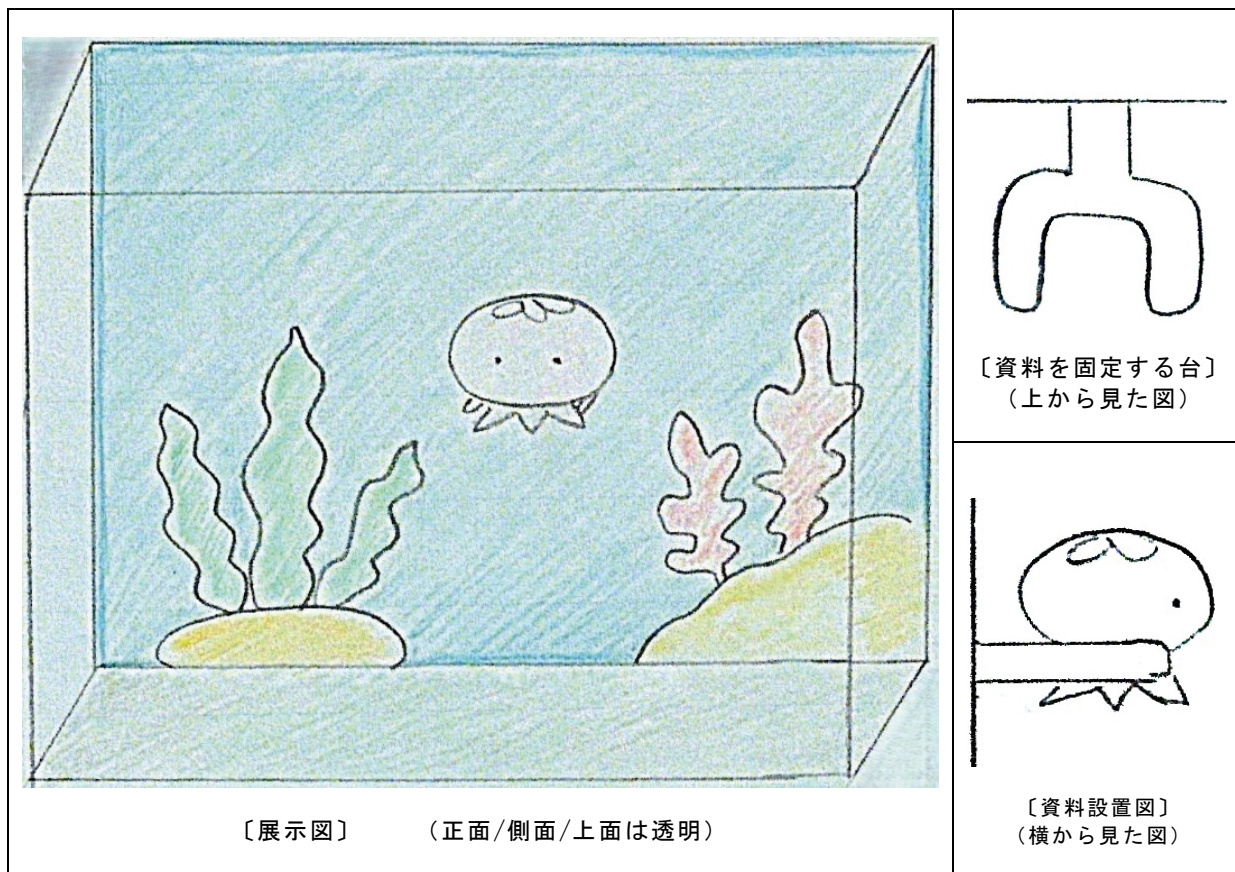
ハンドリング・インストラクションズ (Handling Instructions)

手垢などの皮脂汚れの付着を防止するため、資料を移動・搬送させる際には必ず手袋を着用する必要がある。また、底部に配された吸盤は経年劣化により脆弱化している恐れがあるため、吸盤部分のみを持って本体を持ち上げる行為は、亀裂や破損を招く危険性があり厳禁である。内部の綿繊維は、水分を吸収すると膨張し、乾燥過程で繊維が密着することで全体の収縮を招く特性がある。そのため、水に濡らす洗浄の必要がないような保存が求められる。表面に埃の付着が確認された場合は、表面の埃を払う程度の清掃に留めるのが望ましい。本資料は過去に所有者自身による綿の追加が行われているが、縫合糸が露出するなど良好な状態とは言い難い。今後、復元をする場合には、専門家に依頼し、適切な処置を施すべきである。

エキジビット・マウント・デザイン (Exhibit Mount Design)

生き物のぬいぐるみを中心とした展示を想定し、その中でも海の生き物を扱うセクションを設ける。ショーケース内に海をモチーフとした青い背景を用い、厚紙などで作成したサンゴ礁や海藻を配置する。正面/側面/上面が透明な展示ケースを用い、正面だけでなく上と横からも鑑賞できる構造とする。資料は、U字型のフックにはめ込む形で固定する。

もう一つの展示ケースには、色違いの個体を同様に配置する。展示ケースの底面は、展示室の床から100cmの高さとし、子供が見やすい高さとなるよう配慮する。また、展示用のライトには紫外線を発しないものを使用する。



レーベル (Label)

ぬいぐるみを中心とする展示で本資料を使用することを想定し、資料名を「ミズクラゲ」とした。フォントには、ぬいぐるみの形と同じような、丸みを感じられるHG丸ゴシックM-PROを使用した。背景色は資料本体の色に合わせて薄いピンクに、フォントの色は見やすさを考慮してややグレーがかった色に設定した。資料名のフォントサイズは36ptで太字とし、本文は12ptおよび16ptを用いている。

ミズクラゲ

製造元：株式会社たけのこ
製造場所：中国産

販売時期：2012～2017年頃（推定）
購入場所：新江ノ島水族館
販売額：750円（推定）

クラゲの中でも、日本の水族館でよく見られるミズクラゲをモチーフとしたぬいぐるみである。ミズクラゲの特徴である四葉のクローバーのような模様がプリントされ、底部には吸盤がついている。素材には手触りの良いソフトポア生地が使われており、内部には綿が詰まっている。本資料は薄ピンク色であるが、他に白、水色、クリーム色、紫色、黄緑色のカラーバリエーションが存在することが確認されている。

所有者 米谷香澄

博物館資料ドキュメント 『フェキくんソフトクリーム容器』

人文学部日本文化学科学科 1年 村上 遥

オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 1

本資料は“フェキくんソフトクリーム容器”であり、所有者は村上遥である。不易糊工業株式会社のマスコットキャラクター「フェキくん」をモチーフとしたソフトクリーム用容器である。フェキくんは黄色い顔と赤い帽子が特徴的な人形型のキャラクターで、本容器においてもその意匠が立体的に再現されている。素材は主にプラスチックで、食品容器として使用されることを前提に、軽量かつ成形しやすい素材が用いられていると考えられる。容器上部にはキャラクターの帽子が配置され、頭部がカップとして機能する。見た目のインパクトが強く、飲食物を入れるための容器でありながら、玩具・雑貨的要素を併せ持つ。

容器には、フェキくんを象徴する黄色を基調とした配色が用いられることが多く、視認性が高い。また、正面に顔がくることで、手に持った際に自然とキャラクターが正面を向く構造となっている。ソフトクリーム提供時には上部からソフトクリームが盛り付けられ、容器が“キャラクターの身体”のように見える点が特徴である。

食品容器としての役割だけでなく、食後も持ち帰りやすく、コレクション性が高い点から、記念品としての性格も強いと考えられる。

フェキくんは本来、でんぷん糊の容器として長年親しまれてきた存在であり、本資料はその文具用容器の形態を食品容器へと転用した例といえる。実用性に加え、キャラクター文化や企業ブランディングを反映した資料としても位置づけられる。

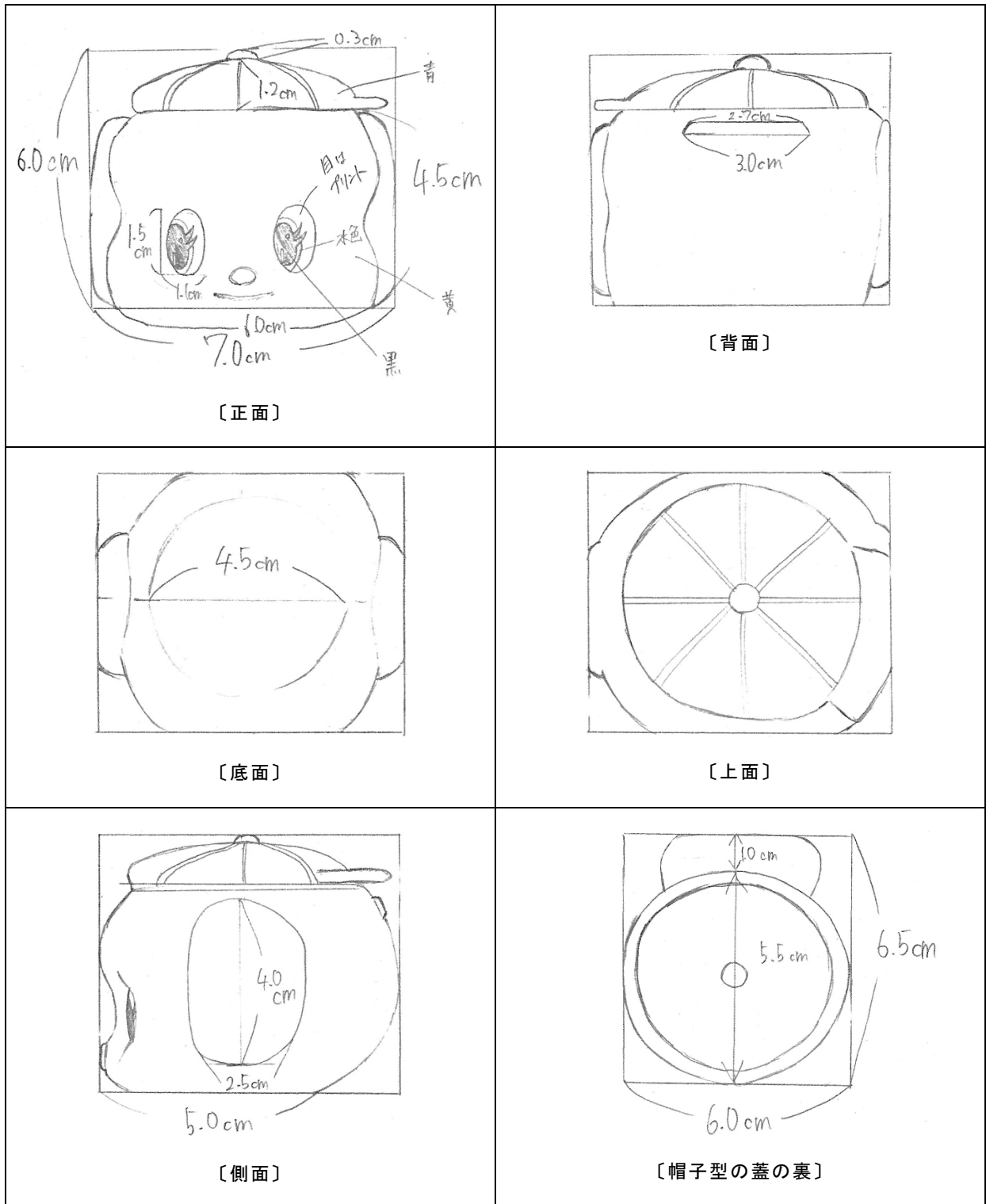
オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 2

本資料は、所有者が2026年1月3日に大阪観光した際に心斎橋 PARCO の9階に常設しているフェキショップで購入したものである。自宅で小物入れとして利用している。

フェキソフトクリームとは、フェキくんと帽子の色を自由に選び組み合わせた容器にソフトクリームを巻くことが出来る商品のことである。所有者は黄色のフェキくんの容器に青い帽子を選んだが、イヌ・ウサギ・ゾウなどの動物をモチーフにしたものも選ぶことが出来た。自分好みにデザインを決められることが商品の醍醐味であるにもかかわらず、妹と全く同じ組み合わせでお揃いにしたことが思い出である。

小物入れとしては餡を入れることで使用している。まだ購入して日が浅いため本資料にまつわるエピソードが少ないため、これから思い出が増えていけばいいと考えている。

イラストレーション (Illustration)



【倍率：100%】

コンディション・レポート (Condition Report)

本資料は、ソフトクリームを提供に実際に使用された食品用プラスチック容器であり、使用痕が確認される。購入してから1ヶ月も経過していないため、目立った亀裂や大きな欠損など、構造的な破損は確認されない。しかし、内部には洗浄による水跡や、内容物が接触していたことによる微細な擦れが見られる可能性がある。

外観においては、表面全体に細かな擦りキズが点在しており、これは使用時および保管・運搬時に生じたものと考えられる。また、プラスチック特有の経年劣化として、全体的に光沢がやや失われている。特に、フェキくんの象徴的要素である黄色の顔部分および青色の帽子部分は、直射日光や照明の影響を受けやすく、わずかな退色の兆候が認められる。

印刷や彩色部分については、剥離や著しい色落ちは見られないものの、今後の保存環境次第では退色や変色が進行する可能性が高い。

食品容器としての役割を終えた後、特別な保存処置は施されていないため、生活資料としての使用履歴が外観に反映された状態であると言える。

リクワイアド・エンバイロメント (Required Environment)

本資料はプラスチック製であるため、高温環境に弱く、変形や劣化を防ぐために常温かつ安定した温度環境での保存が求められる。特に直射日光や紫外線は、素材の脆化や彩色部分の退色を促進する要因となるため、遮光された環境での保管が望ましい。

湿度については、木製資料ほどの厳密な管理は必要としないものの、高湿度環境では埃や油分を含む汚れが付着しやすくなる。そのため、極端な湿度変化を避け、清潔で乾燥した空間で管理することが適切である。

展示の際には、資料への影響が少ないLED照明を用い、照度や照射時間を抑える配慮が必要である。長期間展示する場合は、休止期間を設けることで、光による劣化の進行を抑えることができる。直射日光や紫外線は変形や退色の原因となるため、暗所での保管が適切である。

また、湿度が極端に高い環境では、表面に汚れが付着しやすくなるため、乾燥した清潔な空間での管理が求められる。展示の際には、照明による熱や紫外線を考慮し、LED照明など資料への影響が少ない光源を使用することが望ましい。

ハンドリング・インストラクションズ (Handling Instructions)

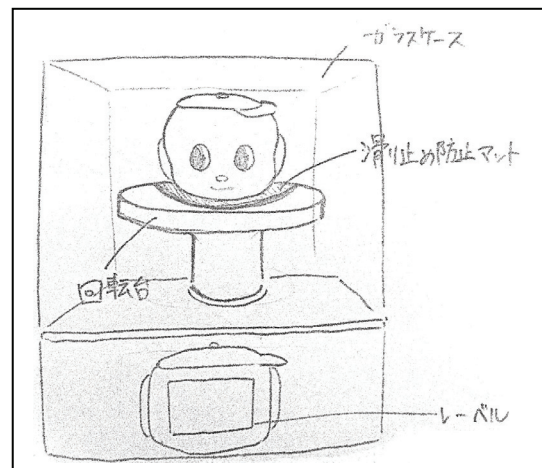
本資料を取り扱う際は、プラスチック素材の劣化や破損を防ぐため、強い力や圧力を加えないよう注意する必要がある。特に、顔や帽子など立体的に成形された突起部分は力が集中しやすく、破損の恐れがあるため、持ち上げる際は胴体部分を両手で支えるようにする。

移動や運搬の際には、緩衝材を用いて全体を保護し、他の資料や硬い物体と直接接触しないよう配慮することが望ましい。重ね置きは変形の原因となるため避ける。

汚れが付着しない環境に保存するのが必須であるが、万が一、汚れが付着した場合は、専門家に相談の上、乾いた柔らかい布、もしくは軽く湿らせた布で表面を拭き取る程度にとどめ、硬いスポンジや研磨剤やアルコール、強力な洗剤の使用は避ける。資料としての活用、および保存処置の後には、再び遮光された保管環境に戻すことが重要である。

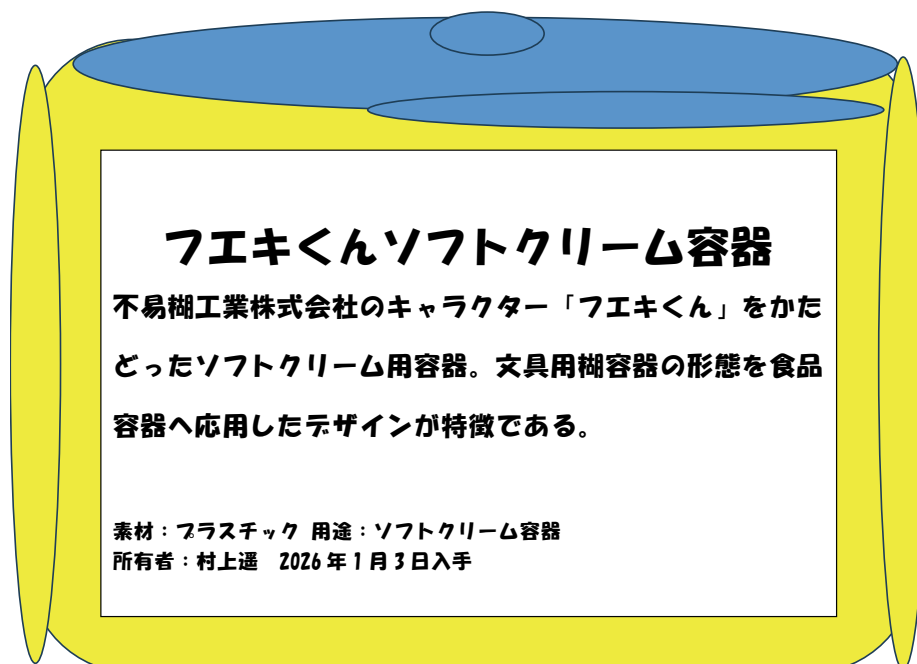
エキジビット・マウント・デザイン (Exhibit Mount Design)

展示中に素手で触られないようにするため、透明のケースに入れての展示を推奨する。照明を資料の真上から照らすことを考えているが、紫外線と熱を発生させないものが求められるため、前述したようにLED照明を用いる。本資料の綺麗に丸まったフォルムをアピールするため、滑り止めマットを敷いた回転台に乗せて展示しようと考えている。レーベルは展示ケースの台に取り付ける。



レーベル (Label)

レーベル全体のデザインをフェキくんモチーフにし、形状と配色を揃えるようにした。ポップな字体を用いて容器のキャラクター性の強さ、高い視認性、子供から大人まで愛されるフェキのりのイメージを表現した。



博物館資料ドキュメント 『猫型の金時計ストラップ』

人文学部日本文化学科 1年 安田 菜々美

オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 1

この資料は時計である。バックなどに着けることができるストラップ型の時計であり、時計本体にチェーンでカラビナが接続されている。電池はすでに切れ、動かなくなっており 10 時 10 分 26 秒で止まっている。

時計の全体の形は、座った猫の形になっており、『おすましキャット』などの総称で呼ばれることが多い。全体は金色であり、表側には猫の首元に赤いリボンが描かれている。猫の身体を中心に円形の窪みがあり、12 を一番上として、時計回りに 1~12 の数字がふられた文字盤が入られている。その上に、中心を要として、チェスのキングの形の短針、クイーンの形をした長針、細長い直線の秒針が重ねられている。文字盤の上部には筆記体で『Elite』というメーカー名が書かれており、下部にはクォーツ時計であることを表す『QUARTZ』の文字が書かれている。

裏面には時計部分の裏側に電池部分が入っている円形の銀色の部分があり、『STAINLESS』『STEEL BACK』『JAPAN MOVT』『KD』と書かれている。全体の金色の部分がステンレスであり、裏面の銀の部分がスチールであることを表している。『JAPAN MOVT』で、時計の機械部分が日本で作られていることがわかる。『KD』については、調べても分からなかった。

下部にリューズと呼ばれる 0.2 cm 程の突起が付いており、これを引き出すことで長針が動き、時計の時間を調整できるようになっている。時計部分には透明な樹脂のようなものが嵌っており、視認性が良く、針もこれによって保護されている。

ストラップ全体が劣化で、金色が薄くなっており、特に端の方はくすんだ銀色に変色してしまっている。ところどころにキズが見られ、頭部と足の部分には特に目立つ損傷があり、リボン部分の塗装も中央部が剥げている。

カラビナ、接続部品、猫型の時計本体全てを含めた全長が 10.5 cm。カラビナが 3.8 cm で、接続部品が 2.7 cm である。時計部分の縦の長さが 4.5 cm、胴体部分の横幅が 3.0 cm、しっぽまでの横幅だと 3.5 cm、頭部の横幅は 1.5 cm となっている。首元のリボンは横幅 1.2 cm、縦幅 0.5 cm で、下から 2.5 cm の位置に描かれている。短針の長さが 0.5 cm、長針の長さは 0.6 cm、秒針の長さは 0.9 cm である。厚みは 0.5 cm で、縁部分は丸みを帯びており、端に向かうにつれて緩やかに薄くなっていく。重さは 35.0 g で、手に持つとずっしりとした重みを感じる。

オブジェクト・ディスクリプション・レポート(Object Description Report) - 2

この資料は現所有者が約 10 年前、北海道北広島市にある『インターヴィレッジ大曲』というショッピングモールで母親に購入してもらったものである。当時 8 で小学 3 年生であった所有者が、テナントの雑貨店で、ストラップコーナーに掛かっていたこのストラップ型の時計をととても気に入り、購入するに至った。一階入り口付近にあった店舗だが、正確な店舗名は不明である。

当時の正確な値段は不明だが、1,000 円程度だったと記憶している。インターネットで検索したところ、同じものは見つからなかったが、類似品が 700 円～1,200 円程度で販売していたため、当時も同程度の値段であったと考えられる。

所有者は、購入した直後から所有していたカバンに常につけていたため、かなり傷や劣化が目立つ。特に、全体の縁の部分の劣化が激しく、所有者に物を握る癖があり、手元にあったこの時計を握っていたためと考えられる。特に握りやすい猫のしっぽ、足部分の窪みは色あせている。所有者がこの時計をととても気に入った理由は、当時猫に関心を持っており、この『おすましキャット』と呼ばれる、猫が座った形のものをよく気に入って使っていたからだと思われる。

時計部分は、所有者が 11 歳の小学 6 年生時までは稼働していたのを確認できているが、それ以降は不明である。13 歳の中学 3 年生時には停止しているのを確認したため、この 3 年間の間に電池切れで停止したと思われる。

この時計のカラビナ部分は、長い間つけていた割にはキズが少ないのは、カバンの金属部分ではなく、革部分の柔らかい場所に着けていたからだと思われる。

この時計の時間を調整するための突起部分（リューズ）を引き出すのがとても難しく、所有者は買った当時の時間の調整にかなり苦戦した。引き出すと、長針部分が動くようになり、右に回すと時間が戻り、左に回すと時間が進む。秒針は動かすことができないため、26 秒から動くことはない。突起を押し戻すと、どれだけ回しても時間は変わらなくなる。そのため、所有者はリューズを引き出さずにこの部分を回して遊んでいた。

リクワイアド・エンバイロメント (Required Environment)

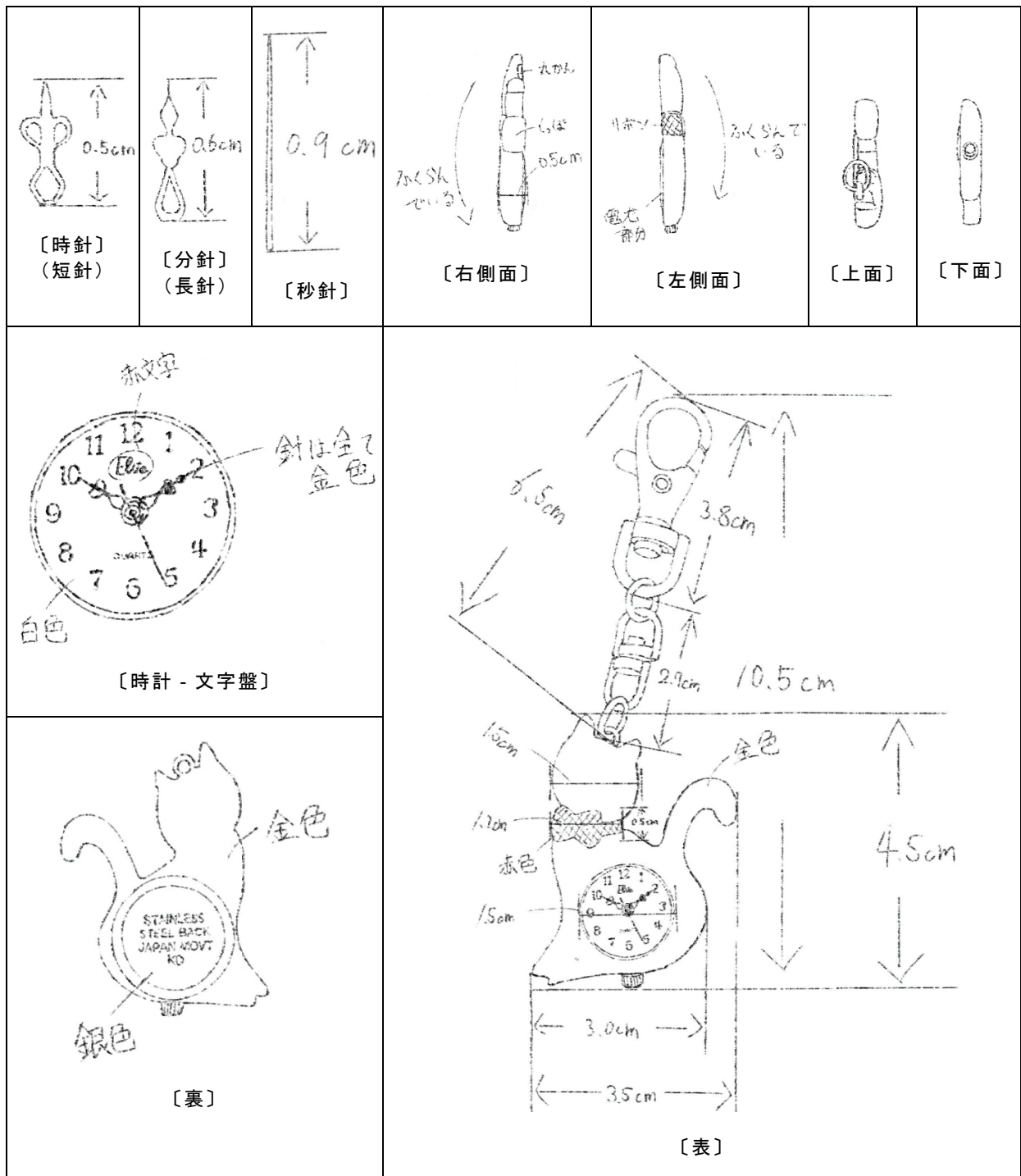
このストラップのほとんどがステンレスでできており、さびにくい素材にはなっているものの、他の金属同様湿気に弱い。そのため、加湿器の近くにや水気の多いところには、必要以上に置かないことが推奨される。濡れてしまった場合にはすぐに拭き取ればさびることを防ぐことができる。また、裏面のスチール部分も同様に湿気に弱く、キズなどから赤さびが進行する可能性も考えられる。そのため、多湿の場所よりは乾燥した場所の方が保管に適している。また、塩分には特に弱いため、汗などにも注意し保管する必要がある。

接続部分に回転する部品があるため、ほこりが多いところに置いていると、ほこりの蓄積により、回転が悪くなる可能性がある。そのため、ほこりについては細心の注意を払っての保存が求められる。

時計の樹脂部分は、詳細な材質などは不明だが、直射日光に当て続けると黄色く変色したり、視認性が悪くなったりする可能性もあるため、作業中であっても直射日光に直接当てるのは避ける。

また、この時計の電池はボタン電池と考えられ、劣化で液漏れしてくる可能性があるため、電池は時計本体から取り外して保存する。

イラストレーション (Illustration)



コンディション・レポート (Condition Report)

購入当時は、鮮やかな金色であったが、長年ストラップとして付けていたため、損傷が見られる。ステンレスであるゴールド部分の色が薄くなり、シルバーのような色味が強くなっている。とくに、カラビナ、チェーン部分と、猫部分の端がかなり変色している部分が見られる。(図①)

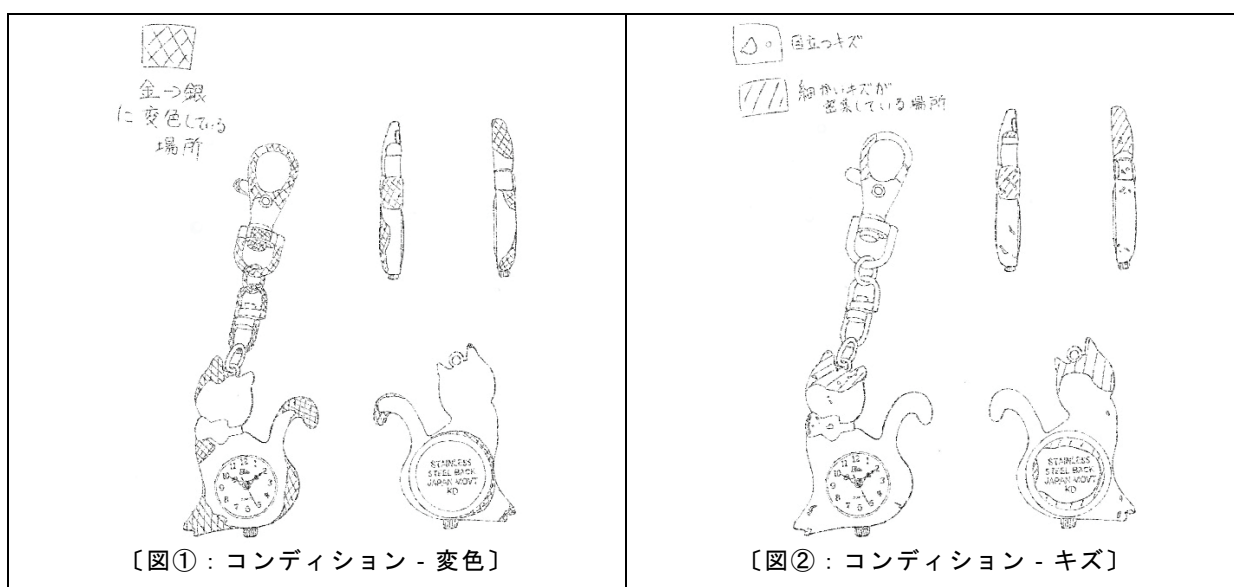
その他にも、ぶつけた際や、持ち運びの際にキズがついたとみられ、特に猫の頭部の損傷がひどい。表裏どちらとも細かいキズに覆われ、発疹のようになっている。猫の足の部分に最も深いキズがあり、黒い下地のようなものが見えており、かなり深くえぐれてしまっている。猫のリボン部分のキズは、表面の赤い塗装も剥げており、キズがある部分は金色の部分が見えてしまっている。リボンの部分は衝突のキズだけではなく、摩擦による劣化で剥げてきたとも考えられる。(図②)

直射日光はあまり当たっていないが、カーテン越しの日光や、LED ライトには長期間さらされており、光による目立った損傷は見られないが注意が必要である。ほこりの多い場所に置いてあったため、ほこりの付着による若干のべたつきがみられる。目に見えるほこりはなく、ストラップの接続部分の動作にも支障はない。

電池はすでに切れており、時間は 10 時 10 分 26 秒で止まっている。リユーズによる時間調整の動作には問題がなく、リユーズを引き出し回転させることで停止した時間を変えることができる。

カラビナは長期使用による歪みでかみ合わせが悪くなっており、0.1 cmにも満たない程度の隙間が開いている。ただ、開け閉めなどの動作には全く支障がなく、ストラップとしての使用が可能になっている。接続部分も問題なく回転し、ストラップの前面を簡単に向けられるようになっている。

スチール部分が若干膨張しているのが見受けられ、内部でボタン電池が膨張している可能性が高く、いつ液漏れが起こってもおかしく無い状態である。



ハンドリング・インストラクションズ (Handling Instructions)

カラビナおよび接続部分に細く、複雑で細かい作りが見られるため、強い衝撃が加わると変形し、正常な動作を行えなくなる可能性がある。そのため、落下や不注意でぶつけることがないように、細心の注意を払う。

また、時計部分もかなり硬くはあるが、実際にキズがついていることから決して衝撃には強くないため、雑な扱いや、尖ったものに当てるなどの行為は避ける。

金属部分に変色が見られるように、素手で触ることを繰り返していると、スチール部分の金色がくすみ、銀色に変色する反応が進む可能性があるため、素手で触るのは極力避けた方が良い。素手で触った際には、すぐに皮脂などが残らないようにやさしく拭き取ることで対策する必要がある。

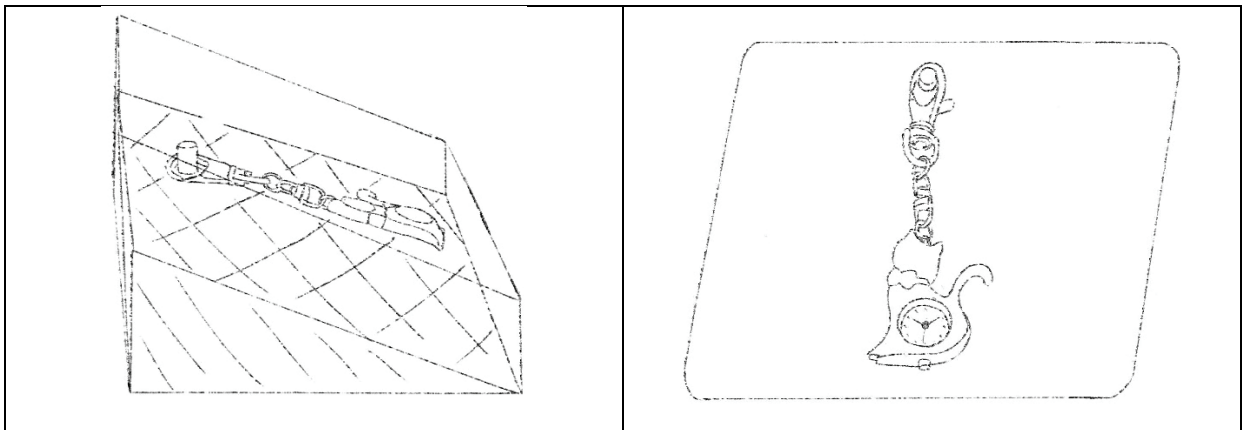
接続部分は、強く引っ張ると変形する可能性があるため、時計の自重以上の重さは極力かけない方が良い。カラビナの口が開いてきてしまっているため、その部分にかける負担には注意するべきである。

エクジビット・マウント・デザイン (Exhibit Mount Design)

ぶら下げ続けているとカラビナ部分や、接続部分が歪んでしまうことが懸念されるため、若干斜めにした状態で展示する。この資料はストラップであるため、完全に平置きにするのは本来の使用法と乖離してしまうため、傾斜のある土台に置き、カラビナや接合部分の負担を減らす。加えて、傾斜をつけた台に置くことで、見る人が真上から覗き込まなくても見やすくなる。

人の唾や、ほこりがついてしまうと劣化の原因になると考えたため、視認性の良い透明の展示ケース内での展示とする。展示ケース超しではない方がリアリティが増すかもしれないが、猫やかわいいものが好きで、触りたくなってしまいう小さい子供が触れてしまう可能性が増してしまうため、やはりケース内での展示が適切であると考えます。

斜線部の土台は、沈まない程度の柔らかさがある素材のものを想定している。土台の色については、金色が映えるよう、暗い色を用いる。



レーベル (Label)

資料全体が金色で、猫をモチーフとしており、上品なイメージを伝えたい。「上品な猫」というイメージの猫の一種としてロシアンブルー等が挙げられると考え、ロシアンブルー等の毛色に近い色を取り入れた。フォントについても浮ついた印象を持たせないように大人っぽい印象のものを選択した。

内容は、多すぎると読む気が失せる人が多いと感じたため、3つの項目に簡潔にまとめている。この資料に目を留める人は、猫好きや女性が多いと予測し、時計よりも猫に焦点を当てた説明にしている。

文字サイズは、多くの人が読みやすく、凝縮された印象を受けないように、空白部分も意識して体裁を整えた。

ひと目で、カワイイもの、猫がモチーフであるとわかるように、簡易的な猫耳をつけている。説明を読まない小さな子供も、猫であるとわかるようになっている。

『猫型の金時計ストラップ』

ユニークな形の時計を多く販売している「Elite」
が 2015 年に販売していた時計

足をそろえて座る、おすました猫の姿はとても人気
現在でも類似品が販売されている

時計が止まってしまっても、インテリアとして
飾ることもでき、女性人気が高い

2026年1月26日時点 所有者：安田菜々美

編集後記

本学の博物館実習生（「博物館実習ⅡB」）たちが野外博物館北海道開拓の村（旧開拓使札幌本庁舎ビジターセンター）で、日頃の研鑽の成果を実際の展示に応用できるように努力を重ね、新展示をオープンさせた（2025年12月28日まで開催）。今回の展示テーマは「北海道の冬の暮らし」で、厳寒の北海道に暮らす道民の衣食住や娯楽にフォーカスした内容となっている。

一方、小樽市総合博物館（運河館）では、博物館実習生（「博物館実習ⅡA」）たちが、エントランス展「モノクロ写真に記憶で彩りを」を企画・準備してオープンさせた（2026年3月31日まで）。写真家である兵庫勝人氏が小樽市内で撮影した昭和50年代の写真と現在のまちなみを比較し、市民からの思い出を収集する参加型の展示である。

これらは大学HPのニュース・お知らせ欄のカテゴリー「学生の活躍」でもすでに紹介されている。

<https://www.hgu.jp/info/news/20251218-02.html>

<https://www.hgu.jp/info/news/20260116-01.html>

常日頃から学生たちの指導に当たられた中島宏一北海道開拓の村館長と石川直章小樽市総合博物館館長および蟬塚咲衣同館学芸員には、この場を借りて心よりお礼申し上げたい。今回のように学生が博物館展示で活躍する機会は、今後も大学HPで取り上げていく所存である。



写真1 展示作業終了後の内覧会
北海道開拓の村ビジターセンター



写真2 エントランス展での展示作業
小樽市総合博物館運河館